元総社明神遺跡Ⅶ

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1989

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社明神遺跡Ⅶ

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

例　　言

1．本書は、前橋市都市計画事業元総社西部第三明神地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡の略称は、63A32とする。

3．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4．発掘調査の要領は、次の通りである。

調査場所　前橋市元総社町地内

調査期間　昭和63年5月18日～10月17日

整理期間　昭和63年10月18日～平成元年3月25日

調査担当者　駒倉秀一　鈴木雅浩

5．本書の編集及び執筆は、担当者が討議により分担した。遺物整理、図面整理、図面作成、遺物写真等は、担当者および整理作業員が分担して行なった。

6．調査ならびに本報告書作成にかかわった方は、次の通りである。記して感謝する次第である。

相田　昌子　石井　昭　石田　洋子　岩木　佳代　岩木　操　大田　一郎
小川　悦子　金井福治郎　岸　フクエ　小林　延寿　小鮒　智紀　駒形　邦子
佐藤　忠重　白井　和子　住谷　文彦　関根　政一　富沢　清八　巾　千恵子
原沢　政雄　堀川千恵子　松本加代子　真庭　トシ　宮原　麻吉　湯浅たま江
湯浅　道子

7．本書作成にあたり次の方々に御教示を賜った。記して感謝する次第である。

綿貫　綾子、大西　雅広、岸田　治男、大江　正行、木津　博明

8．執筆分担は次の通りである。

駒倉　秀一　II　V　VI(2)　VII

鈴木　雅浩　I　III　IV　VI(1)

尚、遺物観察表は綿貫綾子氏に、陶磁器観察表は大西雅広氏に、瓦観察表は大江正行氏、木津博明氏に協力を得たものである。

9．fig19～30については、過年度の報告書も合わせてまとめたものである。

fig17、18、32については、昭和62・63年度に出土したものをまとめたものである。

凡　　例

1．遺構の略号は次の通りである。

H…土師器使用竪穴式住居址　B…掘立柱建物址　D…土坑　I…井戸址　W…溝状遺構

2．挿図図版の縮尺は次の通りである。

(1)　遺構

住居址→1/80　竈→1/40　土坑→1/80　溝→1/80　井戸址→1/80　建物址・畝状遺構→1/80　遺構全体図→1/200

(2)　遺物

土師器、須恵器、瓦1/4　石臼、石塔類→1/8　紡錘車、古銭→1/2

3．遺構挿図中に記した断面基準線は標高で表した。

4．遺構挿図中に示したN方位は、座標北である。

5．遺構及び遺物挿図中の記号は次の通りである。

遺構

焼土範囲　炭化物　地山

遺物断面

酸化焔焼成　還元焔焼成　陶磁器

遺物表面(内外面)

炭化物油焔二次焼成　赤色塗彩　施釉部分　黒色処理添付着

目　　次

例　　言

凡　　例

I　発掘調査に至る経過……1

II　遺跡の周辺環境……3

1．立　　地……3

2．周辺遺跡……4

III　発掘調査の経過……6

1．調査方法……6

2．調査の経過……7

IV　基本層序……9

V　遺構と遺物……10

1．全体の概観……10

2．住 居 址……14

3．井 戸 址……24

4．溝　　址……25

5．耕作状遺構？……25

6．土　　坑……26

VI　ま と め……27

VII　国府調査のあゆみ……29

挿　　図

fig　1～10　遺構
11～18　遺物
19～22　時代別住居址一覧図
23　住居址一覧表
24～30　時代別遺物
31　①～③　遺物観察表
32　①～④　瓦観察一覧表

写真図版

PL　1　遺跡遠景
2　遺跡周辺
3～8　遺構
9～13　遺物
14　国府調査のあゆみ

Ⅰ　発掘調査に至る経過

元総社地区は、古くから、上野国府跡地といわれ、今日まで機会あるごとに発掘調査が行なわれてきている。古くは昭和36年の群馬大学による、元総社小学校校庭の発掘があり、掘立柱建築遺構を検出している。更に昭和41年には上野国府調査委員会による調査があり、元総社地区の東隣の大友町村山等において、７～13世紀の生活面・掘立柱建築遺構を検出、「この方八町の中央北端部は前に記した主要道路と推定される細長い地割が突き当る位置で、周囲に比べるとやや高く東西230m、南北230mのほぼ２町四方で国衙跡と推定される部分である。」（昭和41年度上野国府跡発掘調査概報）としている。更に42、43年と調査は進み、いわゆる国府との条件に合わないものをけしていく「消去法」により、次第にその位置の推定範囲を絞ってきた。

昭和48年になると「都市計画道路（中央大橋線）の変更に伴う埋蔵文化財の現地調査依頼」が前橋市都市計画課長より前橋市教育委員会教育課長あてに出された。市教委はこれをうけて同年10月中旬、元総社地区遺物分布調査を実施。この47.1haの表面採集により、土師器、須恵器、布目瓦等の散布状態が確認された。それによれば①「土師器、布目瓦散布」地形が②「土師器、須恵器散布」とほぼ同じ面積を占め、他の③「土師器、須恵器、灰釉陶器散布」④「土師器散布」より大きい割合になっている。そして①の地区は元総社市街地の北面から南西にかけて多いことがわかる。このことからその①にみえる地域が官衙中心地とも読みとれるのである。

その後、昭和53年９月、前橋市長より教育長宛に「元総社地区区画整理事業（仮称）に係る埋蔵文化財の取扱い」について、意見を求めてきた。つまり区画整理を行なう場合の文化財の対応を求められたのであるが、それに対して市教委では、今までの調査等をもとに、(1)蒼海城跡、上野国府跡については現状保存を要望する。(2)昭和48年調査の多量散布地については発掘調査、少量散布地区は、遺構、遺物が発見された場合には調査をするとの回答を出した。

昭和54年11月中旬～下旬にかけての元総社の表面採集調査では、布目瓦の散布に注目し、推定方８町の国府域を出している。

昭和57年になると、国庫補助金を受けて、前橋都市計画事業西部第三明神地区土地区画整理事業に先立つ調査依頼が、市都市区画整理部宅地開発課より市教委宛にあった。この依頼により宅地開発課と市教委担当者との間で協議がおこなわれ、次のような事項を申し合わせた。

(1)確認調査は道水路部分及び周辺地域を中心とする。

(2)トレンチをいれて遺構を検出した場合、拡張する範囲は道水路内及びその遺構確認範囲とする。

(3)排土は道水路内で極力始末する、等。

これを受けて昭和57年９月22日～12月25日までの３ヶ月、更に昭和58年５月13日～８月10日までの３ヶ月にわたり、確認調査が実施された。

この調査により、古墳時代住居跡15軒、平安時代住居跡30軒等の遺構を確認した。更に昭和59

年度の確認調査では古墳、奈良、平安時代の住居址の他、N－2°－Eを指す大溝を確認。前年に検出された閑泉樋遺跡のN－89°－Wの方位を指す東西方向の大溝と合わせ、国府域の北限、東限ではないかとの考えも示された。

これらの調査をうけ、昭和59年度には、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区区画整理事業の施行者前橋市と調査者である前橋市教育委員会との間に「元総社明神遺跡の発掘に関する覚書」を締結し、次のような取り決めをした。

(1)発掘調査は前橋市教育委員会で組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団がおこなう。

(2)発掘調査は39,570㎡とする。但し確認調査の結果、発掘調査を必要としない区域は除外する。

(3)発掘調査期間は昭和59年度から昭和65年度までとする。（抜粋）

こうして昭和62年度まで、主に区画整理で新設されたり、拡張予定の道水路部分を、点々と動きながら調査してきた。

その間区画整理事業も進み、発掘調査事業の終えたところは直ちに舗装されるなど、地域自体著しい変貌をとげてきた。

昭和62年度中にはこれらの進捗をふまえて、牛池川の河川改修が工事日程にのぼってきた。これは県の事業であるが、新たに市の側道ができることになっている。そこで県と市の協議により河川部を含め北側を市、南側を県が調査することになった。

更に市の区画整理の進捗もほぼ見通しがついたことから、市（区画整理一課）と調査団との間で覚書の変更をおこない、今後3年間の調査個所と必要経費積算を明らかにした。これにより昭和65年度（平成2年度）までの計画を設定したのである。

そして本年度は5月12日付で委託契約を結び、5月18日より調査の運びとなった。今年度目立ったことは、移転等、計画の進捗に協力するということで、「宮鍋様」から通じている道路部分のかわりに蒼海城三番橋の道路といわれる、現河川改修予定部分を調査することになったことである。

これらの調査により、住居址、土坑、溝等、多数の遺構を検出した結果から、次第に国府解明の焦点が絞られてきた。推定国府外郭ラインとみられる大溝を検出したり、更にそれ以前の歴史を証明するものとして多量の木製品を出したことにより、漠とした状態が、おぼろげではあるが霧が少しずつ晴れていくようでもある。しかし現在、次第に住宅がうち並び、交通事情等から発掘が困難になってきている。過去の調査は全て記録保存の形をとっているが、周囲の理解を得てあと2年続く発掘により、更に充実した記録保存を図り、国府の姿に一歩でも迫りたいものである。それが我々の仕事を理解し援助してくれる周囲の方々に対する我々の務めでもある。

II　遺跡の周辺環境

1．立　　地

元総社明神遺跡（前橋市元総社町）は、群馬県庁より西へ約２㎞、ＪＲ新前橋駅より北へ約２㎞に位置する。坂東太郎として名高い利根川の右岸にあり、左岸の前橋市街地とは川を挟んで対峙する形になっている。四方に赤城山、榛名山、妙義山、更に上信越を見渡せる緑豊かな地域で、昭和29年に前橋と合併している。近年特に都市化への傾向が著しく、国道17号線（高前バイパス）や主要地方道（前橋、群馬、高崎線）（前橋安中線）市道大友石倉線（通称産業道路）などの幹線道沿いを中心にオフィスビルや商店が目立ちはじめてきている地域である。それでも一歩内に進むと、まだ農村の名残りをとどめ、至るところに史跡や文化財が目に入り、歴史が静かに息づいていることがわかる。因みに本遺跡地の北西約２㎞には上野国分寺、国分尼寺跡、北北西約２㎞には山王廃寺、また北約３㎞以内には総社二子山古墳、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳、遠見山古墳、王山古墳等が目に入る。そして遺跡の近く（100m～300m）には総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。周辺部にも大友町、小相木町、古市町など歴史的に由緒ありそうな地名がたくさんあり、前橋東部に位置する城南地区と並び古代歴史の宝庫を彷彿させる町である。

前橋市を大地の成因から分類すると、広瀬川低地面、赤城火山斜面、前橋台地面の３つに大別される。その前橋台地については、約24,000年前の火山泥流堆積物とそれを被覆する水成ローム層から成り立つ洪積台地で、東は広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、西は榛名山麓の扇状地と続いている。つまり前橋繁華街のほぼ国道50号線から西側につながる一連の台地であり、元総社地区はその末端に位置しているのである。現在、利根川にその繁華街と元総社が分断されているように見えるが、もともと利根川は現在の広瀬川流域を形成していたので、元総社と市中心部は地続であったという。因みに利根川の水路が変わったのは今から550年前の永享年間に、長尾氏が石倉城を築くにあたり、堀の用水として橘山の麓から水路を作り利根川から取水したことによると伝えられている。

この地にたつと、標高112m～115mの北西から南東のゆるやかな傾斜地にあることがわかる。それは、榛名山麓に広がる相馬ケ原扇状地がその高低差をほとんどなくした平坦部との境をもなしている地域でもある。この周辺一帯は榛名山中に源を発する中小河川が東南方向に並走し、台地を細長く開析しており、その比高差は４ｍを数えている。本遺跡はこの中の牛池川、染谷川にはさまれた地域に占地している。

現在これらの遺跡周辺は高燥化した土地で、水田よりも桑園を主とした畑地として利用されていることが多い。

2．周 辺 遺 跡

当地域は前述のように、推定国府所在地として脚光を浴びた時代があるが、それ以前の時代からも生活の跡がうかがえる。

縄文時代においては、鳥羽遺跡や清里陣場遺跡・産業道路東遺跡等により、土器片や住居址を検出している。これらの特徴は、おおよそ縄文中期の土器を出土していることであり、前橋台地を開析するいくつかの河川に沿って分布していることがわかる。

弥生時代にあたる良好な遺跡は発見されていないが、総社町桜ヶ丘遺跡や鳥羽遺跡で樽式土器を出土している。また本遺跡においてもＣＰ以降の石田川式土器が多数出土しており、住居址も検出されている。

古墳時代の遺跡については、周辺地域に総社二子山や宝塔山、蛇穴山等の総社古墳群が北1.5kmほどにあり、更にその西側には山王廃寺が存在している。これはこの地域に有力豪族が勢力をもっていた証拠とも思われるが、因みに周辺を見渡すと西方５kmの地点に豪族居館として有名な三ッ寺遺跡や保渡田古墳群等の遺跡が目につくのである。しかるに当地域には古墳が見当らないが、これはこの時期に設置される国府及びその関連の街づくりのために破壊されたという想像がなされている。あるいは蒼海城築城の際（1429）破壊されたのかもしれない。

さて、奈良、平安時代になるとこの地域には国府が造営されている。

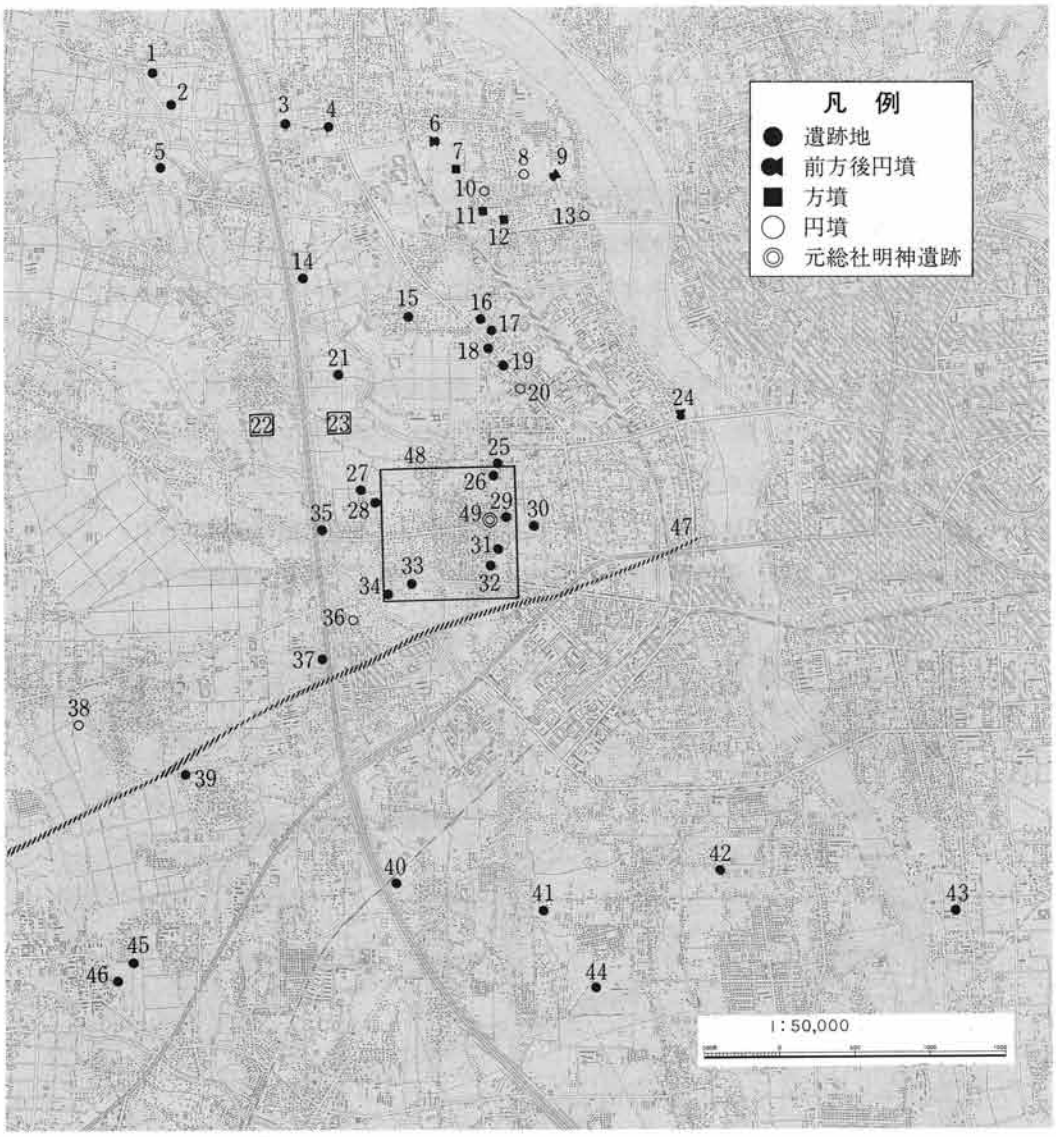
上野国府の成立年代は定かでないが、大化２年（646）の改新の詔の二に「初脩_京師_、置_幾内国司群司……」（日本書紀巻25）とあり、新国司制度とともに国府の大部分が新設されたものと考えられている。従って奈良時代以前には国府ができていたものと推定できる。

また「倭名類聚鈔」によれば「上野国、国府在・国府在群馬郡――」とあり、位置として「群馬久留米国分為東西二群府中間国府」の記述がある。元総社明神遺跡はこの文献及び総社神社の「上野国神名帳」の研究等により、当地域に国府があると想定した国府解明の調査である。

文献「上野国司交替実録帳」によれば、国府が２回炎上しているという。本調査においてはその焼土あるいは、あったであろうといわれている大溝等の検出を一応の目標としてきたが、現在のところそれらの痕跡はいまひとつ明らかになっていない。

中世には蒼海城が築かれ(1429)、秋元氏の城下となったようである。現在の街道の祖形はこの蒼海城跡地の堀に道路などをつけたことから出ている。そしてその蒼海城自体が国府の跡地を利用しているといわれ、蒼海城を解明することが国府解明への手がかりになるとも考えられて、今日まで調査をしてきた。しかしおぼろげには解明されつつあるが、断定資料となるものはない。

尚蒼海城はその後、総社城に秋元氏が移ってから廃城になっており、元総社は静寂の内に現代の夜明けをむかえたといえるのである。



1　清里南部遺跡
2　中島遺跡
3　下東西遺跡
4　柿木遺跡
5　熊野谷遺跡
6　総社二子山古墳
7　愛宕山古墳
8　大小路山古墳
9　遠見山古墳
10　紅葉山古墳
11　宝塔山古墳
12　蛇穴山古墳
13　薬師様古墳
14　北原B遺跡
15　山王廃寺遺跡
16　昌楽寺廻村東遺跡
17　産業道路東遺跡
18　産業道路西遺跡
19　稲荷塚北遺跡
20　丁間稲荷山古墳
21　国分境遺跡
22　上野国分寺
23　上野国分尼寺
24　王山古墳
25　閑泉樋遺跡
26　閑泉樋南遺跡
27　小見遺跡
28　草作遺跡
29　大友屋敷III遺跡
30　大友屋敷II遺跡
31　寺田遺跡
32　元総社小学校校庭遺跡
33　天神遺跡
34　染谷川遺跡
35　国分中間遺跡
36　弥勒山古墳
37　鳥羽遺跡
38　菅谷古墳群
39　正観寺遺跡
40　日高遺跡
41　箱田境遺跡
42　五反田遺跡
43　中大門遺跡
44　前箱田遺跡
45　小八木遺跡
46　大八木遺跡
47　推定東山道
48　推定上野国府域
49　元総社明神遺跡

元総社明神遺跡と周辺遺跡

Ⅲ　発掘調査の経過

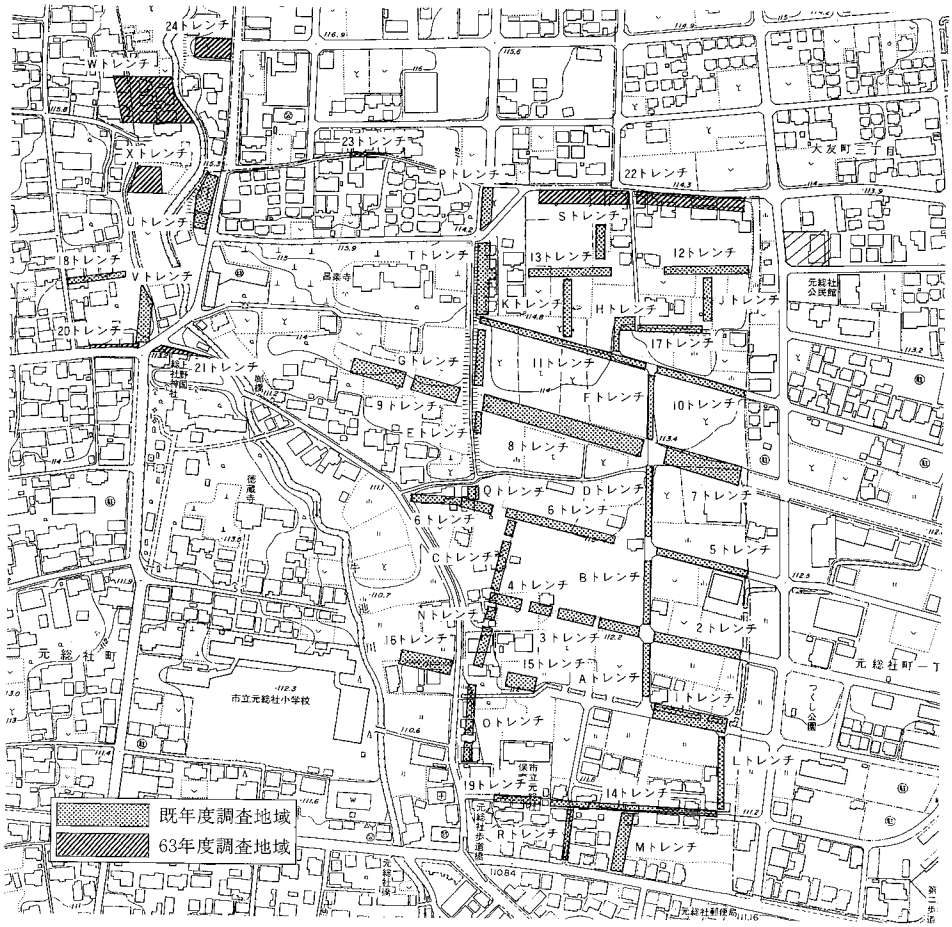
1．調 査 方 法

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今回で７年次を迎えた。市の区画整理事業に伴う調査ということで、道水路部分を調査対象地としている。今年度は図のように７本のトレンチ調査をした。今年度は、例年の道路部分の他、河川改修のための低地を対象としたことで比較的広い面積をもつトレンチを調査できた。

トレンチの呼称は昭和57年度からの連番を用い、道水路部分に沿って東西トレンチを算用数字南北トレンチをアルファベットで呼称した。従って以前に発掘したトレンチと同じ道路の場合にはそれと同じ名称がつけられている。

調査区の設定にあたっては、トレンチ内に座標杭を設定、国家座標に位置づけた。

また発掘にあたっては、遺構確認面まで重機で掘削した後、手掘りで調査をすすめた。



元総社明神遺跡トレンチ設定図

2．調査の経過

今年度の調査（第７年次）は、昭和63年５月18日から10月17日までの約５ヶ月にわたり実施された。トレンチ数７ヶ所、面積2,219㎡、現場担当者２名、作業員21名である。

元総社明神遺跡のトレンチは、住居移転等の関係から一度に調査することができない。従って今年度も例年のように、総社神社東にある調査事務所を根拠地にし、各トレンチに出かけ、ひとつひとつを仕上げるようにした。以下はその経過である。

我々が最初に調査を予定したのはWトレンチであった。それは牛池川改修予定地で、比較的面積が広いこと、低地であること、推定国府の中心地であり蒼海城の中心ともいえる〝宮鍋様〟の近くということなどから、ひときわ重要なトレンチと考え、時間的余裕を持ち、更に梅雨期を避けた調査を心がけたからである。

そのWトレンチに重機が入ったのは５月18日であった。このトレンチは西半分が高くなっており、東半分が一段低く、牛池川に向って傾斜もしている。結果は西半分に井戸を初めとする遺構が多かった。この井戸に対しては土砂が崩れるなどで、作業が大変だったが、６月20日に全調査を終了した。

20、21トレンチは、交通量の多い総社神社隣接地及び県道前橋―足門線沿いであった。ここは６月21日に重機が入り、住居などの遺構は検出されなかったため、７月16日には埋め戻しとなった。

22トレンチは住宅通路や駐車場確保などの事情から、小区画にわけて調査を行った。しかしその東西は200mも離れており、作業員の連絡がとりずらく能率が悪いなどの問題があった。ここでは大きな溝が検出されたが、せまい道沿いで通行に対する安全対策のため、一刻も早く埋め戻しをしなければならなかった。重機掘削開始は７月18日という、真夏の暑い時期であったが、懸命に大溝を掘りあげ、８月10日の埋め戻しへともっていった。

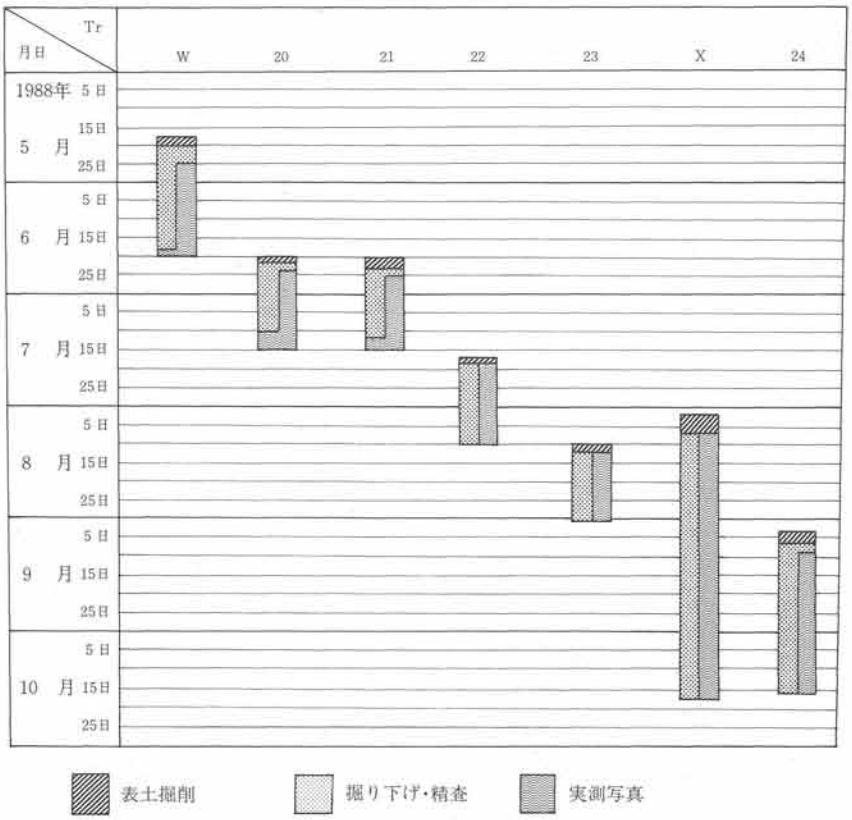
Xトレンチの重機掘削は８月２日に始まった。ここも牛池川改修予定地の低地だが、周囲に雑草が生い茂り、加えて牛池川と五千石用水に囲まれているため、蚊に悩まされる調査であった。

また雨が降るとたちまち水没する土地のため、掘っては水没、ポンプアップしては調査、そして水没、また調査の悪循環で、大変な個所であった。

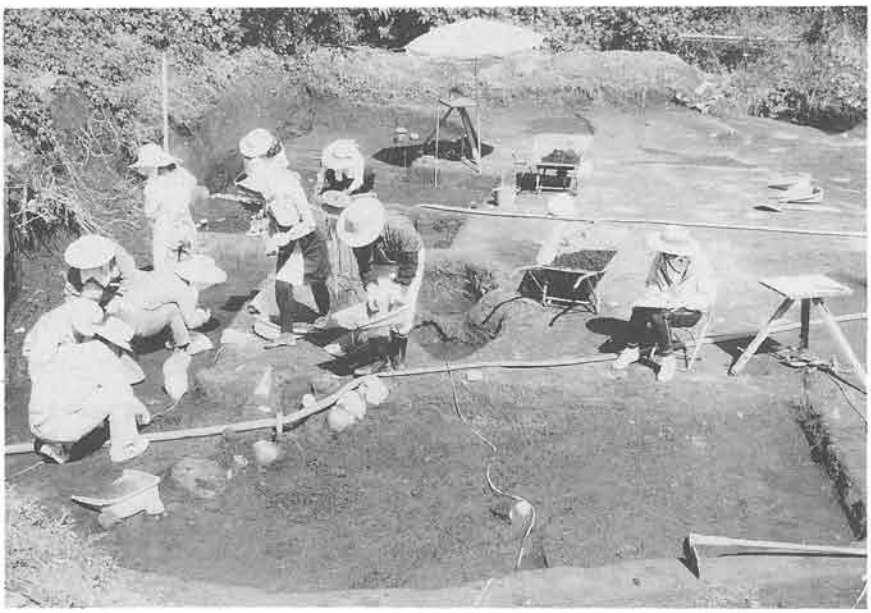
ことほぼ平行して調査されたのが昌楽寺北の23トレンチであった。ここは道自体がせまく重機掘削もままならなかったが、住民の生活を考慮し、特に力を注いだ結果、８月12日～９月２日で終了。

最後の調査は24トレンチである。９月５日より調査を開始したが、一辺７mの大きな鬼高期の住居を検出。ローム面でくっきりでる住居は本遺跡の内でも珍しいため、調査終了間際の印象ひときわ深い調査となった。

今年はとにかく雨が多かった。加えて住居移転が予定通り進まず、調査個所が変更になるなどの事態もあった。時間や安全面での制約があったが、しかし、なにはともあれ10月17日全調査を無事終了できた。

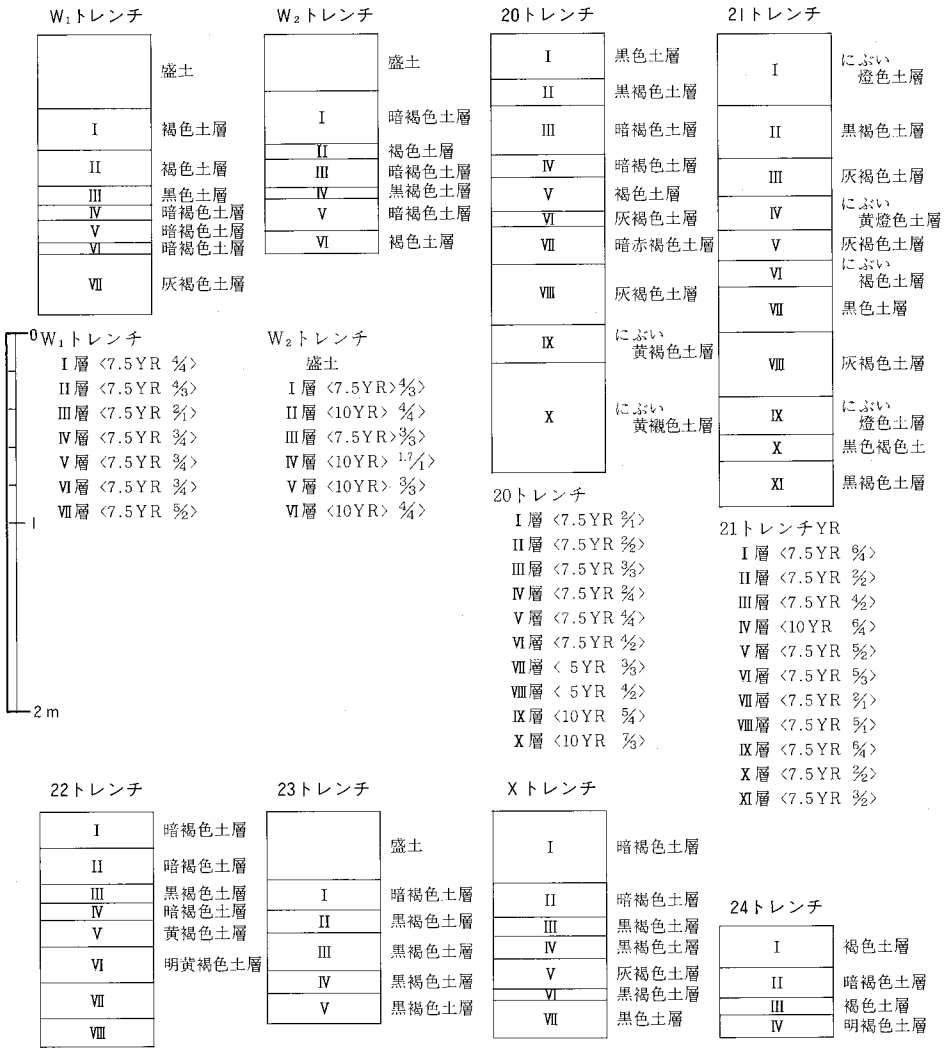


発掘調査経過表



作業風景

Ⅳ 基 本 層 序


W₁トレンチ
盛土
Ⅰ 褐色土層
Ⅱ 褐色土層
Ⅲ 黒色土層
Ⅳ 暗褐色土層
Ⅴ 暗褐色土層
Ⅵ 暗褐色土層
Ⅶ 灰褐色土層
W₂トレンチ
盛土
Ⅰ 暗褐色土層
Ⅱ 褐色土層
Ⅲ 暗褐色土層
Ⅳ 黒褐色土層
Ⅴ 暗褐色土層
Ⅵ 褐色土層
20トレンチ
Ⅰ 黒色土層
Ⅱ 黒褐色土層
Ⅲ 暗褐色土層
Ⅳ 暗褐色土層
Ⅴ 褐色土層
Ⅵ 灰褐色土層
Ⅶ 暗赤褐色土層
Ⅷ 灰褐色土層
Ⅸ にぶい黄褐色土層
Ⅹ にぶい黄褐色土層
21トレンチ
Ⅰ にぶい橙色土層
Ⅱ 黒褐色土層
Ⅲ 灰褐色土層
Ⅳ にぶい黄橙色土層
Ⅴ 灰褐色土層
Ⅵ にぶい褐色土層
Ⅶ 黒色土層
Ⅷ 灰褐色土層
Ⅸ にぶい橙色土層
Ⅹ 黒色褐色土
Ⅺ 黒褐色土層
0
1
2 m
W₁トレンチ
Ⅰ層 〈7.5YR 4/4〉
Ⅱ層 〈7.5YR 4/3〉
Ⅲ層 〈7.5YR 2/1〉
Ⅳ層 〈7.5YR 3/4〉
Ⅴ層 〈7.5YR 3/4〉
Ⅵ層 〈7.5YR 3/4〉
Ⅶ層 〈7.5YR 5/2〉
W₂トレンチ
盛土
Ⅰ層 〈7.5YR〉4/3〉
Ⅱ層 〈10YR〉 3/4〉
Ⅲ層 〈7.5YR〉3/3〉
Ⅳ層 〈10YR〉 1.7/1〉
Ⅴ層 〈10YR〉 3/3〉
Ⅵ層 〈10YR〉 3/4〉
20トレンチ
Ⅰ層 〈7.5YR 2/1〉
Ⅱ層 〈7.5YR 2/2〉
Ⅲ層 〈7.5YR 3/3〉
Ⅳ層 〈7.5YR 2/4〉
Ⅴ層 〈7.5YR 4/4〉
Ⅵ層 〈7.5YR 4/2〉
Ⅶ層 〈 5YR 3/3〉
Ⅷ層 〈 5YR 4/2〉
Ⅸ層 〈10YR 5/4〉
Ⅹ層 〈10YR 7/3〉
21トレンチYR
Ⅰ層 〈7.5YR 6/4〉
Ⅱ層 〈7.5YR 3/2〉
Ⅲ層 〈7.5YR 4/2〉
Ⅳ層 〈10YR 6/4〉
Ⅴ層 〈7.5YR 5/2〉
Ⅵ層 〈7.5YR 5/3〉
Ⅶ層 〈7.5YR 3/1〉
Ⅷ層 〈7.5YR 5/1〉
Ⅸ層 〈7.5YR 5/4〉
Ⅹ層 〈7.5YR 3/2〉
Ⅺ層 〈7.5YR 3/2〉
22トレンチ
Ⅰ 暗褐色土層
Ⅱ 暗褐色土層
Ⅲ 黒褐色土層
Ⅳ 暗褐色土層
Ⅴ 黄褐色土層
Ⅵ 明黄褐色土層
Ⅶ
Ⅷ
23トレンチ
盛土
Ⅰ 暗褐色土層
Ⅱ 黒褐色土層
Ⅲ 黒褐色土層
Ⅳ 黒褐色土層
Ⅴ 黒褐色土層
Xトレンチ
Ⅰ 暗褐色土層
Ⅱ 暗褐色土層
Ⅲ 黒褐色土層
Ⅳ 黒褐色土層
Ⅴ 灰褐色土層
Ⅵ 黒褐色土層
Ⅶ 黒色土層
24トレンチ
Ⅰ 褐色土層
Ⅱ 暗褐色土層
Ⅲ 褐色土層
Ⅳ 明褐色土層
22トレンチ
Ⅰ層 〈7.5Y 3/3〉
Ⅱ層 〈7.5YR 3/3〉
Ⅲ層 〈7.5YR 2/2〉
Ⅳ層 〈7.5YR 3/3〉
Ⅴ層 〈10YR 5/6〉
Ⅵ層 〈10YR 6/6〉
Ⅶ層 〈10YR 5/4〉
Ⅷ層 〈10YR 6/4〉
23トレンチ
盛土
Ⅰ層 〈7.5YR 3/3〉
Ⅱ層 〈7.5YR 3/2〉
Ⅲ層 〈7.5YR 3/2〉
Ⅳ層 〈7.5YR 3/1〉
Ⅴ層 〈7.5YR 3/2〉
Xトレンチ
Ⅰ層 〈7.5YR〉3/3〉
Ⅱ層 〈7.5YR〉3/3〉
Ⅲ層 〈7.5YR〉3/2〉
Ⅳ層 〈7.5YR〉3/2〉
Ⅴ層 〈7.5YR〉4/2〉
Ⅵ層 〈7.5YR〉3/2〉
Ⅶ層 〈7.5YR〉1.7/1〉
24トレンチ
Ⅰ層 〈7.5YR 4/4〉
Ⅱ層 〈7.5YR 3/4〉
Ⅲ層 〈7.5YR 4/6〉
Ⅳ層 〈7.5YR 5/6〉

V　遺構と遺物

1．全体の概観

本年度調査はW、X、20、21、22、23、24トレンチで行なわれ、住居址30軒、土坑53基、溝状遺構1条、井戸址3基を検出した。

W、Xトレンチについては牛池川改修予定地であり、現牛池川流路のすぐ西側に位置する。それは推定国衙の中心といわれる宮ノ辺（旧総社神社所在地といわれる場所）から約200mの距離にある。常陸、周防、近江国などの例から2町四方が国衙域だとすれば、丁度その範囲内ともいえる場所である。その一方で山崎一氏による「古城塁址の研究」の蒼海城図を見ると、Wトレンチの位置は風呂沼とあり、更にXトレンチは城内からの道にあたり三番橋となっている。つまり水底の可能性が非常に高かったが、発掘してみると地断から、Wトレンチ東端が風呂沼にかかることがわかってきた。その中で検出したのはWトレンチ住居11軒、井戸3基、Xトレンチ住居7軒であり、平安時代に竪穴住居の生活のあったこと、また井戸は底にあった遺物から室町時代以降まで存在したことが確認された。

ここて特筆すべきは、Wトレンチ西半分では現地点から約30cm程度で、固い地山につきあたることである。他の場所でも同様な結果がでている。この水成堆積の硬質土層の状態からすると、牛池川西側に広がる推定国衙中心地周辺は削平が進み、古代遺跡は確認できにくいと思われる。

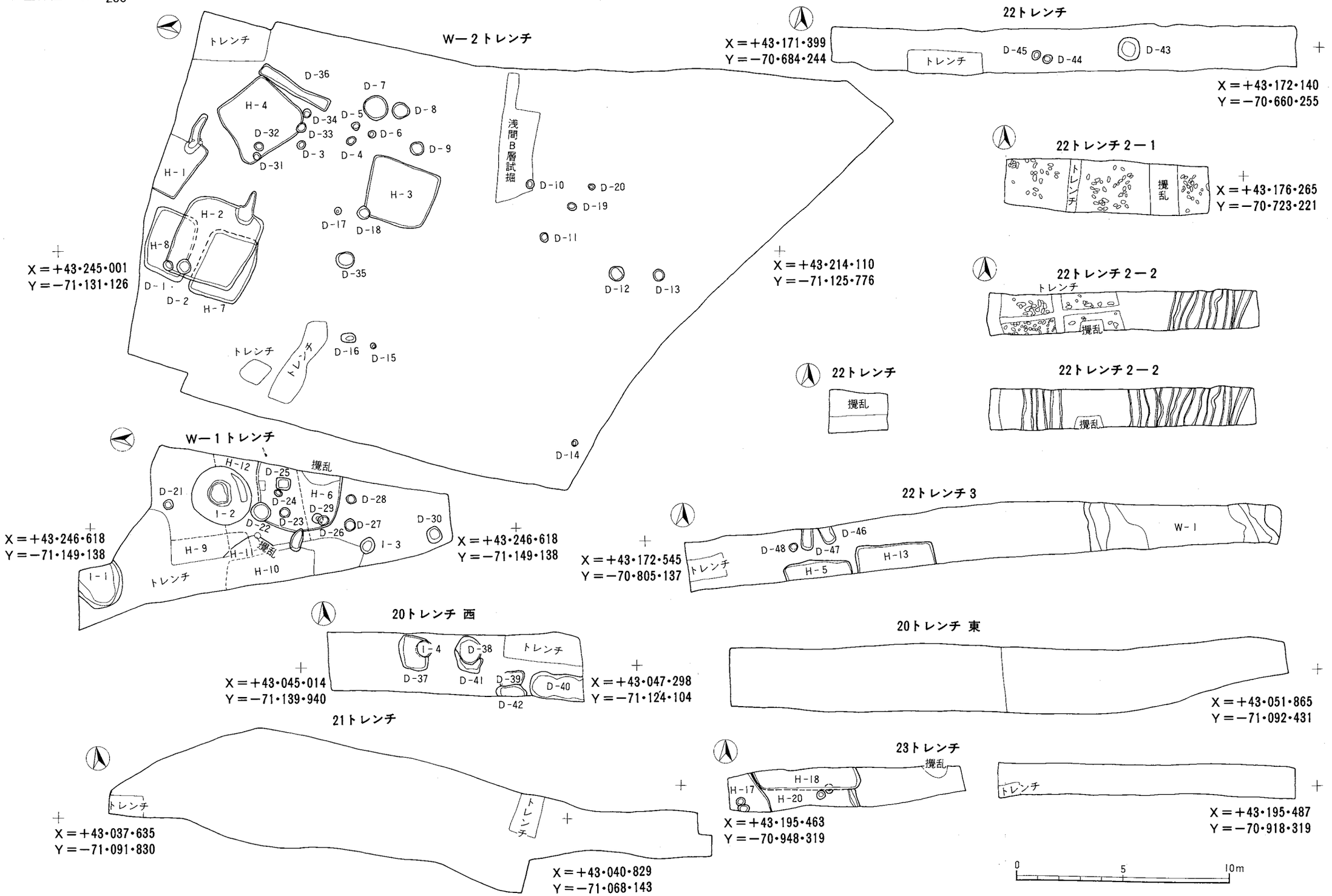
また、20、21トレンチは先にあげた蒼海城古図によれば堀ともなるべき位置にある。しかし昨年のVトレンチで検出した溝が古地図とは一致しなかったように、想定とは異なった自然地形による傾斜があるだけであった。特に21トレンチは地域の古老によれば盛土した記憶があるとのことだったが、果たして発掘の結果、自然堆積のラミナが見られその土地の元所有者の言うとおり、埋めた形跡はなかった。そこで検出したのはつい最近まで使用していた井戸だけであった。

22トレンチは東西150mにも及ぶ長いトレンチであり、人家などの関係からいくつかに分けて調査したが、東半分では遺構らしいものは検出されなかった。しかし西半分ではほぼ南北に走る大溝を検出、地図にその位置をおとしてみると昭和60年度までに検出された国府の外郭ラインとも考えられている大溝につながることがわかるのである。また、人為的につけたと思われる凹凸の激しい面も検出した。

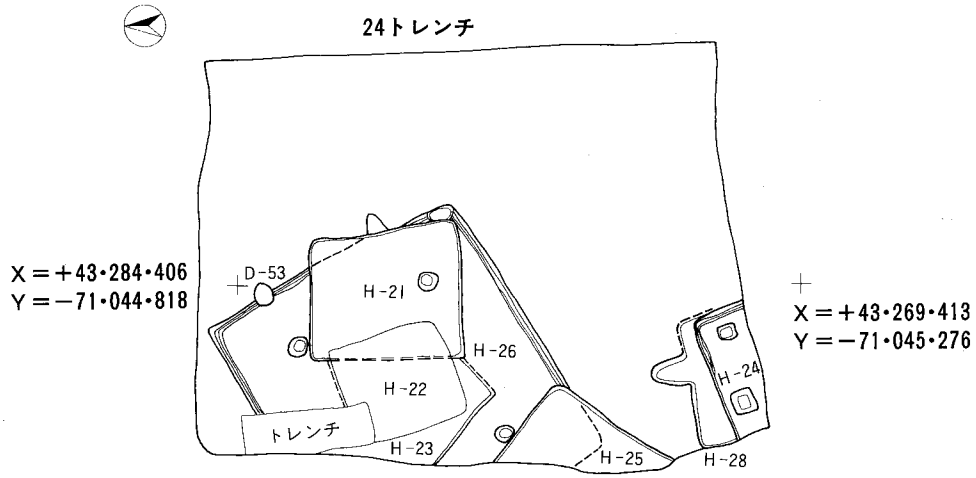
23トレンチ及び24トレンチでは古墳時代のローム層を切り込んだ住居址を検出した。国府の北限ラインといわれる閑泉樋の東面に走る大溝以南に位置することから、国府域内にも見られるのであるが、平安期住居址は検出できなかった。23トレンチと24トレンチは直線距離にして100m前後であるから、このあたりに古墳期に1つの集落があったのではとも考えられる。

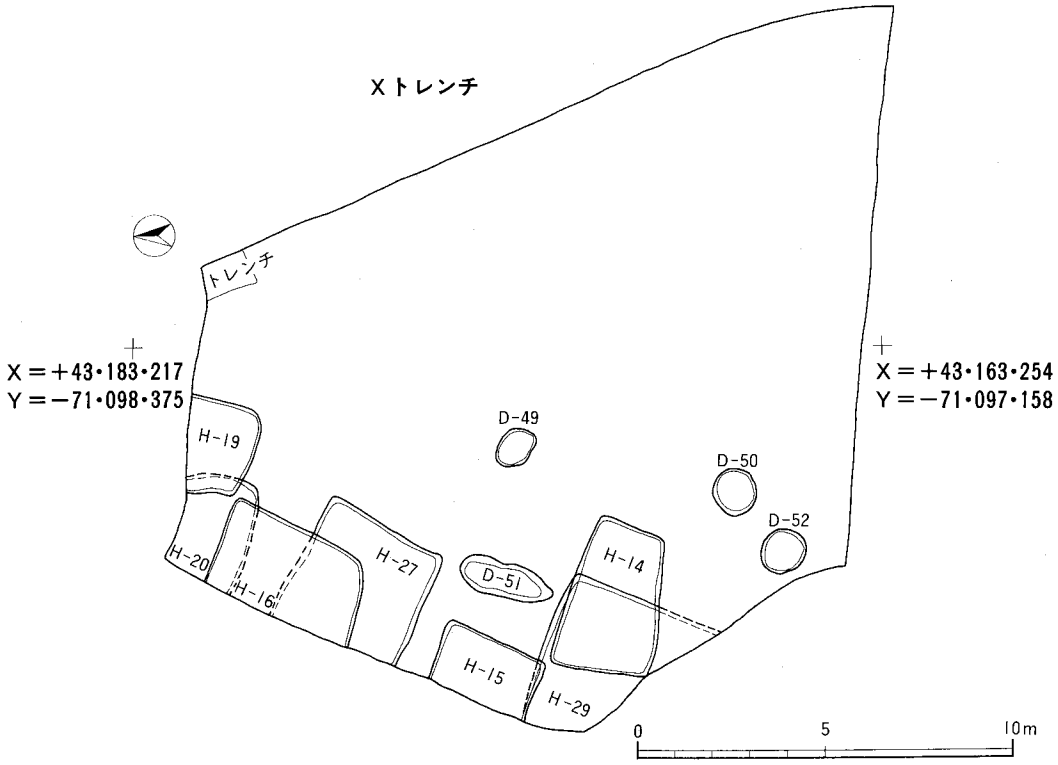
遺物については坏や埦・甕などを検出しているが、遺構数が例年に比し少なかったこともあり、出土数は少なかった。

トレンチ全体図 ① ($\frac{1}{200}$)



トレンチ全体図　②（$\frac{1}{200}$）





2．住　居　址

H－1号住居址（fig 1－1、2　PL 4－1）

遺構　W_2トレンチの北隅D－6、D－7グリッドで検出した。北側が調査区域外の為、南半分しか検出できなかったが、長軸は2.82mを測り短軸は1.35m以上となる。また壁は垂直に掘り込まれている。床面は黒褐色土の貼床がなされ全体的に平坦で、ほぼ標高177.5mである。土層はレンズ状堆積しており、大きく5層に分類される。周溝、ピット等は確認されなかった。

竈（fig－1）　東壁南側に位置する。煙道部を削平されている他は、比較的良好な残存状態を示し、燃焼部中央付近には焼土がひときわ盛りあがって残っていた。構築状態については、焚口部の左軸には細長い円礫を、右軸には凝灰岩切石を用い補強材としていた。更に粘土で固めて構築したあとがうかがえた。天井部は崩落していた。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土した。

出土遺物　総数65点出土しているが、接合できたものは少なかった。主なものにカワラケ状の坏や須恵の皿等がある。

H－2号住居址（fig 1－3、4　PL 4－2、3）

遺構　W_2トレンチの北側、D－5、6及びE－5、6グリッドに位置する。H－7、8と重複するが、それらより時期は新しい。3.77m×3.9mの長方形をなし、主軸方向はN－10°－Eである。壁はほぼ垂直に掘られ壁高は26cmを測る。土層は水平堆積しており2層に分類される。床面はほぼ平坦で、標高176.5mを測り、周溝、ピット等は確認されなかった。

竈（fig－1　PL－4）　東壁南端部に位置する。煙道部が削平されていたが、残存状態は比較的良好であった。燃焼部は大きく壁外に張り出しており、焚口部については、両袖に凝灰岩及び瓦を配し、崩落していたが、長さ40cm程の細長い凝灰岩切石を両袖石にのせて鳥居状に組んでいた。石組竈であったと推定される。焚口部の最大幅84cm、奥行1.62mを測り70°の角度で立ち上がっていく。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土した。

出土遺物　遺物は総数で229点出土しているが、接合できるものは少なかった。主な遺物としてカワラケ状の坏や高台埦の他、高台托があげられる。これは高台付の皿とも受けとれるが、酸化焔焼成による非常に浅身の器形であるから、高台托と考えたい。これらの遺物から判断するならば11世紀頃の住居址と比定できよう。

H－3号住居址（fig 1－5　PL 4－4）

遺構　W_2トレンチのF－6、7、G－6、7グリッドに位置する。2.98m×3.30mの長方形を

なしN—84°—Eに主軸方位をとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は80cmを測る。床面は貼床され標高180.5mでほぼ平担であった。土層はほぼ水平に堆積しており大きく2層に分類される。周溝、柱穴は確認されなかった。

竈　確認されなかった。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域から出土している。

出土遺物　遺物は総数で65点出土した。殆どが土師器の小破片であったが、磁器片、瓦片も出土している。出土した坏等から10世紀頃と比定される。

H—4号住居址（fig 2—1）

遺構　W_2トレンチのD—7、E—7、8グリッドに位置する。3.52m×3.20mのほぼ方形を示す。また主軸方位はN—48°—Wを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は10cmであった。床面は標高186.0mに位置し、ほぼ平坦である。黒褐色の貼床が西中央部に検出された。土層はほぼ水平堆積をなし2層に分かれる。周溝、ピット等は確認されなかった。

竈　確認されなかった。

遺物出土状況　ほぼ全域から散在して出土していた。

出土遺物　遺物は総数105点出土している。大半は土師器破片であった。

H—5号住居址（fig 2—2　PL 4—5）

遺構　22トレンチのB—3、4グリッドに位置する。規模は3.06m×0.70m以上の長方形で、N—84°—Eの主軸方位を示す。土層はレンズ状堆積をなし、およそ2層に分かれる。壁はほぼ垂直に掘り下げられ、壁高18cmを測る。床面は標高113.5cmに位置し、ほぼ平坦であった。全面に貼床されており、ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　検出されなかった。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土した。

出土遺物　遺物は総数で25点出土している。大半は土師器の小破片であった。

H—6号住居址（fig 2—3　PL 4—6）

遺構　W_1トレンチのC—2、D—1、2グリッドに位置し、H—12と重複しているが、遺物等から判断すると本住居址の方が新しい。主軸はE—7°—Sとなっており、一辺の長さは調査区域外で不明なところもあるが、検出できたところでは南北方向は3.80m以上、東西方向2.80m以上を測る。壁は50°で掘りこまれ、壁高は18cmである。土層は2層にわかれほぼ水平に堆積していた。床面は標高178.0mに位置し、ほぼ平坦であった。周溝、ピット等は確認されなかった。

竈　調査区域内では検出されなかった。

遺物出土状態　住居址の両域から出土した遺物が多い。

出土遺物　出土遺物総数は86点である。殆どが土師器、須恵器の小破片であるが布目瓦や鉄滓なども出土している。代表的遺物として、カワラケ状の坏及び大甕があげられるが、羽釜の小破片が何点かでていること等も考え合わせて11世紀頃の住居址と比定される。

H－7号住居址（fig 2－4　PL 4－7）

遺構　W_2トレンチ、D－5、6、E－5、6グリッドに位置する。H－2の下に検出していることからH－2より古いと言える。北半分撹乱をうけているため、この大きさははっきりしないが、確認面では2.38m×3.13mで、推定長方形と考えられる。主軸方位はE－10°－Sをはかり、床面は比較的堅緻で凹凸が少なく標高177.9mで、しまりのない状態で検出に苦しんだ。

竈　確認調査区域内では検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から出土している。

出土遺物　出土遺物総数は57点である。瓦や須恵器の小破片の他、馬の骨などが出土しているが、大部分を占めていたのは土師器小破片である。ここはとくに石製品や自然石などが目についた。円礫や割石など21点を数えている。

H－8号住居址（fig 2－5　PL 4－8）

遺構　W_2トレンチD－5、6グリッドに位置する。H－2と重複しているが、その殆どをH－2に切られているため、調査できたのは一部であるが、その切り合い状態からH－2より古いと考えられる。確認面でみると3.0m×2.2mでほぼ長方形と考えることができる。床面はほぼ平坦で標高185mを測る。

竈　削平されており確認できなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域にわたり出土した。

出土遺物　出土総数は63点である。殆どが土師器の小破片で、接合できるものは少なかった。

H－9号住居址（fig 2－6）

遺構　W_1トレンチのC－2グリッドに位置する。調査区域外及びH－11と重複していることから、完掘できなかったが、3.60m以上×0.80m以上の長方形住居である。主軸方位はE－55°－Sである。壁は削平甚だしく測定できなかった。また床面は標高156.5mをはかりほぼ平坦であった。ピット、周溝等は確認できなかった。

竈　調査区域内には検出できなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土した。

出土遺物　出土数は36点であり、土師器ばかりで36点出土している。カワラケ状の坏の出土状態から平安時代の後期にあたる住居と思われる。

H－10号住居址（fig 3－1、2　PL 5－1）

遺構　W_1－1のC－1、D－1、2グリッドに位置する。H－11と重複しているが切り合いからみてH－11より古い。主軸はN－30°－Wの方向を示す。調査区域が限定されているため遺構東半分のみ調査できた。周溝及び柱穴等は検出されなかった。検出できたところでは1.2m以上×4.16mで、平面の形は方形と思われる。床面には炭が散在し、炭化土坑が端部に検出された。また上層はほぼ水平状堆積であり、およそ6層に分かれる。

竈（fig 3－2）　東壁南隅部分に位置する。残存状態は比較的良好であったが、天井部は全く削平されていた。燃焼部は馬蹄形に壁外へ張り出す。焚口部は62cmを測る。焼土は少なく、灰層も薄いからあまり使用されたようには見えない。袖石として凝灰岩が左右一対検出された。

遺物出土状態　ほぼ全域にわたり出土している。

出土遺物　出土総数は54点である。殆どが土師器と須恵器の小破片であったが、そのうち羽釜の小破片が5分の1を占めたが、接合までには至らなかった。代表的遺物として坏やカワラケ状の坏が出土している。時代的には11世紀頃と比定できよう。

H－11号住居址（fig 2－7　PL 5－2）

遺構　W_1－1トレンチのC－1、D－1、2グリッドに位置する。主軸方位はN－24°－Wを示し、調査区域内での形状は0.80m以上×1.7m以上を測り長方形と思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は標高180.5mのほぼ平坦をなす。土層は水平堆積を示し、ほぼ2層に分かれている。ピット、周溝は確認されなかった。

竈　調査区域内には確認されなかった。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土した。

出土遺物　遺物は小さなものばかりであった。

H－12号住居址（fig 3－3）

遺構　W_1トレンチのD－1グリッドに位置する。調査区域外に住居址がのびるため、全容は明らかにできなかったが測定したところでは、3.40m以上×3.60m以上の長方形を呈する。壁は削平されて測定できなかった。また床面は標高198.5mをはかりほぼ平坦であった。ピット、周溝等は確認できなかった。

竈　調査区域内には確認されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土した。

出土遺物　出土数は138点にのぼる。カワラケ状の坏や高台埦などを出土しているが、殆どが土師片で接合できなかった。遺物状況からみて平安後期に比定されよう。

H－13号住居址（fig 3－4　PL 5－3）

遺構　22トレンチのB－4、5グリッドに位置する。3.8m×1.24mの長方形をなしているが、上部を削平されていて、壁高はよくわからないが、調査時点では5㎝を測るだけであった。床面についてはほぼ平坦で標高109.5mを測る。周溝、ピット等は確認されなかった。主軸方向は、W－7°－Sを測る。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土している。

出土遺物　遺物総数は23点であった。全て土師器の小破片であった。

H－14号住居址（fig 3－5）

遺構　Xトレンチの D－3、4及びE－3、4グリッドに位置する。面形は長方形を呈し規模は南北2.6m、東西4.1mを測る。この調査区の上がすぐ隣の五千石用水等の水が浸透し、土質の違いがわかりずらいところであるが、壁はほぼ垂直で壁高12㎝を測る。土層はほぼ水平に堆積しており、2層に分類される。主軸方位はN－74°－Wをさす。床面は標高115.0m前後でほぼ平坦である。周溝、ピット等は確認できなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土した。

出土遺物　遺物総数は732点と多かったが、馬歯などの他は殆ど酸化焔焼成の須恵器の小破片であった。完形に近いものとして坏やカワラケ状の坏などが出土している。11世紀頃と比定できよう。

H－15号住居址（fig 3－6　PL 5－4）

遺構　Xトレンチの C－3、D－3、4グリッドに位置する。西側は調査区域外で、検出できた部分の東西は2.9m、南北1.7mとなり、主輸方位はN－24°－Eを測る。また壁高は19㎝である。床面はほぼ平坦で標高97.0mを測る。土層はほぼ水平に堆積し2層に分かれている。周溝、ピット等は確認できなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　遺物はほぼ全域に散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は951点であった。殆ど土師器と須恵器の小破片で接合できるものは少なかった。須恵器の坏2点、カワラケ状の坏1点など11世紀にも比定される遺物が出土している。

H－16号住居址（fig 4－1　PL 5－5）

遺構　Xトレンチの B－4、C－3、4グリッドに位置する。H－30及びH－27と重複してい

るが、時代的にはほぼ同じ時期であると考えられる。西側はトレンチ外で調査できなかったが、調査できた西半分については、4.1m×2.2mを測る。およそ長方形と考えられるが、壁高は16cmを測るのみであった。土層はおおむね水平堆積をなし、2層に分かれる。主軸はN—24°—Eをさす。床面はほぼ平坦で標高107.0mとなっている。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　全域から小破片がたくさん出土している。

出土遺物　出土遺物総数は1,434点である。土師器、須恵器の小破片が殆どで、接合はできなかった。完形に近いものとしては、カワラケ状の坏2点があるが遺物全体からみて時代的には11世紀に比定されるものである。

H—17号住居址（fig 4—2　PL 5—6）

遺構　23トレンチのA—2、3とB—2、3グリッドに位置する。H—20と重複しているが、2m幅のトレンチ発掘のため辺長はわからないが、確認できたところでは、1.86m以上×1.80m以上を測る。主軸方位はN—35°—Wを示す。土層はほぼ水平堆積でおよそ4層にわかれる。床面は標高101mを測りほぼ平坦である。ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域に散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は106点である。殆どが土師器の小破片であった。

H—18号住居址（fig 4—3）

遺構　23トレンチのA—2、3、B—2、3グリッドに位置する。H—20と重複するが切り合いからみて、H—18が新しいと言える。北側が調査区域外の為、明らかになった部分が少ないが、検出しえた部分では東西4.88m×南北0.94mを測り、N—90°—Eの主軸方位を示す。床面はほぼ平坦で標高108.0mであった。また壁については確認できたところで垂直に掘り込まれ12cmの高さであり、ほぼ垂直に立ち上がっていた。土層はほぼ水平堆積をなし、ほぼ2層に分かれる。ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域にわたり散在して出土した。

出土遺物　出土遺物総数は147点である。殆どが土師器の小破片であり、接合できるものは少なかった。

H—19号住居址（fig 4—4　PL 5—7）

遺構　XトレンチのB—4グリッドに位置する。H—30と重複しているが時代的にはほぼ同じととらえることができる。住居の西が調査区域外の為、全体はわからないが、確認できた住居の

長さは2.3m×1.9mを測り、おおよそ長方形と考えられる。主軸方位はE—22°—Sを示し、壁高は確認できたところで11cmであった。床面はほぼ平坦で、標高103.0mを測る。土層は水平堆積をなし、ほぼ2層に分かれる。ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内では検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は192点である。殆どが土師器、須恵器の小破片で接合はできなかった。かわったものに刀のつかじりがあるが、混入したものであろう。

H—20号住居址（fig 4 — 5）

遺構　23トレンチのA—2、3、B—2、3グリッドに位置する。H—17、18の下の層から検出しているので、これらの住居址より古いと考えられる。幅2mのトレンチのため全体を明らかにできなかったが、ローム層を掘り込んでいる本遺跡にとっては珍しい住居である。確認しえたところでは4.3m×1.2m以上であり、ほぼ垂直に立ち上がる壁高は21cmを測る。床面はほぼ平坦で標高139.0mであり、一部貼床を検出している。

竈　北壁中央部は竈とも考え作業を進めたが竈とは認められなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は44点である。土師器の小破片が殆どで接合できるものはなかったが坏や甕などの出土品はいずれも鬼高期であることから、古墳時代の住居と考えることができよう。

H—21号住居址（fig 5 — 1）

遺構　24トレンチのB—2、3、C—2、3グリッドに位置する。H—22、23、26と重複しているが、切り合い関係からみて一番新しいと思われる。3.7m×4.1mの長方形を呈し、ロームを切って作られていた。主軸はN—90°—Wを示し、壁高はほぼ垂直に立ち上がり、削平されてはいるが高さは10cmを測る。床面はほぼ平坦で標高115.0mを測る。土層は水平堆積をなし、およそ2層にわかれる。周溝、ピット等は確認されなかった。

竈　検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は117点である。殆どが古墳時代の土器であるが、小破片のため接合できなかった。完形に近い遺物として坏2点があげられるが、その器形等から古墳期住居と考えたい。

H—22号住居址（fig 4 — 6　PL 5 — 8）

遺構　24トレンチのC—1、2に位置する。H—21、23、26と重複しているが、この4住居の中では2番目に新しいと考えられる。形状は2.78m×3.08mのほぼ長方形で、主軸はN—24°—Wを測る。床面は一面に炭化物が認められた。その灰層をとりのぞいたあとの床面は平坦で標高

117.0mを測る。壁は削平されて測定できなかった。

竈　調査区域内では検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は馬歯などを含め47点である。殆ど土師器の小破片で接合できなかったが、ほぼ完形に近い出土物として坏や甕が検出された。この遺物から考えると古墳期の住居址として比定できよう。

H－23号住居址（fig 5－2）

遺構　24トレンチのC－1、2グリッドに位置する。この住居址も調査区域では完掘できなかったが、それでも1.85m以上×2.6m以上を示し、N－49°－Wに主軸方位を見る。H－21、22、26と重複しているが、切り合いからみてH－23が2番目に古い住居址である。壁は84°に掘り下げられ壁高13cmを測る。土層は水平堆積状でおよそ3層にわかれる。床面は標高121.0mでほぼ平坦である。ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から出土している。

出土遺物　全部で57点出土している。殆ど土師器の小破片で接合できるものは少なかったが、完形に近いものとして坏や甕があるが、古墳時代のものである。

H－24号住居址（fig 5－3　PL 6－1）

遺構　24トレンチのE－1、2グリッドに位置する。H－28と重複しているが、H－28よりは新しい。南半分は調査区域外だが、検出しえた長さは3.35m×1.45mである。主軸はN－71°－Eを測る。ロームを掘り込んでできている。床はほぼ平坦で、標高123.0mを測る。本住居址内に土坑が検出されているが、これと住居址の関係ははっきりしない。ピット、周溝は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から出土している。

出土遺物　出土遺物総数は122点である。他の住居址と同じように土師器、須恵器の小破片が多く接合できるものは少なかった。完形に近い遺物として坏がでている。古墳時代のものと捉えることができよう。

H－25号住居址（fig 5－4　PL 6－2）

遺構　24トレンチのC－1、2、D－1、2グリッドに位置する。H－26と重複しているが切り合いの様子からこの住居の方が時期的に新しいと考えられる。住居の半分が調査区域外のため全体は明確でないが、検出した部分の長さは2.75m×3.7mで主軸はN－38°－Eとなっている。上部の削平がひどく壁高は6cmを測るのみであった。壁は60°で掘りこまれ2層で土層を構成してい

る。床面はほぼ平坦で標高119.0mを測る。周溝、ピット等は確認できなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は72点である。殆どが鬼高期の土師器小破片であるが、接合できるものはなかった。完形に近い遺物として甕が出土した。

H—26号住居址（fig 6－1、2　PL 6－3、4）

遺構　24トレンチのA－2、B－1、2、3、C－1、2、3、D－1、2グリッドに位置する。トレンチ内で確認できた辺長は7.75m×7.4mを測る大きい住居址である。ローム層を掘り込んでできており、壁高は21cmをはかり、ほぼ垂直に立ち上がっている。また土層は2層を確認している。ピットは直径58cmをはかり3穴検出できた。本遺跡は奈良、平安の遺構が多く、このような大きな、しかもローム層を掘り込んだ住居址は珍しい。周溝も一部検出している。H—21、22、23と重複しているが切り合いから一番古いものと考えられる。主軸はN—29°—Wを測る。

竈（fig－6　PL－6）　東壁南端部に検出した。残在状況は比較的良好であったが、天井部は全く削平されていた。燃焼部は馬蹄形に壁外に張り出しており、焚口部幅55cm、奥行1.30mの位置で、ほぼ垂直に立ち上がり、煙道部へと至る。

遺物出土状態　ほぼ全域に散在して出土した。

出土遺物　出土遺物総数は206点で、殆どが鬼高期の土師器小破片である。完形に近いものとして鬼高期と思われる坏7点及び甕が出土している。

H—27号住居址（fig 5－5　PL 6－5）

遺構　Xトレンチの B—3、C－2、3、D－3グリッドに位置する。H—16と重複しているが、切り合い関係からH—16より古いと考えられる。西側が調査区域外で完掘できなかったが、確認できたところでは3.6m以上×3.4m以上を測り、主軸方位E—24°—Wの長方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り下げられ、壁高18cmを測る。床面には貼り床がされ標高123.0mでほぼ平坦であった。土層は水平堆積状をなしおよそ3層にわかれる。ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　総数で614点出土している。土師器の小破片が殆どだが、隣の五千石用水を掘った際に撹乱が生じたのか、ふいごの羽口など、時代が異なると思われる遺物も目立った。

H—28号住居址（fig 7－1、2　PL 6－6）

遺構　24トレンチのD－2、E－1、2グリッドに位置する。H—24と重複関係にあるが、H—24よりは時期的に古いものと考えられる。南側は調査区域外の為全体像は明確でないが、検出

しえた住居址は3.4m×1.94mを測る。主軸はN—82°—Eを測り、ローム層を掘り込んだ、本遺跡では珍しい住居である。壁は60°で立ち上がり、壁高は19cmとなっている。床面はH—25に削平されている部分が多いが、検出できた面で測ると、ほぼ平坦で標高135.5mとなっている。周溝、ピット等は確認されなかった。土層は水平堆積状をなし4層にわかれている。

竈（fig—7）　北壁のほぼ中央に位置し、北向となっている。袖は確認されず、上面も削平されている為、煙道の残りもよくない。内壁の焼けは弱く、焼土は少なかった。竈付近に白色粘土の集積を認めたが、構築の際使用したものかどうかは明らかにできなかった。焚口74cm、奥行1.20mの竈である。貯蔵穴は確認できなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　総数は40点で、いずれも土師器の小破片で図示できるものはなかった。

H—29号住居址（fig 7—3　PL 6—7）

遺構　XトレンチのD—2、3、E—2、3グリッドに位置する。H—14、15と重複しているが、切り合い関係からみてH—14、15よりは時代的に古いものと見られる。南側が調査区域外の為、定かでないが検出したところでは4.2m以上×4.2m以上を測る。主軸方位はN—18°—Eをさす。正方形若しくは長方形の住居址と考えられる。本トレンチは隣の五千石用水や牛池川の氾濫により、幾度となく冠水をみているため、土層状態が明確にとらえられなかったが、遺物出土状況から床はほぼ平坦であると考えられる。壁も検出にとまどったが確認できたところでは14cmを測る。土層は2層で水平堆積をなし、ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から出土している。

出土遺物　出土遺物総数は253点である。紡錘車などもでているが、殆どが土師器の小破片で接合できるものは少なかった。ほぼ完形のものにカワラケ状の坏1点が出土しているが、遺物の状況からみて平安時代の住居と考えられる。

H—30号住居址（fig 7—4　PL 6—8）

遺構　XトレンチのB—3、4グリッドに位置する。H—16、19と重複しているが切り合いからみてH—16、19より新しいものと考えられる。西側が調査区域外で全体の姿が明確になっていないが、検出しえたところでは2.96m以上×2.0mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高11cmとなっている。床面はほぼ平坦で標高115.0mを測る。主軸方位はN—80°—Eとなっている。土層は水平堆積をなし、およそ3層にわかれる。ピット、周溝等は確認されなかった。

竈　調査区域内には検出されなかった。

遺物出土状態　ほぼ全域から散在して出土している。

出土遺物　出土遺物総数は54点である。殆どが土師器、須恵器の小破片で接合はできなかった。

3．井　戸　址

Ⅰ－1号井戸址（fig10　PL 7－1）

本井戸址は、W_1トレンチの北側B－2グリッドに位置する。確認面での規模は、上幅東西径1.6m、南北径2.1m、下幅東西径1.3m、南北径1.6mを測る。湧水はなかったが、土層崩落等の危険性から地表下4.5mまでしか調査できなかった。断面形はほぼ直線的に落ち込み円筒状をなす。更に地表下3.3m付近は粘土で固められていた。

遺物　この井戸からは、坏やカワラケ状の坏、五輪塔など127点出土している。これらの遺物から中世以降の遺構と考えられる。本井戸は中世蒼海城の関連も考えられる。

Ⅰ－2号井戸址（fig10　PL 7－2）

本井戸址は、W_1トレンチ、D－2グリッドに位置する。確認面での平面形は上幅東西径2.8m、南北径2.8mを測る円形である。断面形は、そのまま垂直に落ち込み深さは2.58mを測る。底部でも下幅東西径0.86m、南北径0.76mほどのほぼ円形となっている。土層はレンズ状堆積とは見られず、人為的な埋めどもしに見える。

遺物　この井戸からは、土師器14点、五輪塔、石臼等が89点出土している。この遺物等から中世以降と推定される。

Ⅰ－3号井戸址（fig10）

本井戸址は、W_1トレンチ、E－3グリッドに位置する。確認面での規模は、上幅東西径0.78m、南北径0.85m、下幅東西径0.52m、南北径0.55mを測る。比較的固い地盤を掘り抜いて作られていたが、約0.50m程下に進むと軟弱な砂質層になり地表下0.70m付近からえぐれが生じていた。土層はほぼレンズ状堆積を示しているが、崩落等の危険性から完掘できなかったため、深さは明らかでない。

遺物　この井戸からは、須恵器等3点が出土している。

Ⅰ－4号井戸址（fig10）

本井戸址は、20トレンチ西側、B－3グリッドに位置する。規模は確認面で、上幅東西径0.80m、南北径0.76m、下幅東西径0.36m、南北径0.26mのほぼ円形で、深さ3.9mを測る。断面形はほぼ垂直に落ち込んでいるが地表下1.3m付近で南側断面に幅1.7mのえぐれが見られる。

遺物　この井戸址からは、石臼3点、土師器破片等11点出土している。

4．溝　　址

W－1号溝（fig 7－5）

22トレンチ西側、A－7、8、9、B－7、8、9グリッドに位置する。ここもトレンチ調査で全容が明らかにならなかったが、調査できたところではN－13°－Wの方向性をもって南北に走る。平面規模は幅約8.5m、深さは確認面から2.15m、現地表面から2.5mを測る。大溝の西肩部はほぼ45°の角度で落ち込み、弧を描いて底部に至る。一方、テラス状平坦部を一部持つ東肩部も同様にほぼ45°の角度で落ち込み、弧を描いて底部に至る。いわば台形状ともみられる溝となっている。この大溝の覆土は13層に細分できる。このうち、7層が浅間Bアッシュの純度の高い土層であることから、そのころまでにこの大溝は埋まっているものと考えられる。9層よりも下位の土層は砂利石等を多分に含むことから水の影響を受けてきていると考えられる。おそらく水量豊かに南流していたのであろう。

ここでの遺物は見るものがなく、殆どが摩滅した土師器の小破片である。

ところでこの大溝は、過年度調査した、8W－1号溝、W－23、29号溝と東西位置がにている。このことから、それらの溝につながることも予想される。

5．耕作状遺構？

22トレンチのB－14、15、16、17グリッドに浅間B軽石を含む土層の下から畝とも見える起伏のある遺構を検出。畝と畝との間隔はほぼ30cmである。南北に走っているが、調査場所があまりに狭く断定できる資料に乏しかった。更にその土層を約20cm剝ぐと、多数の小ピットが出てきた。形状的には長さ約25cm、幅15cmの丸形、あるいは人間の足跡状のものもあり、不規則であった。人間足跡とも見えるものの深さをみると約5cm程あり、つま先に重心がかかっているようにも見えた。残念ながらこれも断定できる資料に乏しく、人間の足跡、家畜類の足跡、農具痕のいづれも肯定でき、否定もできる形状であった。

仮に農具痕ならば、播種から収穫まで、耕地に常に水を深く湛えて、除草の煩しさを省く「常湛法」にみる掘棒や鍬跡なのであろうか。

6. 土　　坑

土 坑 一 覧 表

	トレンチ名	グリット名	重複関係	面積(東西×南北) m	壁高 m	形	カマド有無	遺物数
D－1	W2	D－5	H－2 H－8	0.45×0.40	0.23	円　形		2
2	W2	D－5	H－2 H－8	0.69×0.68	0.26	〃		8
3	W2	E－7	ナ　シ	0.38×0.38	0.13	〃		
4	W2	F－7	ナ　シ	0.38×0.44	0.12	〃		
5	W2	F－7	ナ　シ	0.38×0.37	0.15	〃		
6	W2	F－7	ナ　シ	0.30×0.36	0.11	〃		
7	W2	F－7	ナ　シ	1.17×1.11	0.15	〃		
8	W2	F－7、G－7	ナ　シ	0.77×0.79	0.15	〃		1
9	W2	G－7	ナ　シ	0.59×0.62	0.06	〃		
10	W2	H－6	ナ　シ	0.37×0.34	0.35	〃		
11	W2	H－6	ナ　シ	0.40×0.37	0.12	〃		
12	W2	I－5	ナ　シ	0.69×0.68	0.33	〃		
13	W2	J－5	ナ　シ	0.55×0.52	0.31	〃		
14	W2	I－3	ナ　シ	0.30×0.28		〃		
15	W2	F－4	ナ　シ	0.29×0.27	0.08	〃		
16	W2	F－4、F－5	ナ　シ	0.44×0.69	0.30	隅丸方形		
17	W2	F－6	ナ　シ	0.33×0.31	0.15	円　形		
18	W2	F－6	H－3	0.59×0.60	0.14	〃		2
19	W2	I－6	ナ　シ	0.35×0.41	0.26	〃		
20	W2	I－6	ナ　シ	0.30×0.33	0.27	〃		
21	W1	B－2	ナ　シ	0.46×0.46	0.31	〃		
22	W1	C－2、D－2	H－6	0.88×0.90	0.47	〃		4
23	W1	D－2	H－6	0.48×0.50	0.32	〃		
24	W1	D－2	H－6	0.30×0.37	0.40	〃		
25	W1	D－2	H－6	0.55×0.68	0.40	方　形		
26	W1	D－2	H－6 D－29	0.52×0.47	0.28	円　形		
27	W1	D－1、E－1 D－2、E－2	ナ　シ	0.59×0.50	0.35	〃		1
28	W1	E－2	ナ　シ	0.42×0.42	0.20	〃		
29	W1	D－2	H－6 D－29	0.48×0.52	0.60	〃		5
30	W1	E－1、F－1 E－2、F－2	ナ　シ	0.80×0.68	0.17	〃		
31	W2	E－7	H－4	0.37×0.32	0.20	〃		2
32	W2	E－7	H－4	0.40×0.38	0.26	〃		1
33	W2	E－7	H－4	0.44×0.46	0.12	〃		1
34	W2	E－7	H－4	0.38×0.42	0.21	〃		2
35	W2	E－5	ナ　シ	0.75×0.86	0.43	〃		2
36	W2	E－7、E－8 F－7	ナ　シ	0.56×3.60	0.16	長方形		1
I－1	W1	A－1、B－1	ナ　シ	(1.94)×(1.74)	2.16	円　形		
2	W1	C－2	ナ　シ	2.78×2.82	2.73	〃		18
3	W1	E－1	ナ　シ	0.74×0.66	1.50	〃		1
D－37	20	A－3、B－3	I－4	1.35×1.52	0.31	楕円形		0
38	20	A－3、B－3 A－4、B－4	D－41	1.21×1.32	0.55	円　形		0
39	20	B－4	D－42	0.18×(0.6)	0.16	隅丸方形		0
40	20	B－4、B－5	ナ　シ	(2.08)×1.28	0.56	隅丸長方形		0
41	20	A－3、B－3 A－4、B－4	D－38	1.18×(0.74)	0.69	隅丸方形		0
42	20	B－4	D－39	0.94×(0.46)	0.12	〃		0
43	22	B－5、C－5	ナ　シ	0.12×0.1	1.10	円　形		0
44	22	C－4	ナ　シ	0.86×0.41	0.46	〃		0
45	22	C－4	ナ　シ	0.82×0.82	0.23	〃		0
46	22	A－4、B－4	ナ　シ	0.66×0.82	0.11	隅丸方形		5
47	22	A－3、B－3	ナ　シ	0.52×0.98	0.11	〃		0
48	22	B－3	ナ　シ	0.42×0.38	0.08	円　形		0
49	X	D－4	ナ　シ	1.08×0.85	0.14	楕円形		22
50	X	E－3、F－3 E－4、F－4	ナ　シ	1.24×1.17	0.14	円　形		24
51	X	D－3	ナ　シ	0.87×2.58	0.55	隅丸方形		150
I－4	20	A－3	D－37	0.78×0.74	3.87	円　形		0
D－52	X	F－3	D－37	1.18×1.18	0.10	〃		2
D－53	24	B－2、B－3	H－27	0.58×0.45	0.32	〃		3

Ⅵ　ま　と　め

(1) 住　居　址

本遺跡で検出した住居址は30軒であった。しかし例年のようにすべてトレンチ発掘のため、殆どの遺構がその一部分を確認したにすぎなかった。これを時代別に見ると、古墳時代期10軒、奈良平安期20軒である。

古墳時代住居址

23、24トレンチで確認している。いずれも鬼高期住居址で、比較的安定した地盤の上に構築されており、牛池川の東側に位置する。住居址の全容を明らかにしていないので考察しがたいが、24トレンチのH—26は住居址は一辺が7mにも及ぶ大きな住居址である。出土遺物は埦や坏などが多い。この時代の住居址は本遺跡の北辺、牛池川左岸にあたる位置に特に目立つ。いずれも安定した地盤を切って構築されており、その検出状況からおそらく集落を形成していたと思われる。

奈良・平安時代住居址

この時代の住居址はほぼ全域にわたり検出されている。いずれも狭い場所の中に複雑に重なりあって作られており、壁高は割合低い。おそらく限定された住居区の中で、短時間に住居がこわれ且つ作りかえられていったものと思われる。それは一つには当時の建築工作や建築材からして耐用年数が短いということ（伊勢神宮の式年遷宮が20年というのは、当時の建築がその程度の耐用年数しかなかったという説がある)、更に推定国府域の中という事情から居住区に制限があったことを物語っているのではないだろうか。

また更に年代別に見ていくと平安時代前期よりも、後期の住居址が目立つ。7～9世紀住居址が少なく、10世紀～11世紀の住居址が、圧倒的に多いことに気づく。なぜであろうか。もし当時の地形が人工的な手によりつくり変えられていないとすれば、律令政治さかんな7～9世紀には牛池川東岸には集落があまりなかった。そして榛名山麓の東南端である牛池川西岸にその居住区があったと考えることができるのではないか。つまり推定国府中心地宮鍋様辺りから続いたであろう、一連の官衙群の近くに居住区があったのではないか。残念ながらその推定地周辺は、今回の区画整理事業範囲外の為詳細は不明なことが多い。また蒼海城址でもある為、削平されているとも考えられる。そして10～11世紀の住居地が牛池川東岸に出てくるが、それは律令制の衰退により居住区の制限がなくなってきたことと、あるいは人口増加により国府中心域から郊外ともいえる場所へ人々が次第に移っていき、いわば衛星都市的になっていったことなどが考えられる。この地域の竈には円柱にも似た河原石をつかう例が多いが、中にはその河原石の他に瓦を利用している例もよく見られる。当時の瓦は貴重品ともいえるだけに、当時使用されなくなったものを利用しているに違いない。これは国府の瓦かも知れない。この想像が正しければ、この頃の国府の力は相当低下していたのではないかと考えるのである。

2．瓦について

昨年度及び今年度検出した瓦をfig17、18にまとめてみた。本遺跡では例年瓦破片を検出しているが、産地別に見ると、乗附、吉井、秋間の観音山丘陵系の土を主体にしたものと、笠懸系の四つに大別される。昨年度は笠懸系瓦が多かったが今年度は西毛の割合が高かった。更に時代別では８世紀中葉の終わりのものと、９世紀末～10世紀前半のものとに分けられるのであるが、今年度瓦は８世紀中葉が主体であった。出土の場所は様々であるが、それにしても軒丸瓦の出土が少ない。工法では縄たたきが圧倒的に多く、格子たたき瓦はわずかに３点を数えるのみであった。県内で古い寺院といわれる山王廃寺や伊勢崎の上植木廃寺出土の瓦の多くが、格子たたきであることを考慮すると、それらの廃寺よりも時代的に新しいことがわかる。

一般的に見て上野国の地方官衙は８世紀を中心とした頃に瓦使用建築となる傾向があるが、本遺跡の瓦の状態から見てそれも頷ける。この世紀に何らかの政治的意図があるのであろうか。

ところで国府の近くに国分寺があるが、本遺跡と同町内にある神明東遺跡に、国分寺瓦と同笵関係にあると見られる瓦破片が出土している。更に61年には軒丸瓦の瓦当面と同一個体の２点出土しているが、意匠は上野国分寺と同笵をなす。また60年にも同笵ではないが、同一意匠のものを出土している。これらを考慮すると、国府及び国分寺瓦の供給源及び流通ルートも一緒ではないだろうか。

「延喜式」（主税下）に示す正税帳の書式に、正倉若干字とある中に「瓦倉若干字」とあることなどからみれば、諸国の正倉のうちには瓦倉があると見られている。従って国府でも瓦は使用されていると思われるのだが、このように国分寺と国府の使用瓦は、完全に合致しないまでも密接な関係があるとも考えられるのである。このような関係は近江、陸奥（多賀城）を初めとし、常陸、出雲、肥前、美作、伯耆、下野などにおいても認められている。そして、これらの諸国府では陸奥（多賀城）を除けば、国分寺建立以前と思われる瓦の使用は見当らないようなことから、国分寺の建立に際してその瓦を製造する官営の瓦窯が設けられ、国分寺の施工後はその製造瓦で国府の主要建物が瓦葺きにされたことを思わせるのである。

本遺跡瓦は昨年度出土の瓦当面も含め、文様が簡略化されているのが特徴で、花弁や中房などは、線刻のようにみられる直線で12分割を表しており、さらに円を表すだけにとどまっている。また表面に布目（平目）のあるものが多い。これらのことから時代を考えると10世紀頃に比定できるので、国府の衰退期の瓦と言えよう。

Ⅶ　国府調査のあゆみ

今まで述べてきたように、元総社地区の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘は今年度で第7年次を迎えている。この調査では特に国府解明に重点をおいて行なってきた。調査できたのは主に道水路部分だけという、発掘にとっては全容を解明しずらい条件ではあったが、それでも住居址数は今年度までに336軒を検出した。それを時代別に分類したのがfig19～22であり、出土した土器を時代別に分類したのがfig24～30である。何かの参考になればと思う。

この調査も残りあと2年となったことから、今までの国府解明の足跡を整理し、今後の調査への礎としたい。

延喜式によれば古代上野国は「大国」の等級づけがなされている。つまり、守・介・掾・目の国司をはじめ約700名にものぼる役人をかかえる国衙のあった国なのである。

上野国府の位置については、承平年間（931～38）に源順の書いた「倭名類聚鈔」（倭名抄）の群馬郡の註に「久留米、国分為東西二郡に分かれ、国府はその2郡の中間にある」というのである。その2郡とは東群馬郡、西群馬郡であり、総社神社に祀られている「上野国神名帳」などの資料から東西群馬郡の境は前橋市元総社町付近となる。

各国の国府の例をみると、国衙の近くには総社神社や国学(学問所)などの関係遺跡があり、また、そう遠くない地に国分寺や駅家、国府の市・庁舎・染谷・倉のつく地名などのあるのが普通である。因みに元総社町周辺には染谷川・牛池川・八日市場・古市・巣烏分・石倉・大友などがある。

これらの文献史料や歴史地理学の研究成果の他、発掘調査でも数々の成果をあげている。国府から都へ通じる当時の一級国道東山道もこの付近を通っていることが明らかになってきている。

ところで発掘において国府域を求める際の判定基準はどこであろうか。もしできるならば最良の方法は八町域を示す境界線（築地や溝）を検出することであり、更には国衙域を検出することであろう。

そこでもう少し的を絞って国衙として判定基準としてみると次のようになる。

(1)　掘立柱建物が一般的であり、朝堂院や曹司地区の中心建物などには礎石建物がある。（註）古代の役所より

(2)　掘立柱の柱穴は、一辺1m以上の方形のものが多く、そのなかにすえられた柱は直径30cm以上のものが一般的である。

(3)　建物の平面規模では、桁行が5間や7間で、梁行が2間の例が多く、桁行全長が10m以上に及ぶ大規模な建物が多い。

(4)　建物の柱間寸法は7尺以上と広く7尺、8尺、10尺など、完数尺で設計するのが一般的である。

(5)　一つの区画の中にある建物の方位は一定しており、その配置をみると、同一直線上にならんでおり、直角の位置におかれているのが普通で、全体としてL字型やコ字型、凵型に建物が配されていて、そこには一つの企画が貫徹していることが認められる。

(6) 中枢となる施設には、瓦葺きの建物がある。

(7) 周囲や内部を築地塀あるいは柵や溝によって区画したり、仕切ったりしている。

(8) 木簡や墨書土器、あるいは文字を書くための硯など、文字関係の遺物が多い。

(9) 釉薬をかけたやきものである三彩や緑釉など、とくに貴重な陶器がある。また、四角形や半円形の小型の装飾部品が出土する。この装飾部品は、金属製品（帯金具）と石製品（石帯）とがあって、役人を象徴する革帯を飾る。

(10) 大量に出土する土師器や須恵器の用途をみると、食器類が圧倒的に多く、煮炊き用や貯蔵用の土器が少ないという特徴がある。それは、宴会がしばしばもよおされ、多人数の食膳の調製が一括しておこなわれたことによる。

これらをふまえて今までの発掘をながめるとおおむね次のようである。

昭和36年～38年度

当時元総社小学校の校庭から土器が出土したということで、同年11月に土師器使用住居址の発掘調査をしたところ、建築遺構の柱穴があらわれた。梁間5間、桁行2間の中柱と古いものと梁間4間、桁行2間で、西寄りに中柱を1本もつものとの2建築遺構が南北に前後して発見された。この年には全貌を知るところまで至らなかったのであるが、37年・38年と継続して発掘し、敷石残片、その他の遺構の柱穴などを求めえた。

この建築遺構は8世紀頃のものと推定される。柱は礎石を有せず、掘立てである。その柱穴は四角な掘り方に丸柱を置いて、その根を粘土でかためている。このような遺構は当時の一般人の建物と考えられる。これは先にあげた役所の基準(1)に照らしあわせ、判断した例であろうか。

昭和39年度

この時は従来の位置を離れて、校庭東南部に調査がすすめられたが、終戦直前に着手された忠霊塔の基礎の石があらわれただけであった。

昭和40年度

従来の元総社小学校校庭は地名、地図上の条里制的地割等からみて、当時推定国庁の西南に偏していると見られるので、その推定地大友町字雲雀街道付近に調査地点が移される。この地は、東北に大友町、東南に石倉町、南に古市町、西に元総社町の集落をめぐらした方6町～8町にあて得る広い耕地の北端に位置し、この南辺の中央から南へ直線で細長い耕地が走る。これを中心に東西の条里制に似た地割りが通っており、その西側の小字名が巣烏といい、朱烏ともとれる。すなわち、朱雀大路とみた。

このように地名から推定しておこなわれた発掘調査では、柱痕群とその周濠跡等が発見された。

昭和41年度

前年度近くの場所で調査が行なわれたが、1棟の建築を推定し得る8個～10個の柱痕、東西に走る大規模な溝と小規模な溝、井戸等を発見したが、拡がりと様相からして7～13世紀の生活面と見られるのである。当時明らかにされていた近江国衙と照らし合わせ（方2町の範囲に、南北

に回廊で連なる2棟の基壇上の正殿跡、この左右に配された南北に長大な基壇上の脇殿各1棟、これらを囲繞する築地垣の地、南門を発見)、引き合う資料を得ず、却って国府基準を満たさないという「消去法」により国府域をせばめる資料としても捉えられるのである。

昭和42年度

昭和41年度に確認された東面、南北方面にはしる大規模な溝の性格とその形状並びに規模に関する調査や昌楽寺裏地域の調査がおこなわれた。今年度調査の23トレンチの近くにある。このうち昌楽寺裏では、柱痕らしいものが多数発見されたが、そのうちの16個は一定の方向性をもって配列され、四角な掘り方を伴って、各間隔もやや等しく、元総社小学校校庭の出土のものに似て一棟の建築遺構として認められた。東西桁行6間、南北梁間2間である。また、建築遺構の西南に上端径2m10cm深さ4m20cmの大井戸が掘り出され、その底部から文字瓦が出土した。文字の判読は困難であるが、8世紀代のものであった。これらのことから大友地区には前記基準を満たすものがないということで「今まで考えていた範囲を西方にずらすことが妥当」であり、元総社小あるいは昌楽寺裏などの発掘結果から、元総社地区に的が絞られてくるのである。

昭和43年度

昌楽寺近辺の調査及び巣鳥分の東側に南北に走る細長い耕田の中央部を発掘したが、昌楽寺裏の畑地ではいずれも数個の土師器使用の住居址が発見され、巣鳥分東側の朱雀大路と思われた地点では水路の痕跡が確かめられた。しかし大友町は確たる国府資料を得ないことから、推定国府域から外されていった。

以上の調査により、とりわけ上野国府は掘立柱建物群に目をつけてきたことがわかる。しかし今までの掘立柱建物群だけで国府域を示す十分条件にはならない。その他の資料もみつけることが大切である。以下元総社明神遺跡により明らかになってきたことを述べてみたい。

昭和57年度

この年は確認調査(一部発掘調査)が行なわれ、住居址45軒、溝10条その他が確認されている。これを時代別に見ると、古墳時代住居址は、8・C・Gトレンチで15軒が確認されている。これらの住居址は一様にローム層を50cm程掘り込み、貼床を施していた。

一方奈良、平安時代の住居址は各トレンチで確認されている。ほとんど羽釜出現以降のものと考えられる。主な遺物として、土師・須恵・羽口・瓦(丸瓦・平瓦)とかなりの量の灰釉陶器が出土している。特に緑釉片も、1・8トレンチから出土している。

昭和58年度

この年は昭和57年度調査地であった幹線道路予定地の北にある。牛池川左岸の漸次北西に向って緩やかにのぼる台地上の調査であった。

遺構は、住居址47軒、溝10条、井戸4基他多数を検出した。遺物も灰釉、緑釉や土師器、須恵器他多数を取り出している。この遺跡地を俯瞰すると、古墳時代住居は牛池川に近い牛池川東岸に分布していることがわかる。また、奈良・平安時代住居址は今回発掘の全住居址の5/6を占め、

遺跡地の全面に分布し、特に牛池川を離れた東側はこの時代の住居址割合がはるかに大きいことも読みとれるのである。

一方、大溝については、6・8・11・13トレンチで検出され、それらがほぼ南北に走る溝で、時代的にも埋没開始時期が10世紀前葉と同じと見られることから、同年2月元総社町字閑泉樋で検出したN－89°－Eに走る溝につながり、それらが推定国府域の北と東の外郭線だとして、方8町の国府域を示す図も想定された。この推定国府外溝ライン内には先にあげた元総社小も昌楽寺も含まれる。一般的に国府域の区画施設には、低い土塁または土居をめぐらす場合が多いといわれるが、当時の城柵的機能をもった国府では溝渠が多いという見方からすれば、国府外郭溝はありうるのである。

しかし問題点もないわけではない。例えば溝の形状である。閑泉樋で検出された溝はしっかりと逆台形状を呈するのに対し、南北に走る溝は緩やかな薬研状であり、自然流路にも似ているのである。東西に走る溝は人工的に掘り下げ、南北は自然流路を利用したのであろうか。あるいは流れが強く浸食著しかったのであろうか。

昭和59・60年度

このようにおぼろげにではあるが徐々に国府域が絞られてきている。この年牛池川の氾濫原と思われる谷地状の低地に初めて発掘調査の手が入り、FA降下以前の泥炭層の中から、木杭、梯子、建築部材・木器等を出土している。つまり、総社神社の東側は、6世紀初頭以前において湿地状を呈していたと考えられるのである。この谷地状況地は浅間B降下以前の段階で、かなり大きな流れがあったと考えられる。ここは推定国府域内であるが、このような状態から考えるとかなり自然地形を保っていることになる。ということは方8町などに見られる強い規格性をどこまで保ちえたかが疑問にもなってくるのである。換言すれば国衙域はともかく、他の国府域については自然発生的にできてきた集落が次第にこの数を増し、いわば衛星都市的集落を形成していったのではないかと思うのである。

次に住居址についてみると74軒検出している。古墳27軒・奈良・平安47軒であるが、集落により国府の的を絞ると特に調査地南方の14トレンチで24軒、Mトレンチで7軒と半分以上集中している。この地が国府集落の東限ではないかとも考えられる。

昭和61年度

住居址は54軒検出した。それを時代別にみると、古墳時代29軒、奈良・平安時代25軒である。Pトレンチは古墳時代のみの住居であることから、国府がさかんな奈良・平安時代にはこの周辺は住居が疎の状態だったのではなかろうか。9トレンチからは古墳時代13軒、奈良・平安時代16軒、更にCトレンチからは古墳時代9軒、奈良・平安時代8軒が検出されている。この9・Cトレンチは重複が著しく、極めて短時間において住居変遷がおこなわれていたと考えられる。更に特筆すべきは、9トレンチからは多量の銅滓、鉄滓の出土があり、10点を越えるフイゴの羽口も検出されている。

昭和62年度

この年の遺構には住居址101軒、井戸址4基、畝状遺構2面等を検出している。このうち住居については、Vトレンチ及びTトレンチに数多く検出していることがわかる。Vトレンチについては台地が落ちこむ斜面部であり、Tトレンチは更に調査済の9トレンチ近くである。このことから、T・G・9トレンチ周辺に奈良平安期の集落があったのではないかと考えられる。また、Vトレンチでは緑釉陶器や石製丸鞆の破片が出土している。しかし、Vトレンチの西側台地上は蒼海城築城のためか、旧表土が削平されており、現地表下約30cmで台地を形成する水成堆積の硬質土層になってしまう。

以上のことから次のようなまとめをしたい。

・24トレンチ、23トレンチ等に古墳時代住居が目立つ。この辺りの表土削平が著しいのか、あるいは奈良平安期には住居は少なかったのか。

・昌楽寺及び元総社小学校に官衙らしい建物があり、その周辺に恰かも衛星都市のような集落が並んでいたのではないか。

・牛池川西岸にあたる台地は縁辺に住居があり、更に当時としては貴重な遺物が出土していることから、おそらくその西の台地上には住居址が多く重要な建物群もあったと思われるが、おそらく表土削平によりその痕跡はつかみずらいのではないか。

・元総社小学校東側の谷地は河川の遊水池になっていたのではないか。そこからは木製品や塗り椀、青磁の椀、更に「寺」と書かれた瓦が出土していることから、近くに何らかの特別な建物施設があったのではないか。

・更に西側の天神遺跡では白磁・緑釉が多く出土していることから、この辺りまでが国府に関係するのではないか。

今後注意すべきことをあげてみよう。我々は国府域を「大国」として方8町を想定し、北限を画すると思われる逆台形状溝や、東限を示すかもしれないという溝を確認してきているが、果たしてその規格通りの国府であったのだろうか。全国の例を見ると、多賀城や城輪柵のように四周に明確な囲部を認めるものや、周防、近江、讃岐などのように、二、三方を周濠的な川や水路に限られているものもあるが、その他の多くは国府推定地では周郭にあたるものは殆ど見当らない。元総社地区では溝が相当検出されているので、方8町を示す溝を想定しやすいのであるが、十分配慮せねばならないと考えている。

更に留意点をあげてみよう。たとえば、当時の上野国の有力者の力関係はどうなっているのか。更に生産基盤はどうなのか。交易関係はどうなっているのか。東山道と国府の関係はどうなのか。あるいは地名から推して、石倉は果たして穀倉なのか。そうすると国府と1km離れているのはなぜか。……

これからも総合的に国府を見つめ、調査していかねばならないと考えるのである。

参 考 文 献

金子正人・白石光男『群馬県前橋市大友屋敷II遺跡』(1987) 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団

金子正人・白石光男『群馬県前橋市堰越II遺跡』(1988) 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団

高橋正男・前原豊『神明東遺跡』(1987) 前橋市教育委員会

橋本博文・加部二生「VII群馬県」『古墳時代土器の研究』(1984) 古墳時代土器研究会

高橋正男・前原豊『勝呂遺跡』(1987) 前橋市教育委員会

近藤昭一・岸田治男・木暮誠・町田信之『前箱田遺跡』(1982) 前橋市教育委員会

鵜木晋一・岸田治男・前原豊・林喜久夫・江部和彦『中大門遺跡』(1983) 前橋市教育委員会・明和ゴム工業株式会社

須田茂『入谷遺跡II』新田町文化財調査報告書　第6冊 (1985) 群馬県新田町教育委員会

金子正人・船藤享・荻野博己『群馬県前橋市五反田遺跡』(1987) 前橋市教育委員会

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

高橋正男・前原豊『屋敷遺跡』(1987) 前橋市教育委員会

肥田順一『樋越遺跡』(1986) 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団

千田幸生『閑泉樋南遺跡』(1986) 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団

木暮仁一・柿沼恵介・須田茂『入谷遺跡一律令期の瓦葺建築遺構の調査』新田町文化財調査報告書　第3冊 (1981) 群馬県新田町教育委員会

藤岡謙二郎『国府』(1969) 日本歴史叢書25　吉川弘文館

岸俊男・阿部義平他『国立歴史民俗博物館研究報告　第10集』(1986) 国立歴史民俗博物館

前原豊・江部和彦『柿木遺跡』(1984) 前橋市教育委員会

中沢悟『清里・陣場遺跡』「出土土器の分類と編年」(1982) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

尾崎喜佐雄・松島栄治『昭和41年度上野国府跡発掘調査概報』(1967) 上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会

尾崎喜佐雄・松島栄治『昭和42年度上野国府跡発掘調査概報』(1968) 上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会

尾崎喜左雄・松島栄治・井上唯雄『昭和43年度上野国府跡発掘調査概報』(1969) 上野国府跡発掘調査委員会・前橋教育委員会

前原豊『閑泉樋遺跡』前橋市文化財報告書第13集 (1982) 前橋市教育委員会

尾崎喜左雄「国府推定地の発掘調査」『前橋市史』第1巻 (1971) 前橋市史編さん委員会

唐沢保之・井野修二・前原豊・加部二生『草作遺跡』(1985) 前橋市文化財発掘調査団

茂木由行「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 (1984) 群馬県考古学談話会

木下良『国府』その変遷を主にして

山中敏史・佐藤興治『古代の役所』　岩波書店 (1985)

『元総社明神遺跡　I～VI』(1982～1987) 前橋市教育委員会

fig. 1　遺構

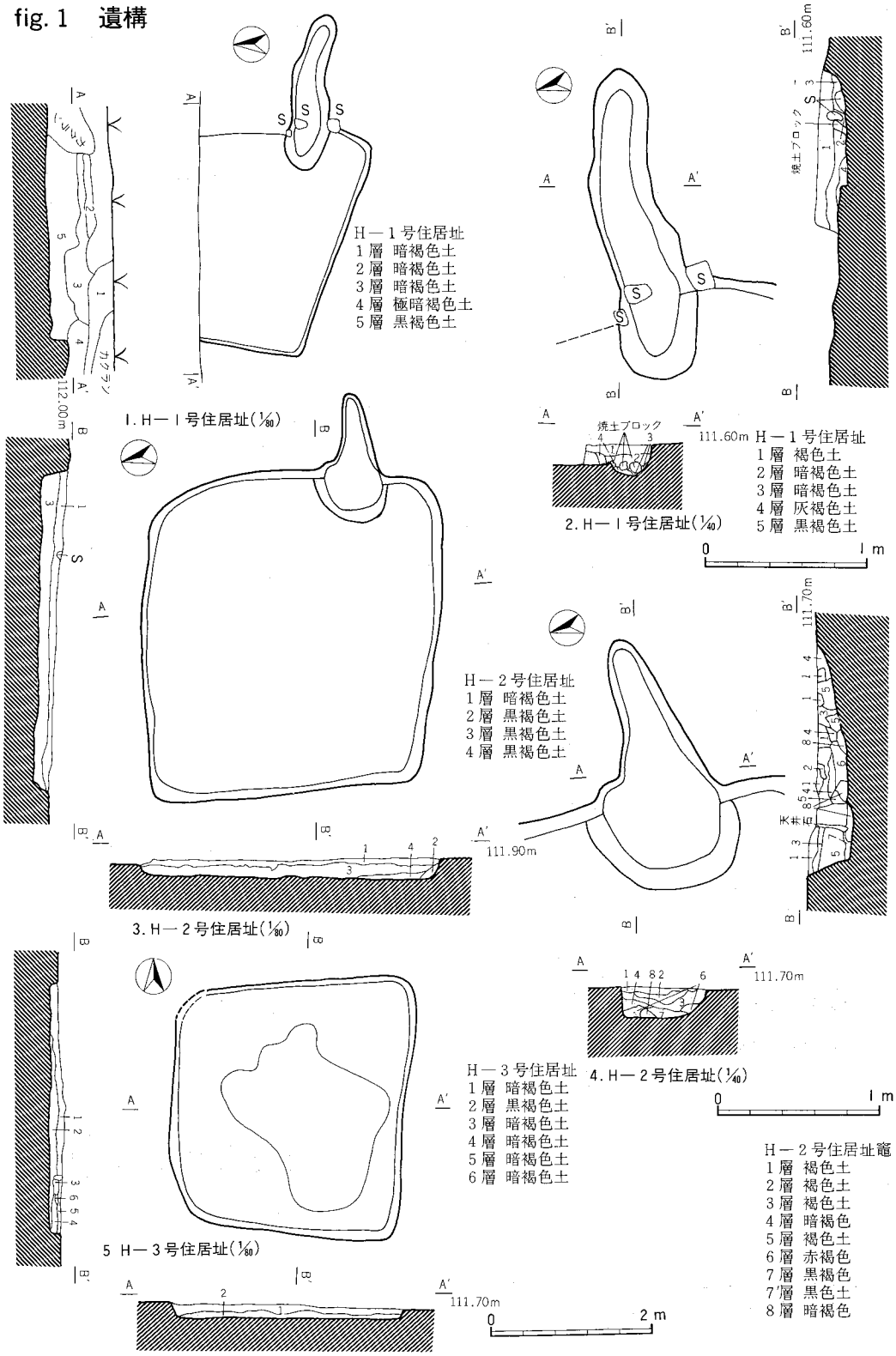
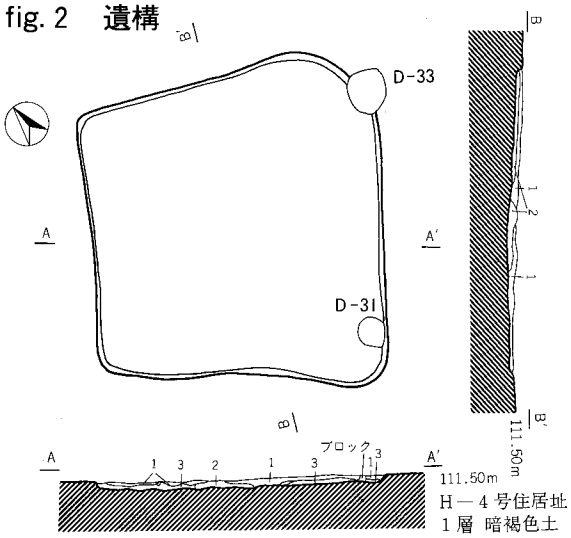
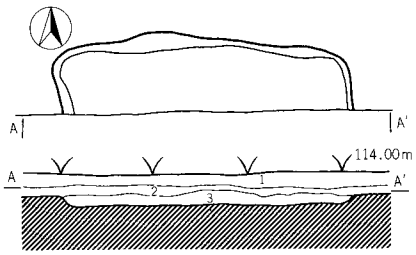

H－1号住居址
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 極暗褐色土
5層 黒褐色土
1. H－1号住居址(1/80)
H－1号住居址
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 灰褐色土
5層 黒褐色土
2. H－1号住居址(1/40)
H－2号住居址
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
4層 黒褐色土
3. H－2号住居址(1/80)
4. H－2号住居址(1/40)
H－3号住居址
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 暗褐色土
6層 暗褐色土
5 H－3号住居址(1/80)
H－2号住居址竈
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
4層 暗褐色
5層 褐色土
6層 赤褐色
7層 黒褐色
7'層 黒色土
8層 暗褐色
焼土ブロック
カクラン
111.60m
112.00m
111.90m
111.70m
0
1 m
2 m

fig. 2　遺構



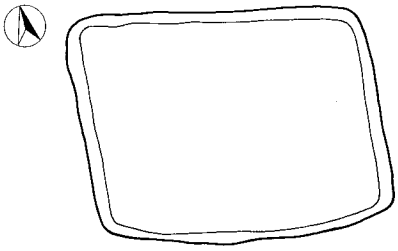
1.H－4号住居址(1/80)

H－4号住居址
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 黒褐色土

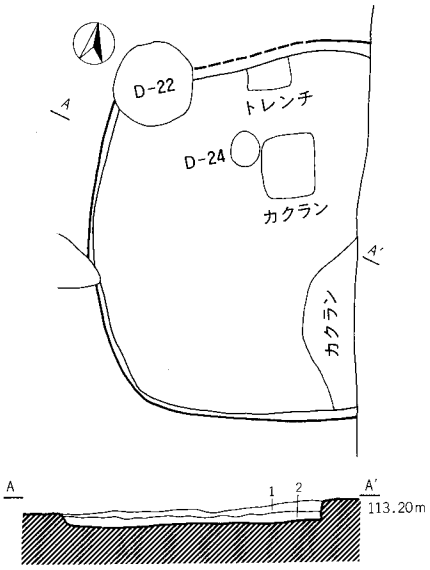


2.H－5号住居址(1/80)

H－5号住居址
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土

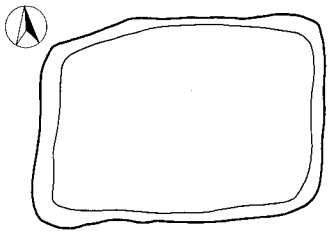


4.H－7号住居址(1/80)

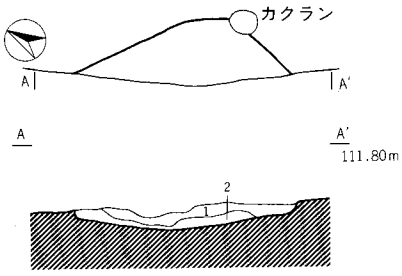


3.H－6号住居址(1/80)

H－6号住居址
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土

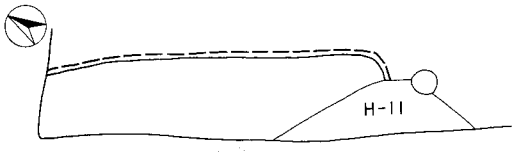


5.H－8号住居址(1/80)



7.H－11号住居址(1/80)

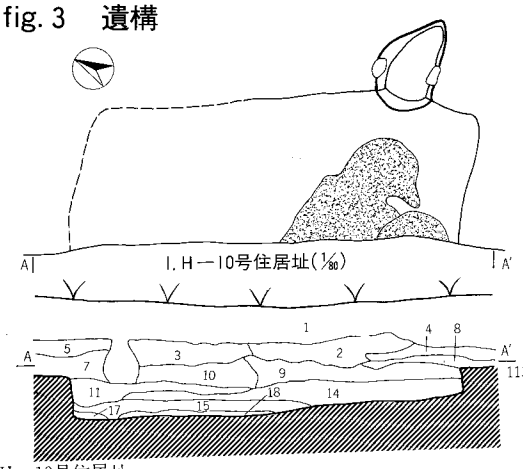
H－11号住居址
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土



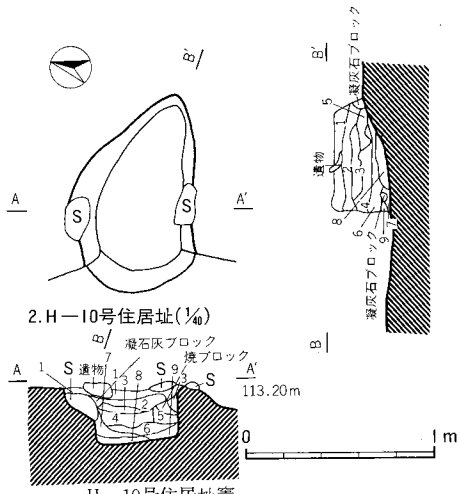
6.H－9号住居址(1/80)

0　2 m

fig. 3　遺構



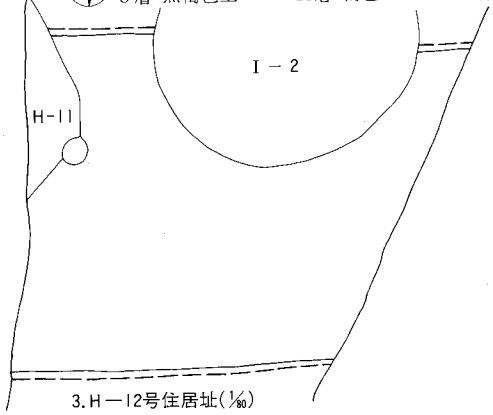
1. H－10号住居址(1/80)



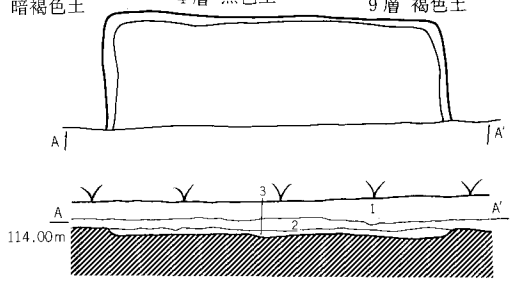
2. H－10号住居址(1/40)

H－10号住居址
1層 攪乱
2層 褐色土
3層 褐色土
4層 浅黄橙色土
5層 暗褐色土
6層 暗褐色土
7層 褐色土
8層 黒褐色土
9層 褐色土
10層 褐色土
11層 黒色土
12層 暗褐色土
13層 褐色土
14層 暗褐色土
15層 暗褐色土
16層 褐色土
17層 暗褐色土
18層 暗褐色土

H－10号住居址竈
1層 にぶい黄褐色土
2層 灰褐色土
3層 褐色土
4層 黒色土
5層 褐色土
6層 褐色土
7層 黒褐色土
8層 褐色土
9層 褐色土

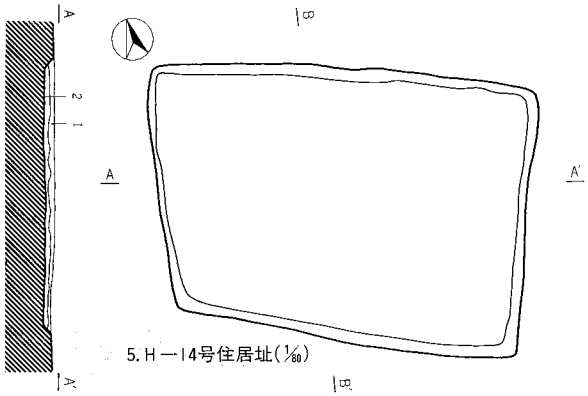


3. H－12号住居址(1/80)

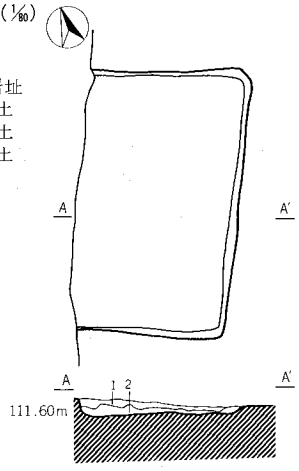


4. H－13号住居址(1/80)

H－13号住居址
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土

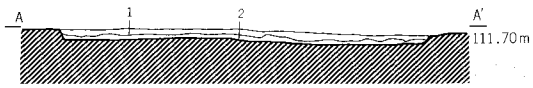


5. H－14号住居址(1/80)



6. H－15号住居址(1/80)

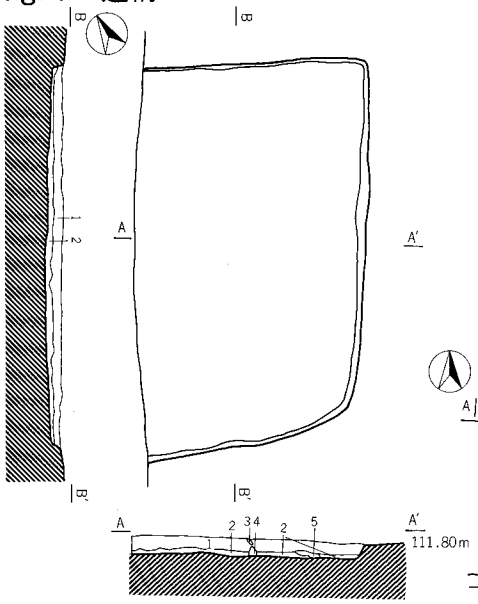
H－15号住居址
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土



H－14号住居址
1層 暗褐色土　2層 暗褐色土

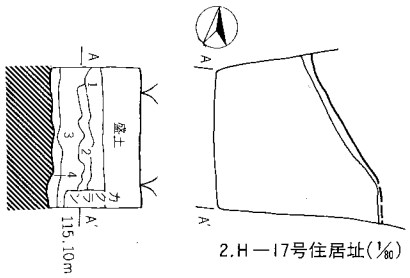
0　2 m

fig. 4　遺構



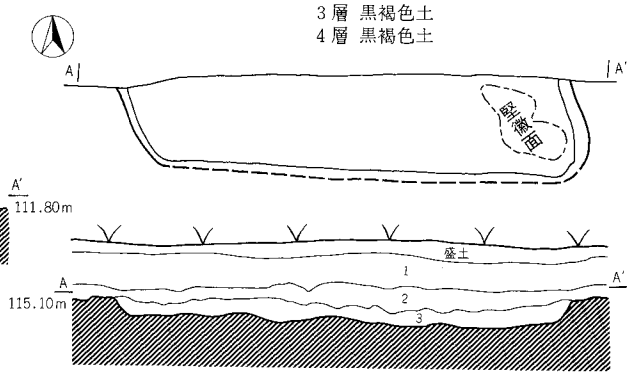
1. H－16号住居址(1/80)

H－16号住居址
1層 黒褐色土
2層 黒褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 褐色土

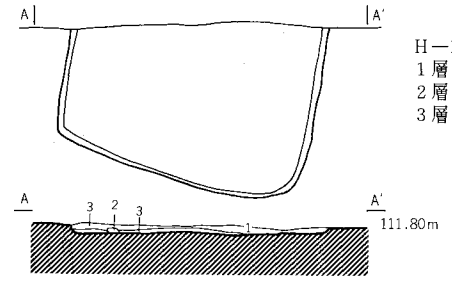


2. H－17号住居址(1/80)

H－17号住居址
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
4層 黒褐色土

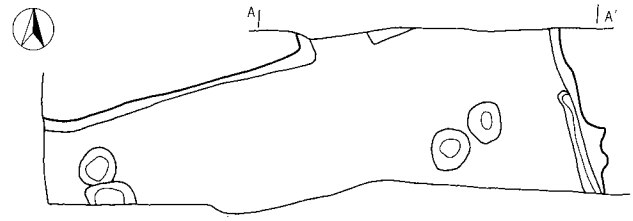


3. H－18号住居址(1/80)

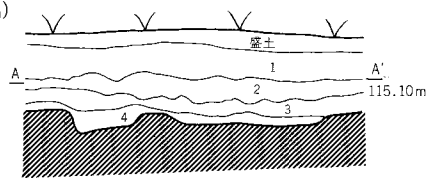


4. H－19号住居址(1/80)

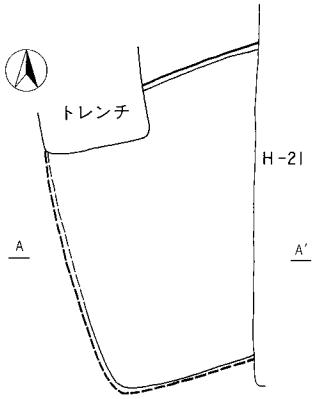
H－19号住居址
1層 褐色土
2層 黒褐色土
3層 暗褐色土

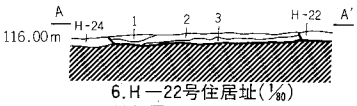


5. H－20号住居址(1/80)



H－20号住居址
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
4層 黒褐色土



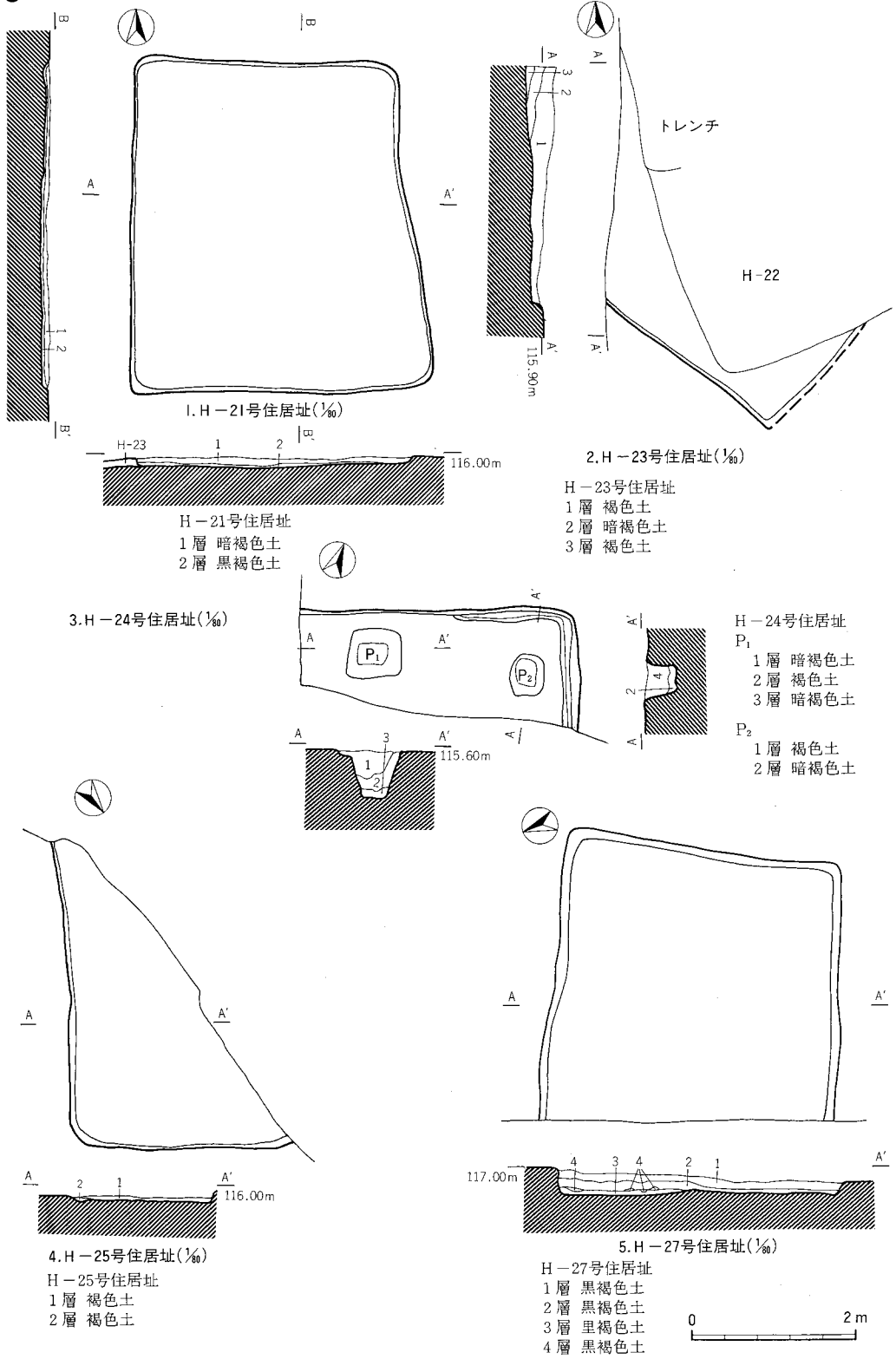


6. H－22号住居址(1/80)

H－22号住居址
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土

0　2m

fig. 5　遺構



1. H－21号住居址(1/80)

H－21号住居址
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土

2. H－23号住居址(1/80)

H－23号住居址
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 褐色土

3. H－24号住居址(1/80)

H－24号住居址
P_1
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
P_2
1層 褐色土
2層 暗褐色土

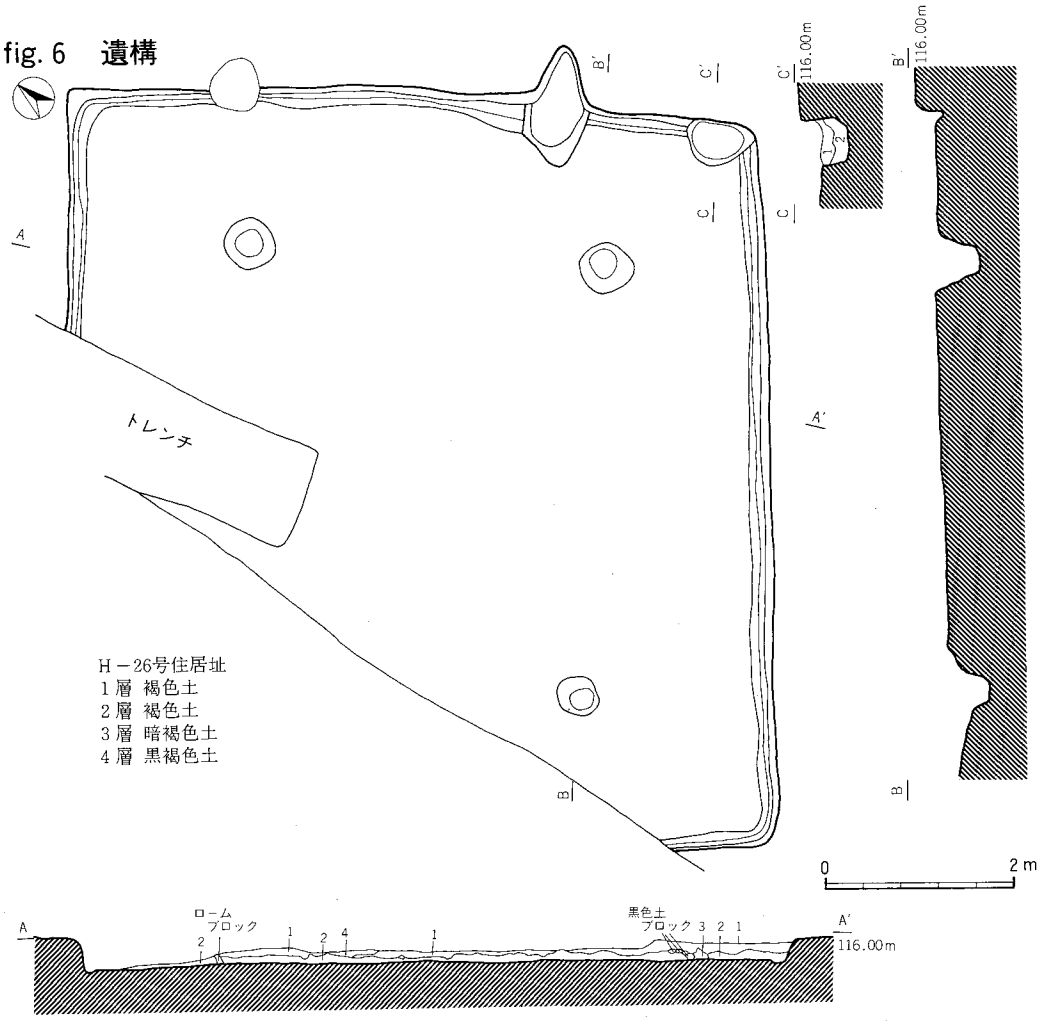
4. H－25号住居址(1/80)

H－25号住居址
1層 褐色土
2層 褐色土

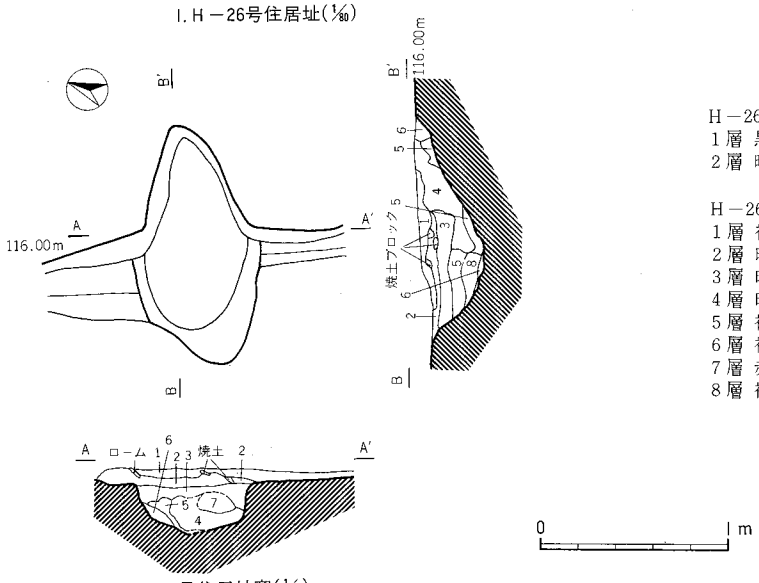
5. H－27号住居址(1/80)

H－27号住居址
1層 黒褐色土
2層 黒褐色土
3層 里褐色土
4層 黒褐色土

fig. 6　遺構



1. H－26号住居址(1/80)



2. H－26号住居址竈(1/40)

fig. 7　遺構

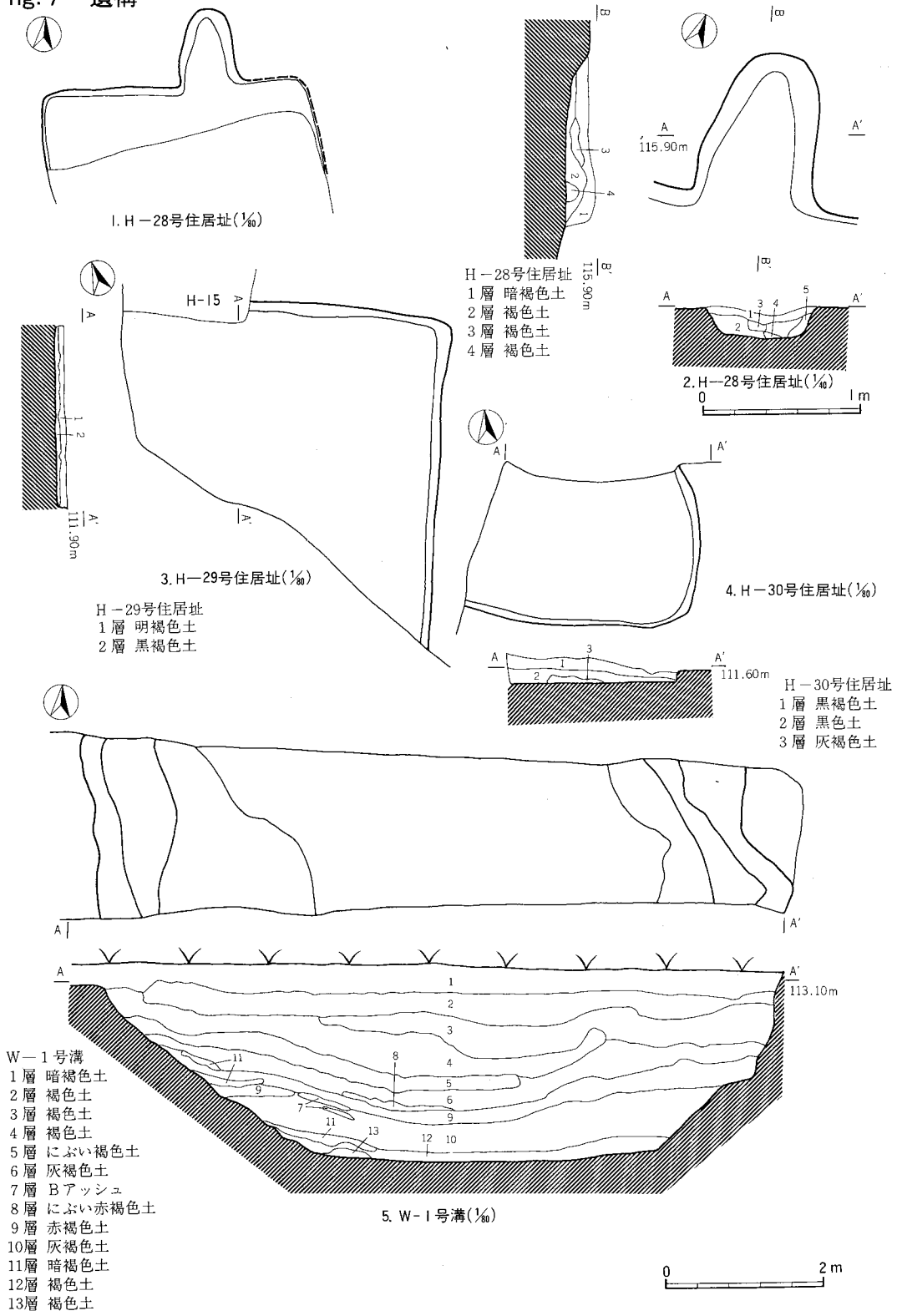

1. H－28号住居址(1/80)
H－28号住居址
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
4層 褐色土
115.90m
2. H－28号住居址(1/40)
0
1m
H-15
3. H－29号住居址(1/80)
H－29号住居址
1層 明褐色土
2層 黒褐色土
111.90m
4. H－30号住居址(1/80)
111.60m
H－30号住居址
1層 黒褐色土
2層 黒色土
3層 灰褐色土
113.10m
W－1号溝
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
4層 褐色土
5層 にぶい褐色土
6層 灰褐色土
7層 Bアッシュ
8層 にぶい赤褐色土
9層 赤褐色土
10層 灰褐色土
11層 暗褐色土
12層 褐色土
13層 褐色土
5. W-1号溝(1/80)
0
2m

fig. 8　遺構

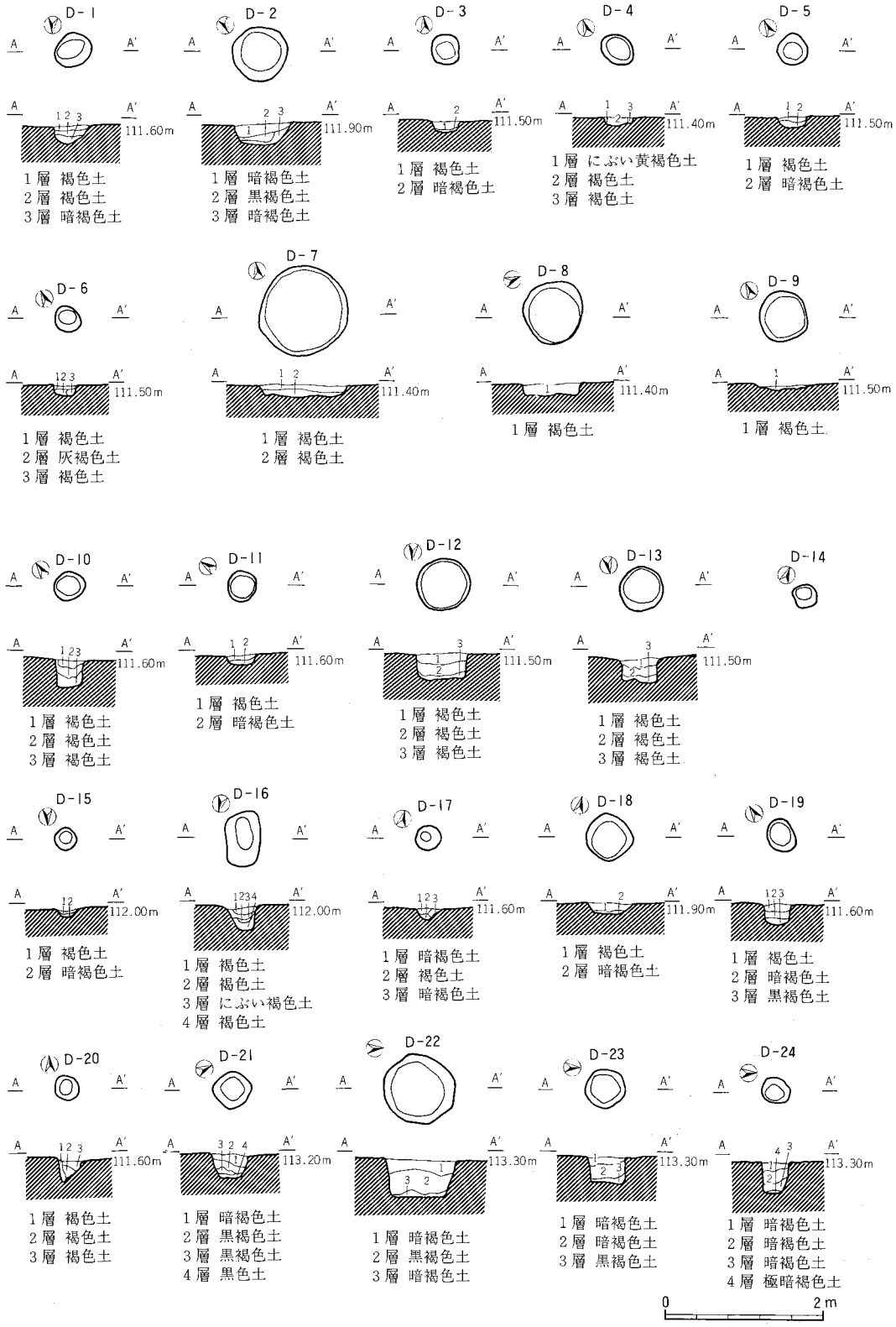

D-1
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
D-2
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 暗褐色土
D-3
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-4
1層 にぶい黄褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
D-5
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-6
1層 褐色土
2層 灰褐色土
3層 褐色土
D-7
1層 褐色土
2層 褐色土
D-8
1層 褐色土
D-9
1層 褐色土
D-10
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
D-11
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-12
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
D-13
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
D-14
D-15
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-16
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 にぶい褐色土
4層 褐色土
D-17
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
D-18
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-19
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土
D-20
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
D-21
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
4層 黒色土
D-22
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 暗褐色土
D-23
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土
D-24
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 極暗褐色土
0
2m

fig. 9　遺構

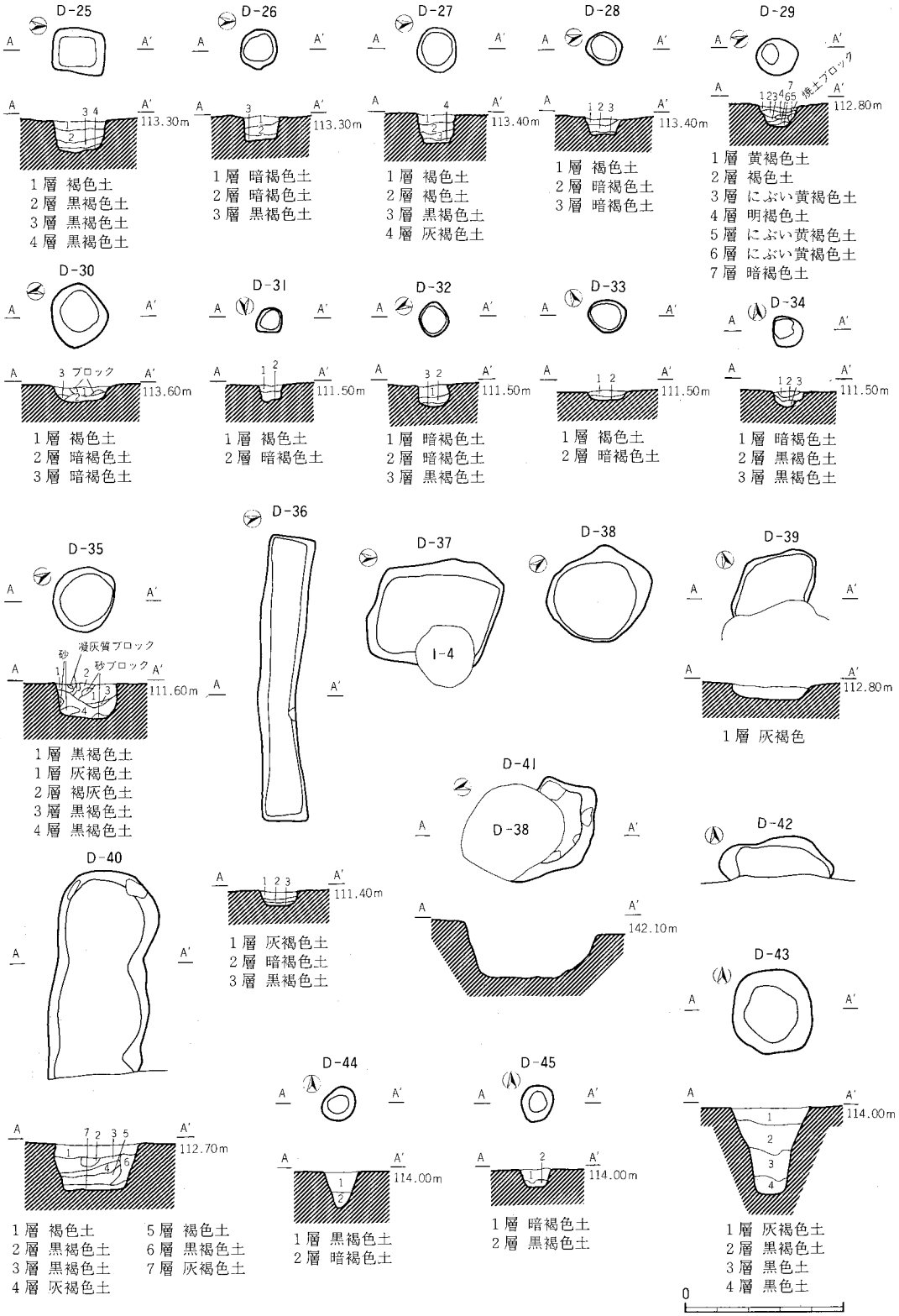

D-25
113.30m
1層 褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
4層 黒褐色土
D-26
113.30m
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土
D-27
113.40m
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 黒褐色土
4層 灰褐色土
D-28
113.40m
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
D-29
112.80m
焼土ブロック
1層 黄褐色土
2層 褐色土
3層 にぶい黄褐色土
4層 明褐色土
5層 にぶい黄褐色土
6層 にぶい黄褐色土
7層 暗褐色土
D-30
113.60m
ブロック
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
D-31
111.50m
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-32
111.50m
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土
D-33
111.50m
1層 褐色土
2層 暗褐色土
D-34
111.50m
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
D-35
111.60m
砂
凝灰質ブロック
砂ブロック
1層 黒褐色土
1層 灰褐色土
2層 褐灰色土
3層 黒褐色土
4層 黒褐色土
D-36
D-37
I-4
D-38
D-39
112.80m
1層 灰褐色
D-40
112.70m
1層 褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
4層 灰褐色土
5層 褐色土
6層 黒褐色土
7層 灰褐色土
D-41
D-38
111.40m
1層 灰褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土
142.10m
D-42
D-43
114.00m
1層 灰褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒色土
4層 黒色土
D-44
114.00m
1層 黒褐色土
2層 暗褐色土
D-45
114.00m
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
0

fig.10　遺構

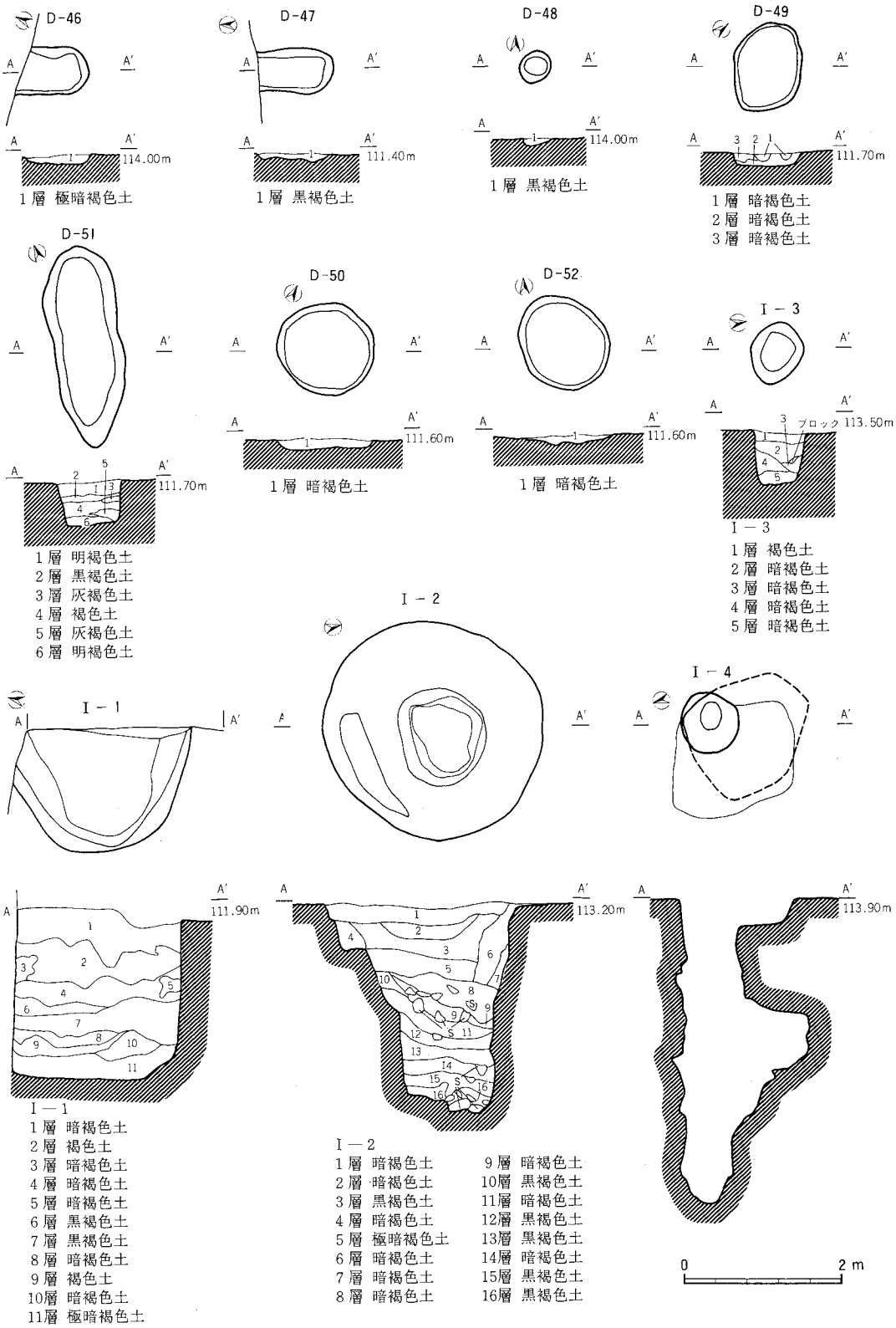

D-46
A
A′
114.00m
1層 極暗褐色土
D-47
111.40m
1層 黒褐色土
D-48
114.00m
1層 黒褐色土
D-49
111.70m
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
D-51
111.70m
1層 明褐色土
2層 黒褐色土
3層 灰褐色土
4層 褐色土
5層 灰褐色土
6層 明褐色土
D-50
111.60m
1層 暗褐色土
D-52
111.60m
1層 暗褐色土
I－3
ブロック
113.50m
I－3
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 暗褐色土
I－2
I－1
I－4
111.90m
I－1
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 暗褐色土
6層 黒褐色土
7層 黒褐色土
8層 暗褐色土
9層 褐色土
10層 暗褐色土
11層 極暗褐色土
113.20m
I－2
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 黒褐色土
4層 暗褐色土
5層 極暗褐色土
6層 暗褐色土
7層 暗褐色土
8層 暗褐色土
9層 暗褐色土
10層 黒褐色土
11層 暗褐色土
12層 黒褐色土
13層 黒褐色土
14層 暗褐色土
15層 黒褐色土
16層 黒褐色土
113.90m
0
2 m

fig.11　遺物（土器類）

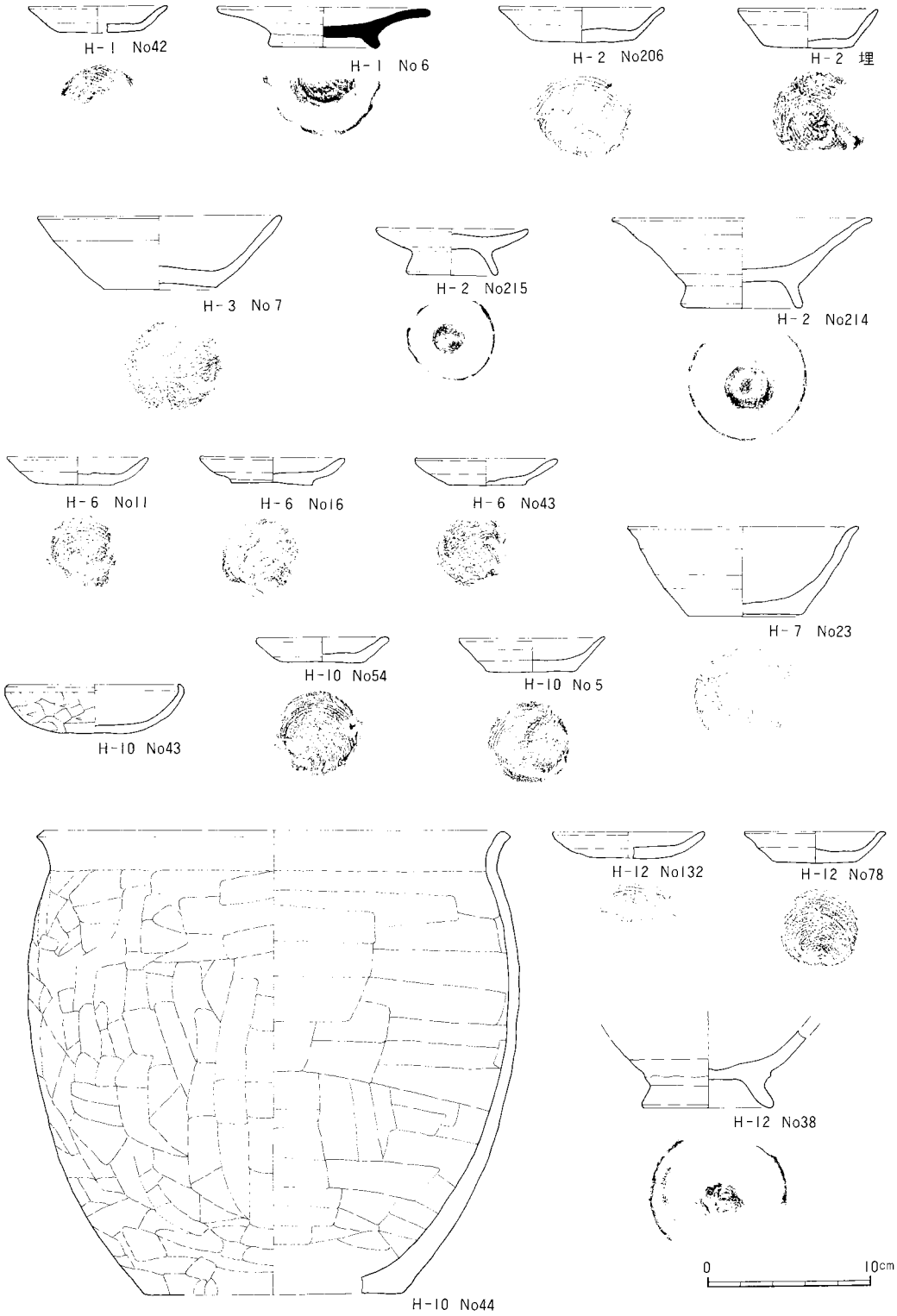

H-1 No42
H-1 No6
H-2 No206
H-2 埋
H-3 No7
H-2 No215
H-2 No214
H-6 No11
H-6 No16
H-6 No43
H-7 No23
H-10 No54
H-10 No5
H-10 No43
H-12 No132
H-12 No78
H-12 No38
H-10 No44
0
10cm

fig.12　遺物（土器類）

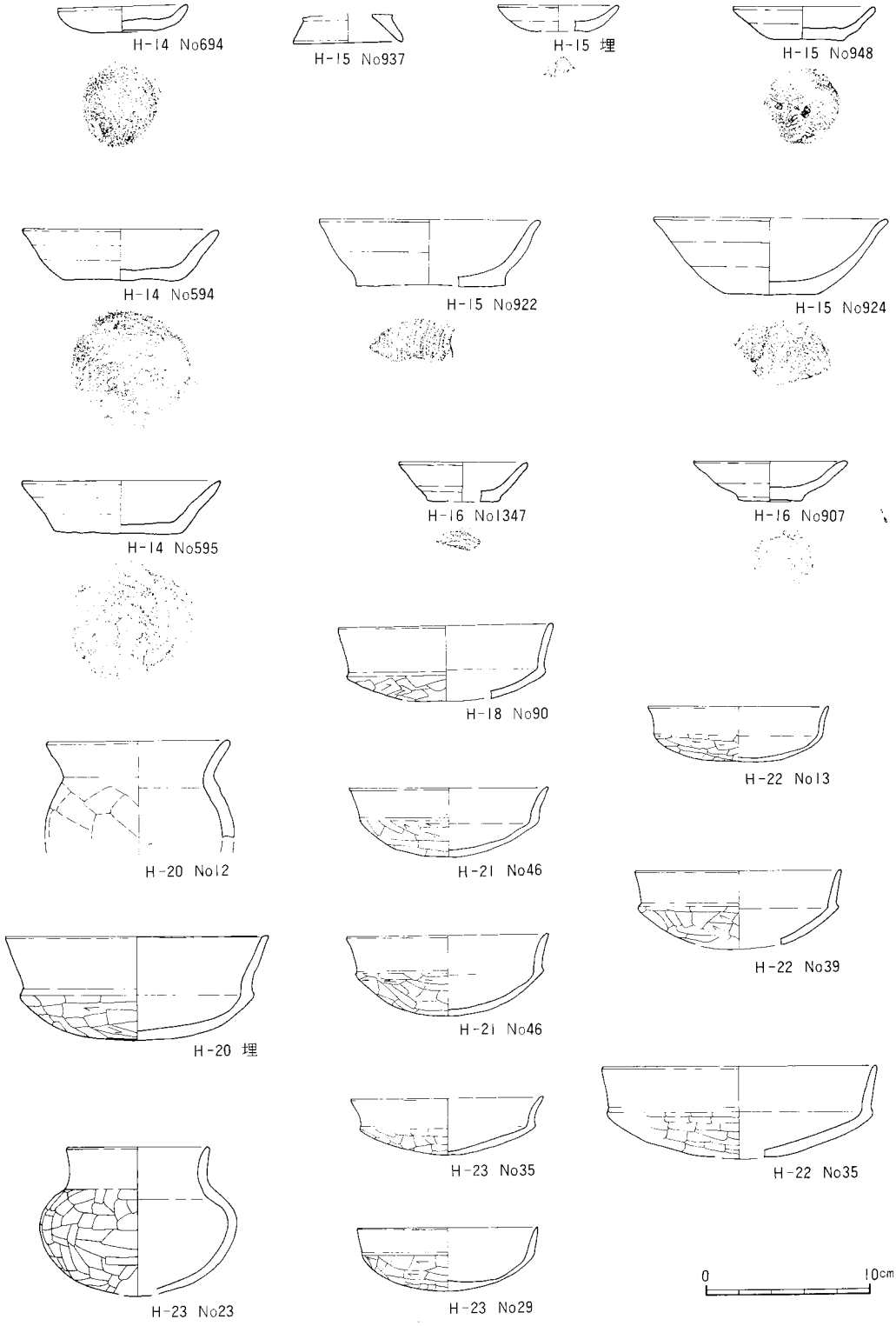

H-14 No694
H-15 No937
H-15 埋
H-15 No948
H-14 No594
H-15 No922
H-15 No924
H-14 No595
H-16 No1347
H-16 No907
H-18 No90
H-22 No13
H-20 No12
H-21 No46
H-22 No39
H-20 埋
H-21 No46
H-23 No35
H-22 No35
H-23 No23
H-23 No29
0
10cm

fig.13　遺物（土器類）

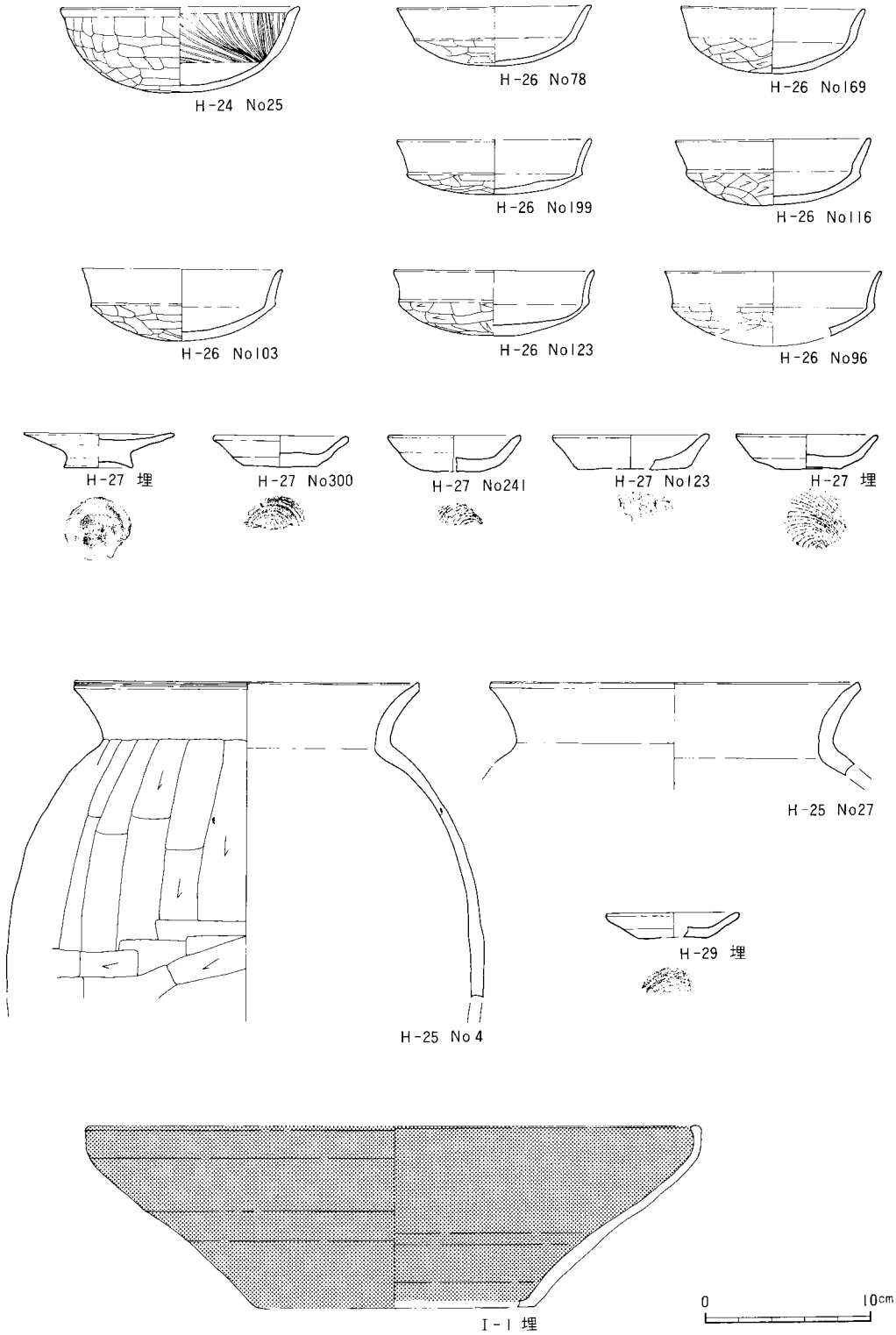

H-24 No25
H-26 No78
H-26 No169
H-26 No199
H-26 No116
H-26 No103
H-26 No123
H-26 No96
H-27 埋
H-27 No300
H-27 No241
H-27 No123
H-27 埋
H-25 No27
H-29 埋
H-25 No4
I-1 埋
0
10cm

fig.14　遺物（土器類）

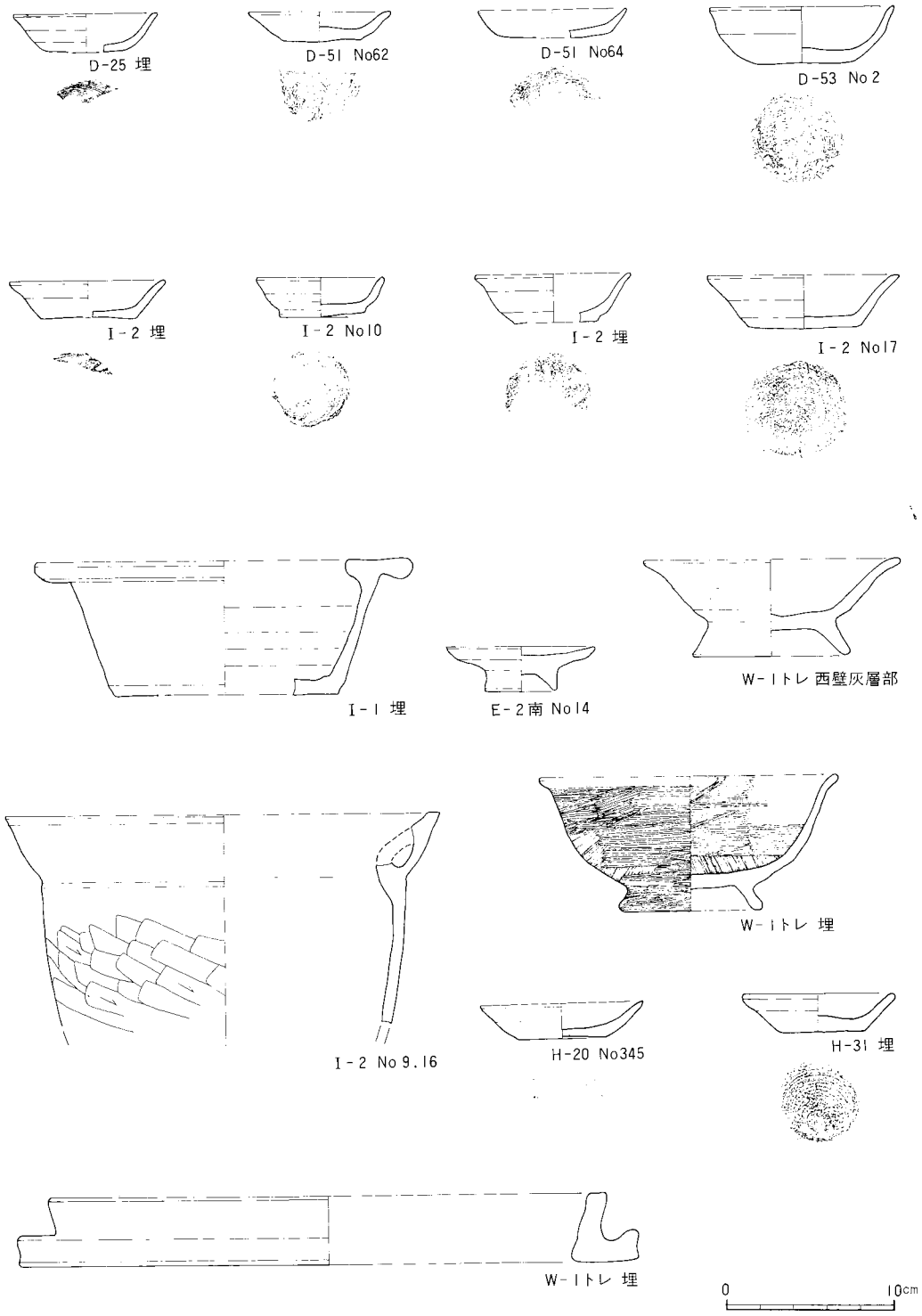
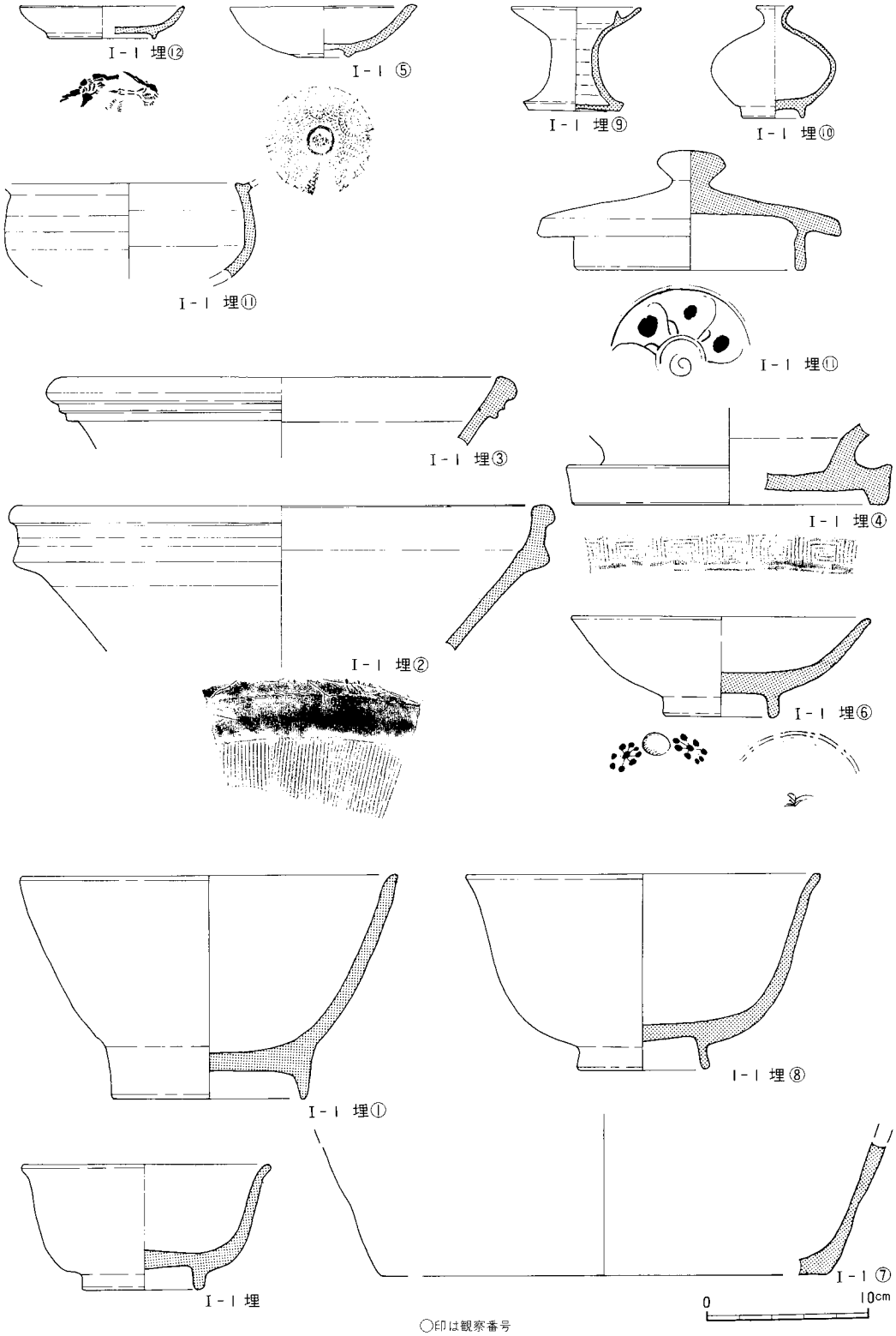

D-25 埋
D-51 No62
D-51 No64
D-53 No 2
I-2 埋
I-2 No10
I-2 埋
I-2 No17
I-1 埋
E-2南 No14
W-1トレ 西壁灰層部
W-1トレ 埋
I-2 No 9.16
H-20 No345
H-31 埋
W-1トレ 埋
0
10cm

fig.15　遺物（土器類）



○印は観察番号

fig.16　遺物（石製品・古銭類）

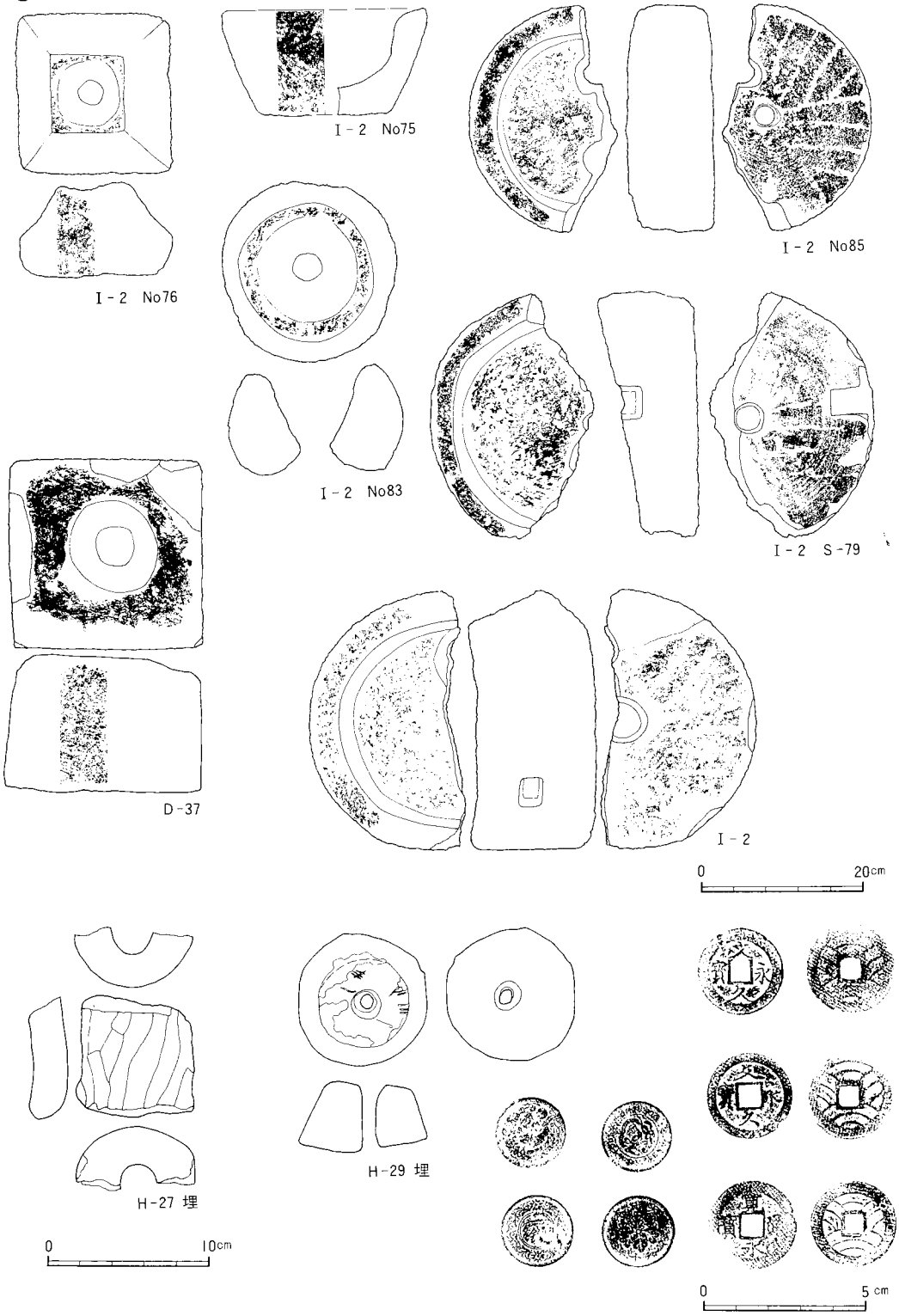


fig.17　遺物（瓦類）

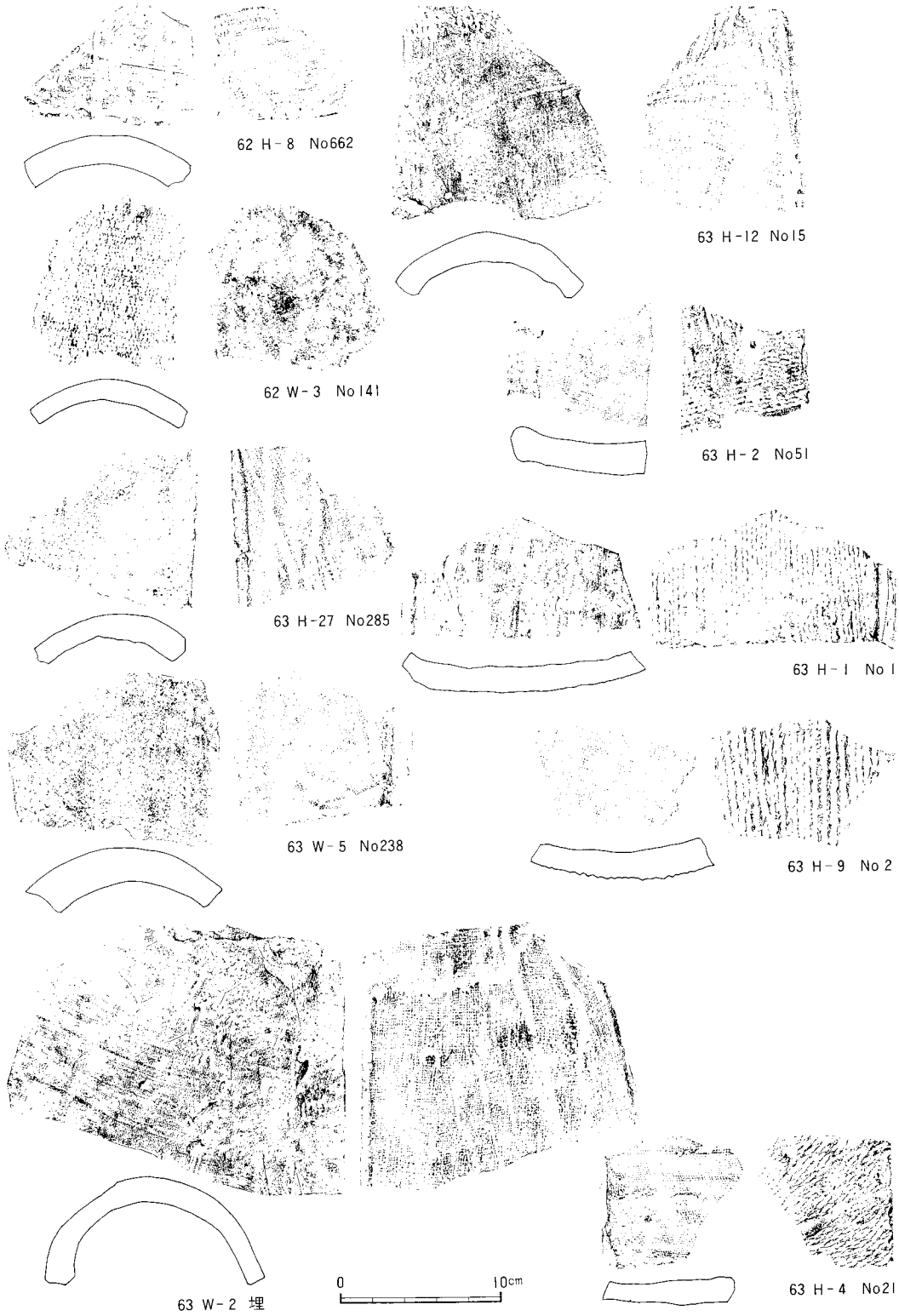

62 H-8 No662
63 H-12 No15
62 W-3 No141
63 H-2 No51
63 H-27 No285
63 H-1 No1
63 W-5 No238
63 H-9 No2
63 W-2 埋
0
10cm
63 H-4 No21

fig.18　遺物（瓦類）

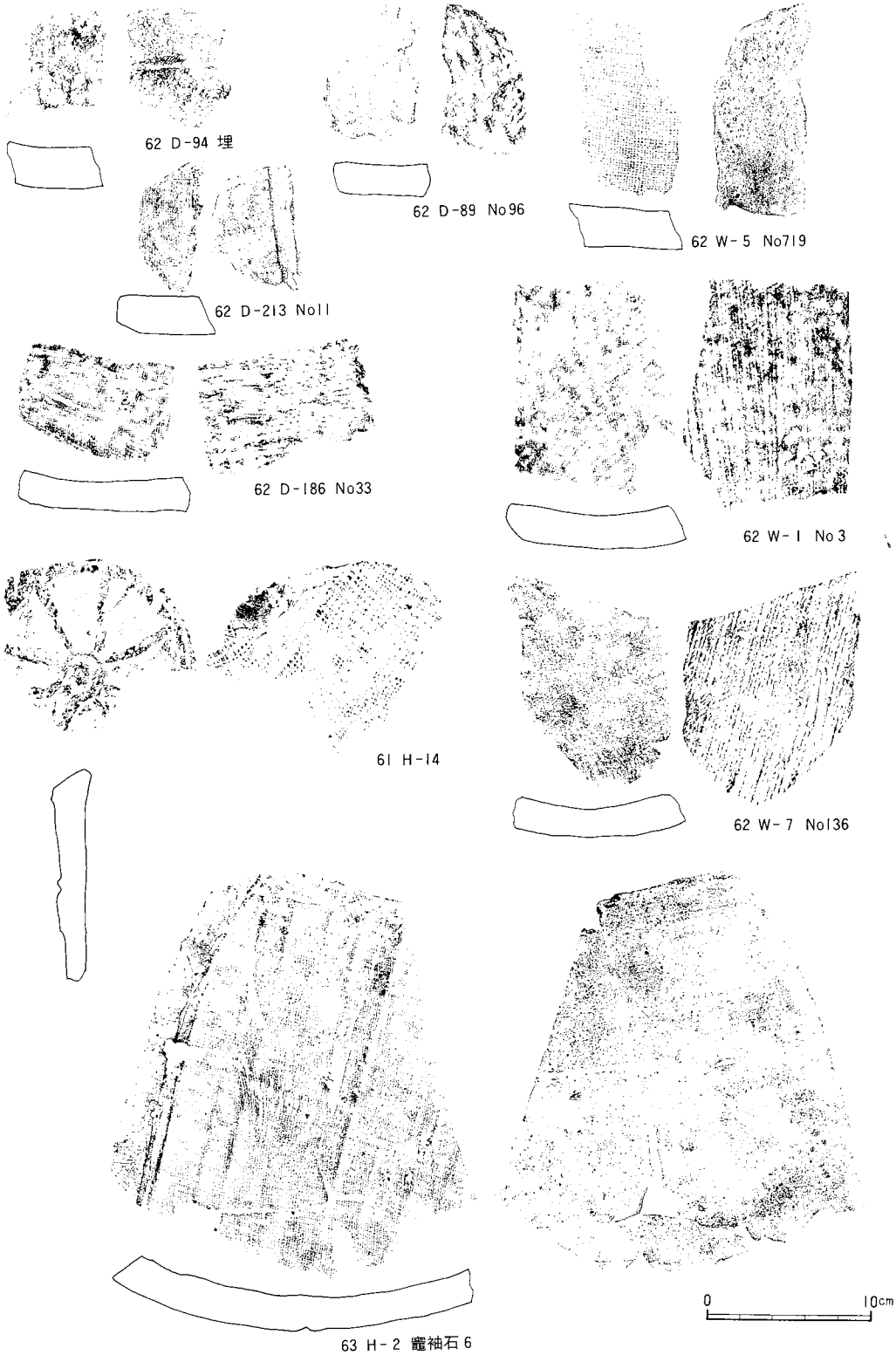

62 D-94 埋
62 D-89 No96
62 W-5 No719
62 D-213 No11
62 D-186 No33
62 W-1 No3
61 H-14
62 W-7 No136
63 H-2 竈袖石 6
0
10cm

fig.19　元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅶ住居址一覧図（古墳時代～平安時代）

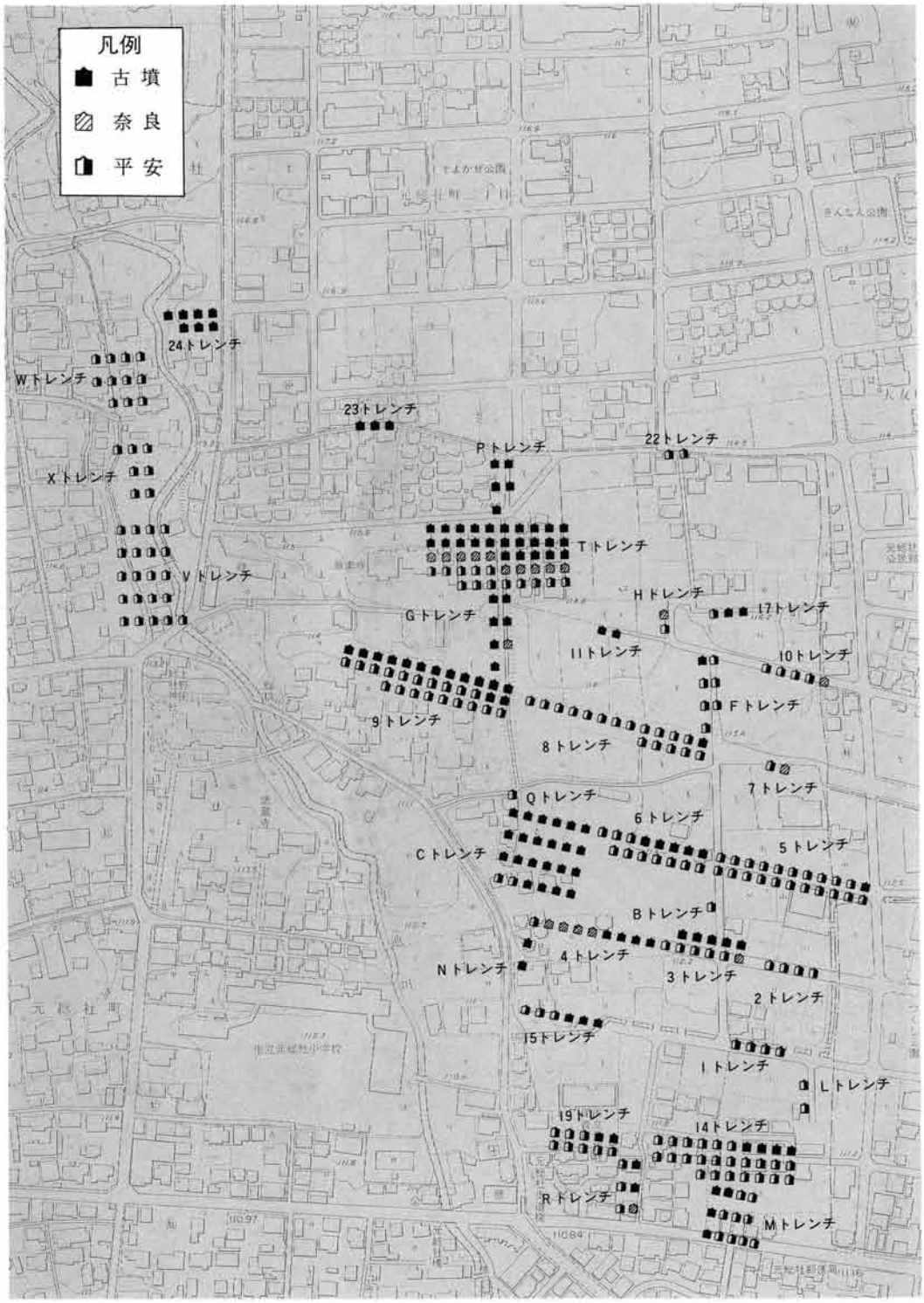


fig.20　元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅶ住居址一覧図（古墳時代）

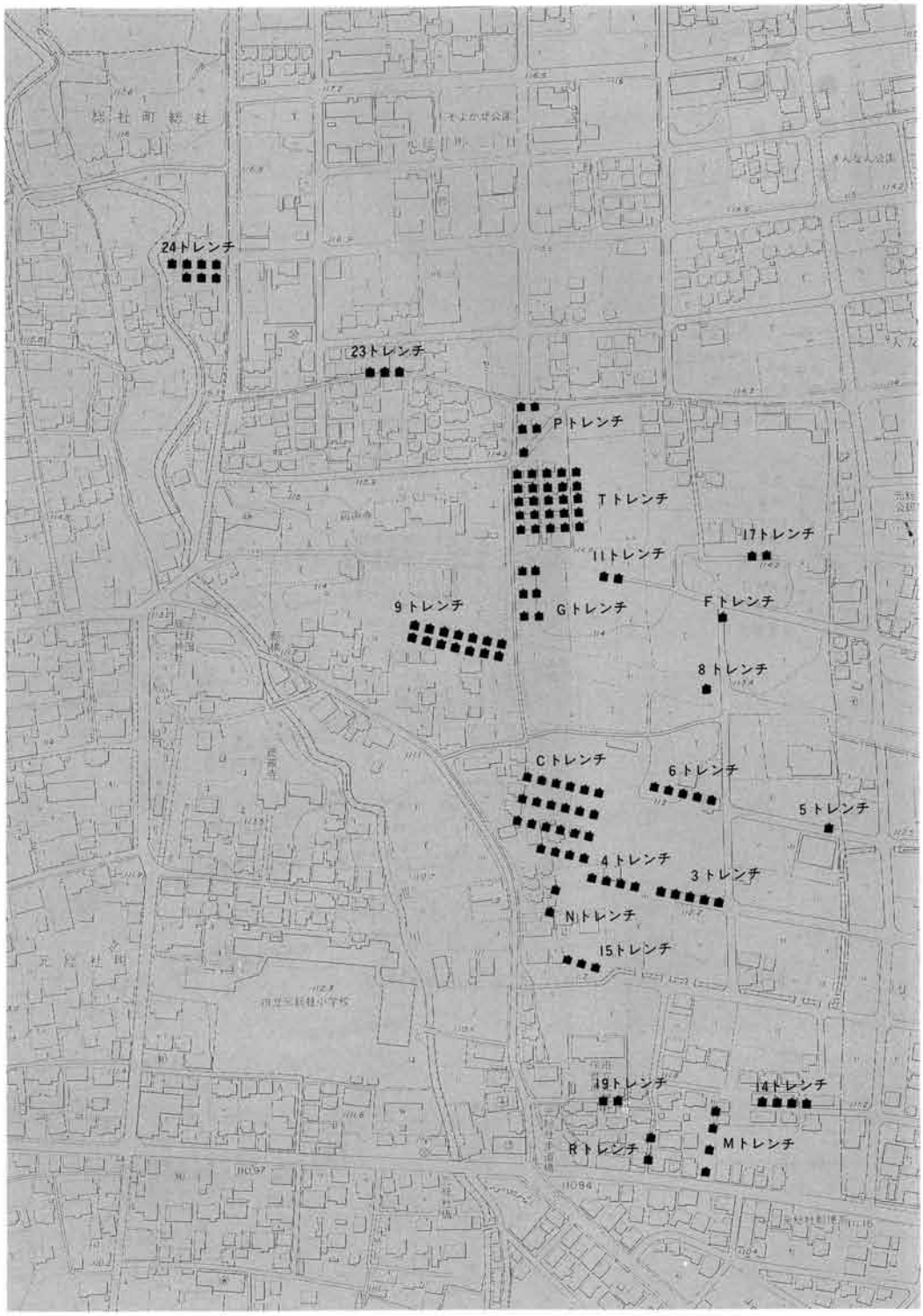


fig.21　元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅶ住居址一覧図（奈良時代）

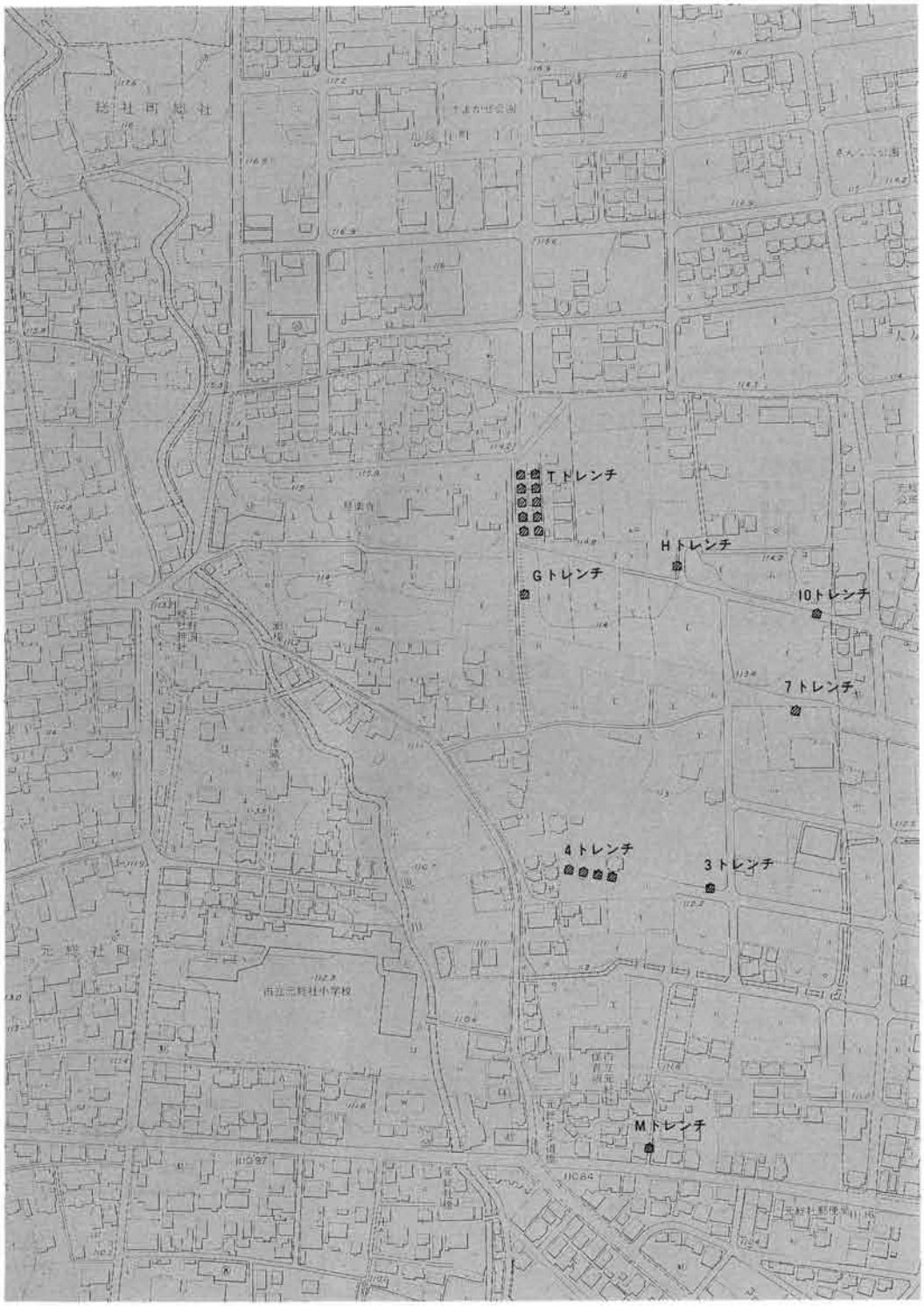


fig.22　元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅶ住居址一覧図（平安時代）

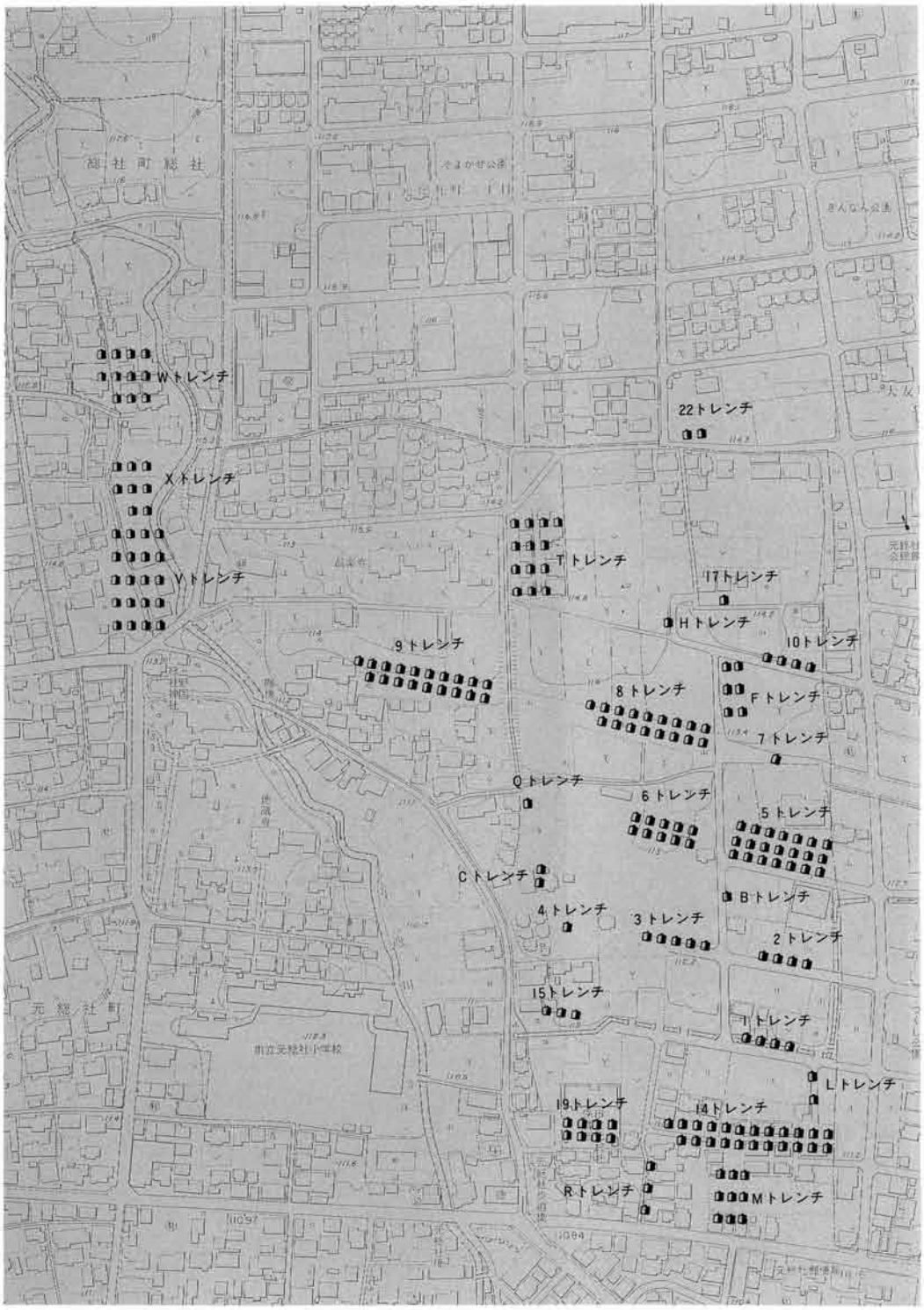


fig.23

元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅶ住居址一覧表

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅰ	1	1H－1	平安	E	
Ⅰ	1	1H－2	平安	SE	10m²
Ⅰ	1	1H－3	平安	NE	9 m²
Ⅰ	1	1H－4	平安	E	
Ⅰ	2	2H－1	平安	E	
Ⅰ	2	2H－2	平安	E	
Ⅰ	2	2H－3	平安	E	
Ⅰ	2	2H－4	平安	E	
Ⅰ	3	3H－1	平安	E	
ⅢⅣ	3	H－48	平安		
ⅢⅣ	3	H－49	平安	E	
ⅢⅣ	3	H－50	平安	E	
ⅢⅣ	3	H－53	奈良	E	
ⅢⅣ	3	H－56	古墳	E	
ⅢⅣ	3	H－57	平安		
ⅢⅣ	3	H－58	平安	NE	
ⅢⅣ	3	H－61	古墳		
ⅢⅣ	3	H－64	古墳	E	
ⅢⅣ	3	H－65	古墳		
ⅢⅣ	4	H－43	平安	E	
ⅢⅣ	4	H－44	奈良	SW	
ⅢⅣ	4	H－45	奈良	E	
ⅢⅣ	4	H－46	古墳	E	
ⅢⅣ	4	H－47	古墳		
ⅢⅣ	4	H－51	奈良		
ⅢⅣ	4	H－54	古墳	E	
ⅢⅣ	4	H－62	古墳	E	
ⅢⅣ	4	H－63	奈良	SE	
Ⅱ	5	H－1	平安		
Ⅱ	5	H－2	平安		
Ⅱ	5	H－3	平安	E	
Ⅱ	5	H－4	平安	E	6 m²
Ⅱ	5	H－5	平安	SE	4 m²
Ⅱ	5	H－6	平安	SE	8 m²
Ⅱ	5	H－7	平安		
Ⅱ	5	H－8	平安	E	
Ⅱ	5	H－9	平安	E	
Ⅱ	5	H－10	平安	E	9 m²
Ⅱ	5	H－11	平安	E	
Ⅱ	5	H－12	平安	E	9 m²
Ⅱ	5	H－13	古墳	E	
Ⅱ	5	H－14	平安	E	

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅱ	5	H－16	平安	E	
Ⅱ	5	H－17	平安		
Ⅱ	5	H－18	平安	E	
Ⅱ	5	H－20	平安	NE	
Ⅱ	5	H－21	平安		
Ⅱ	5	H－22	平安		
Ⅱ	5	H－23	平安		
Ⅵ	6	H－15	平安		
Ⅵ	6	H－16	平安		
Ⅵ	6	H－17	平安		
Ⅵ	6	H－18	平安		
Ⅵ	6	H－19	平安		
Ⅵ	6	H－20	平安	N	
Ⅵ	6	H－21	平安		
Ⅵ	6	H－22	古墳		
Ⅵ	6	H－23	古墳		
Ⅵ	6	H－24	平安	E	
Ⅵ	6	H－25	古墳		
Ⅵ	6	H－26	平安	E	
Ⅵ	6	H－27	古墳		
Ⅵ	6	H－35	平安		
Ⅵ	6	H－44	古墳		
Ⅰ	7	7H－1	奈良	NE	
Ⅰ	7	7H－2	平安	NE	6 m²
Ⅰ	8	8H－1	平安	E	8 m²
Ⅰ	8	8H－2	平安	NE	8 m²
Ⅰ	8	8H－3	平安	E	9 m²
Ⅰ	8	8H－4	平安	E	9 m²
Ⅰ	8	8H－5	平安	SE	
Ⅰ	8	8H－6	平安	E	7 m²
Ⅰ	8	8H－7	平安	NE	
Ⅰ	8	8H－8	古墳	E	
Ⅰ	8	8H－9	平安	S	
Ⅰ	8	8H－10	平安	E	
Ⅰ	8	8H－11	平安	W	
Ⅰ	8	8H－12	平安	W	9 m²
Ⅰ	8	8H－13	平安	E	7 m²
Ⅰ	8	8H－14	平安	E	
Ⅰ	8	8H－15	平安	E	
Ⅰ	8	8H－16	平安	E	33m²
Ⅰ	8	8H－17	平安	NE	
Ⅰ	8	8H－18	平安	E	14m²

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅶ	23	H－17	古墳		
Ⅶ	23	H－18	古墳		
Ⅶ	23	H－20	古墳		
Ⅶ	24	H－21	古墳	E	14m²
Ⅶ	24	H－22	古墳	E	9 m²
Ⅶ	24	H－23	古墳		
Ⅶ	24	H－24	古墳		
Ⅶ	24	H－25	古墳		
Ⅶ	24	H－26	古墳	NE	59m²
Ⅶ	24	H－28	古墳	N	
Ⅰ	B	BH－1	平安		
Ⅰ	C	CH－1	古墳	E	
Ⅰ	C	CH－2	古墳		
Ⅰ	C	CH－3	古墳		
Ⅰ	C	CH－4	古墳		
ⅢⅣ	C	H－52	平安	E	
ⅢⅣ	C	H－55	古墳		
ⅢⅣ	C	H－60	古墳		
Ⅴ	C	H－37	古墳		
Ⅴ	C	H－38	古墳		9 m²
Ⅴ	C	H－39	古墳		
Ⅴ	C	H－40	平安	NE	
Ⅴ	C	H－41	平安	E	
Ⅴ	C	H－42	平安		
Ⅴ	C	H－43	平安		
Ⅴ	C	H－44	古墳		
Ⅴ	C	H－45	古墳		
Ⅴ	C	H－46	平安	SE	
Ⅴ	C	H－47	古墳		
Ⅴ	C	H－49	平安		
Ⅴ	C	H－50	平安	E	
Ⅴ	C	H－51	古墳		
Ⅴ	C	H－52	古墳		
Ⅴ	C	H－53	古墳		
Ⅴ	C	H－54	古墳		20m²
Ⅱ	F	H－1	平安	E	
Ⅱ	F	H－2	平安	E	
Ⅱ	F	H－4	平安		
Ⅱ	F	H－5	平安		
Ⅱ	F	H－6	平安		
Ⅱ	F	H－7	古墳		
Ⅱ	F	H－8	平安	E	

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅰ	G	GH－1	古墳		
Ⅰ	G	GH－2	古墳	SE	25m²
Ⅰ	G	GH－3	奈良	E	9 m²
Ⅰ	G	GH－4	古墳		20m²
Ⅰ	G	GH－5	古墳		
Ⅰ	G	GH－6	古墳		
Ⅰ	G	GH－7	古墳	E	
Ⅱ	H	H－1	奈良		
Ⅱ	H	H－2	平安		
ⅢⅣ	L	H－15	平安		
ⅢⅣ	L	H－18	平安	W	
ⅢⅣ	M	H－23	古墳		
ⅢⅣ	M	H－24	古墳		
ⅢⅣ	M	H－25	古墳		
ⅢⅣ	M	H－28	平安		
ⅢⅣ	M	H－29	平安		
ⅢⅣ	M	H－30	平安		
ⅢⅣ	M	H－31	平安		
ⅢⅣ	M	H－33	平安		
ⅢⅣ	M	H－34	平安		
ⅢⅣ	M	H－35	平安		
ⅢⅣ	M	H－36	古墳		
ⅢⅣ	M	H－38	平安		
ⅢⅣ	M	H－40	平安		
Ⅴ	N	H－1	平安		
Ⅴ	N	H－2	古墳		
Ⅴ	P	H－30	古墳	N	
Ⅴ	P	H－31	古墳	E	
Ⅴ	P	H－32	古墳		
Ⅴ	P	H－33	古墳	SW	
Ⅴ	P	H－34	古墳		
Ⅴ	Q	H－48	古墳	E	49m²
Ⅵ	R	H－42	平安	SE	
Ⅵ	R	H－45	平安		
Ⅵ	R	H－52	奈良		
Ⅵ	R	H－53	古墳		
Ⅵ	R	H－54	古墳		
Ⅵ	R	H－64	古墳		
Ⅵ	T	H－47	平安	N	
Ⅵ	T	H－48	古墳		
Ⅵ	T	H－49	古墳	S	
Ⅵ	T	H－50	平安	E	

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅱ	9	H－1	平安	E	
Ⅱ	9	H－3	古墳		34m²
Ⅱ	9	H－5	古墳		
Ⅱ	9	H－8	平安	E	
Ⅴ	9	H－3	平安	E	
Ⅴ	9	H－4	古墳		
Ⅴ	9	H－5	古墳		
Ⅴ	9	H－6	平安		
Ⅴ	9	H－7	生安		
Ⅴ	9	H－8	平安		
Ⅴ	9	H－10	平安		
Ⅴ	9	H－11	平安		8 m²
Ⅴ	9	H－12	平安		4 m²
Ⅴ	9	H－13	平安		
Ⅴ	9	H－14	平安	E	
Ⅴ	9	H－15	平安	SE	
Ⅴ	9	H－16	平安	E	
Ⅴ	9	H－17	古墳		
Ⅴ	9	H－18	平安	E	
Ⅴ	9	H－20	古墳		15m²
Ⅴ	9	H－21	平安	E	10m²
Ⅴ	9	H－22	古墳		
Ⅴ	9	H－23	古墳		15m²
Ⅴ	9	H－24	古墳		
Ⅴ	9	H－25	平安		
Ⅴ	9	H－26	平安		
Ⅴ	9	H－27	平安		
Ⅴ	9	H－28	平安	E	25m²
Ⅴ	9	H－29	古墳		
Ⅴ	9	H－35	平安		
Ⅴ	9	H－36	古墳		
Ⅱ	10	H－1	平安	E	
Ⅱ	10	H－2	平安		
Ⅱ	10	H－3	平安	E	6 m²
Ⅱ	10	H－4	奈良	E	
Ⅱ	10	H－5	平安		
Ⅱ	11	H－3	古墳	E	
Ⅱ	11	H－4	古墳		
ⅢⅣ	14	H－1	平安		
ⅢⅣ	14	H－2	平安		
ⅢⅣ	14	H－3	平安		
ⅢⅣ	14	H－4	平安	E	

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
ⅢⅣ	14	H－5	平安		
ⅢⅣ	14	H－6	平安	E	
ⅢⅣ	14	H－7	平安		
ⅢⅣ	14	H－8	平安	E	
ⅢⅣ	14	H－9	平安		
ⅢⅣ	14	H－10	古墳		
ⅢⅣ	14	H－11	平安		
ⅢⅣ	14	H－12	平安		
ⅢⅣ	14	H－13	平安		
ⅢⅣ	14	H－14	古墳		
ⅢⅣ	14	H－17	平安		
ⅢⅣ	14	H－19	平安		
ⅢⅣ	14	H－20	平安		
ⅢⅣ	14	H－21	古墳		
ⅢⅣ	14	H－22	平安	N	
ⅢⅣ	14	H－26	平安		
ⅢⅣ	14	H－27	平安		
ⅢⅣ	14	H－32	平安		
ⅢⅣ	14	H－37	平安		
ⅢⅣ	14	H－39	平安		
ⅢⅣ	14	H－41	平安		
ⅢⅣ	14	H－42	平安		
ⅢⅣ	15	H－66	平安	E	
ⅢⅣ	15	H－67	平安	E	
ⅢⅣ	15	H－68	古墳		
ⅢⅣ	15	H－70	平安		
ⅢⅣ	15	H－71	古墳		
ⅢⅣ	17	H－72	古墳		
ⅢⅣ	17	H－73	古墳		
ⅢⅣ	17	H－74	平安		
Ⅵ	19	H－36	平安	SE	
Ⅵ	19	H－37	平安	SE	
Ⅵ	19	H－38	平安	N	
Ⅵ	19	H－39	平安		
Ⅵ	19	H－40	平安		
Ⅵ	19	H－41	平安		
Ⅵ	19	H－43	平安		
Ⅵ	19	H－46	平安		
Ⅵ	19	H－55	古墳		
Ⅵ	19	H－65	古墳		
Ⅶ	22	H－5	平安		

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅵ	T	H－51	平安		
Ⅵ	T	H－56	古墳		
Ⅵ	T	H－57	平安		
Ⅵ	T	H－58	奈良		
Ⅵ	T	H－59	奈良	N	
Ⅵ	T	H－60	平安		
Ⅵ	T	H－61	古墳		
Ⅵ	T	H－62	古墳		
Ⅵ	T	H－66	古墳		
Ⅵ	T	H－67	古墳	E	
Ⅵ	T	H－68	古墳		
Ⅵ	T	H－69	古墳		
Ⅵ	T	H－71	古墳		
Ⅵ	T	H－72	平安		
Ⅵ	T	H－73	古墳		
Ⅵ	T	H－74	古墳		
Ⅵ	T	H－75	平安		
Ⅵ	T	H－76	平安	W	
Ⅵ	T	H－77	古墳		
Ⅵ	T	H－78	古墳		
Ⅵ	T	H－79	古墳		
Ⅵ	T	H－80	古墳		
Ⅵ	T	H－81	奈良		
Ⅵ	T	H－82	奈良	N	
Ⅵ	T	H－83	平安		
Ⅵ	T	H－84	古墳	E	9 m²
Ⅵ	T	H－85	古墳		
Ⅵ	T	H－86	奈良		
Ⅵ	T	H－87	奈良	NE	
Ⅵ	T	H－88	古墳		
Ⅵ	T	H－89	古墳		
Ⅵ	T	H－90	古墳	E	12m²
Ⅵ	T	H－91	古墳		
Ⅵ	T	H－92	平安		
Ⅵ	T	H－93	奈良		
Ⅵ	T	H－94	古墳	NE	
Ⅵ	T	H－95	古墳		
Ⅵ	T	H－96	古墳	N	
Ⅵ	T	H－97	古墳		
Ⅵ	T	H－98	平安		
Ⅵ	T	H－99	奈良	NW	
Ⅵ	T	H－70	古墳		

No.	トレンチ	住居名	時代	住居方位	面積
Ⅵ	T	H－100	奈良		
Ⅵ	T	H－101	古墳		
Ⅵ	V	H－1	平安	NE	
Ⅵ	V	H－2	平安	E	
Ⅵ	V	H－3	平安	E	6 m²
Ⅵ	V	H－4	平安	S	16m²
Ⅵ	V	H－5	平安		
Ⅵ	V	H－6	平安		
Ⅵ	V	H－7	平安	E	7 m²
Ⅵ	V	H－8	平安	SE	
Ⅵ	V	H－9	平安		11m²
Ⅵ	V	H－10	平安		
Ⅵ	V	H－11	平安		20m²
Ⅵ	V	H－12	平安		
Ⅵ	V	H－13	平安		16m²
Ⅵ	V	H－14	平安		
Ⅵ	V	H－28	平安	W	
Ⅵ	V	H－29	平安		
Ⅵ	V	H－30	平安	SW	
Ⅵ	V	H－31	平安	E	8 m²
Ⅵ	V	H－32	平安		
Ⅵ	V	H－33	平安		
Ⅵ	V	H－34	平安		
Ⅶ	W	H－1	平安	SE	
Ⅶ	W	H－2	平安	SE	15m²
Ⅶ	W	H－3	平安		9 m²
Ⅶ	W	H－4	平安		10m²
Ⅶ	W	H－6	平安		
Ⅶ	W	H－7	平安		7 m²
Ⅶ	W	H－8	平安		7 m²
Ⅶ	W	H－9	平安		
Ⅶ	W	H－10	平安	E	
Ⅶ	W	H－11	平安		
Ⅶ	W	H－12	平安		
Ⅶ	X	H－14	平安		10m²
Ⅶ	X	H－15	平安		
Ⅶ	X	H－16	平安		
Ⅶ	X	H－19	平安		
Ⅶ	X	H－27	平安		
Ⅶ	X	H－29	平安		
Ⅶ	X	H－30	平安		
Ⅶ	X	H－31	平安		

凡　　例	
No.	元総社明神遺跡報告書No.
トレンチ	トレンチ名称
住居名	H（土師式住居）
時代	古墳、奈良、平安の三時代区分
住居方位	8方位
面積	単位はm²
空欄	測定不能

時代別住居址

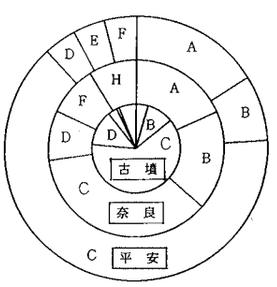
（単位：軒）

	住居軒数	%
A－古墳時代	112	33.3
B－奈良時代	19	5.7
C－平安時代	205	61.0
合　　計	336	

方向別住居址数

（単位：軒）

	古墳時代	%	奈良時代	%	平安時代	%
A－住居方向N	4	16.0	2	18.2	4	4.3
B－住居方向NE	2	8.0	2	18.2	9	9.7
C－住居方向E	16	64.0	4	36.4	58	62.4
E－住居方向S	1	4.0	0	0.0	3	3.2
F－住居方向SW	1	4.0	1	9.1	1	1.1
G－住居方向W	0	0.0	0	0.0	6	6.5
H－住居方向NW	0	0.0	1	9.1	0	0.0
合　　計	25		11		93	



ここに掲げた遺物は、今までの元総社明神遺跡報告書Ⅰ～Ⅴに提示されたものを、時代別に分類したものである。

元総社明神遺跡から出土した遺物は、古墳～近代のものまで多時期、多種類にわたる。各遺物は、当時の人々の生活の断片を私達の前に呈示してくれているが、断片であるがゆえに解明できない部分も多い。また、本遺跡は、古代から移住と廃棄、近年の開墾や宅地開発等、諸生産活動の繰り返しの結果として、辛うじて残存している遺構が多い。そのような実情の中で、出土した土器を検討し、分類するにあたっては、直接実年代を決定しうる土器を中心に、できるだけ出土地点の明らかなものを抽出するように心掛けた。しかし、分類は住居の所属時期判断を主体としているため、器形及び技法変化の方向性、器種内の系統関係を完全に把握した上での作業でないので、異系統のものも一緒に扱ってしまう可能性もあるが、報告書No.、住居址No.を記することにより、この供伴関係をみていく中で、検証されていくものと考えられる。

当然ながら、本報告書の中で完結するものではないが、土器分類を行い、相対的な変化を追うことにより、本遺跡の時代的変遷と周辺遺跡との関連を知る手掛りとしたい。

fig.24　時代別遺物（4世紀）

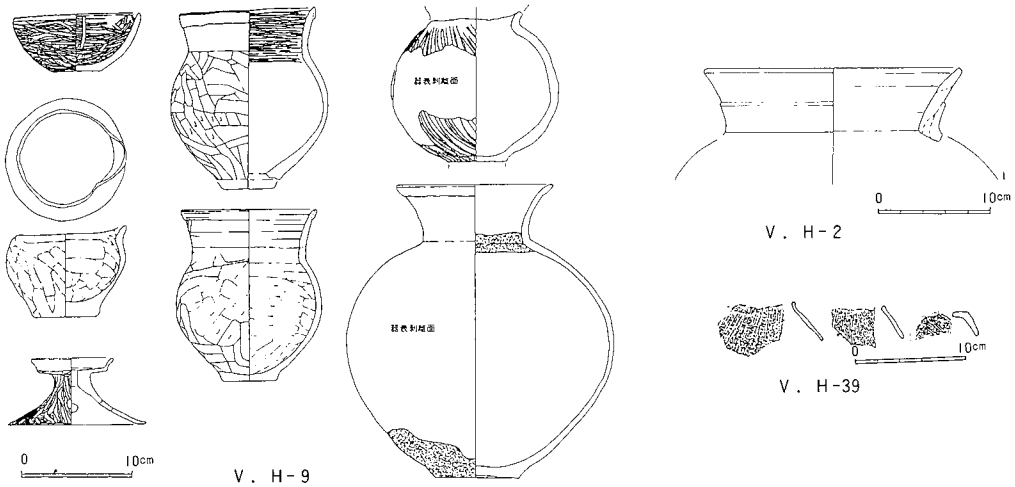
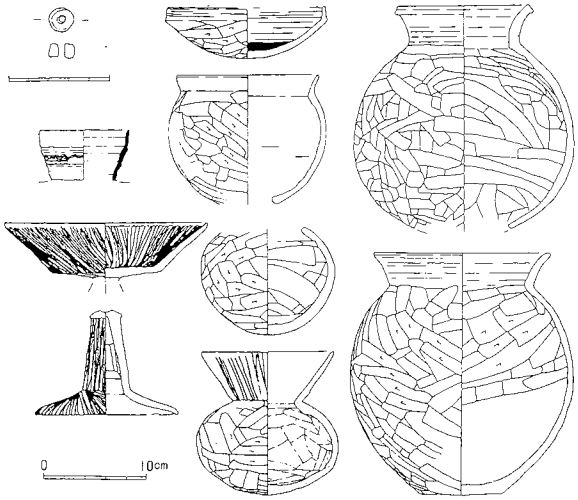
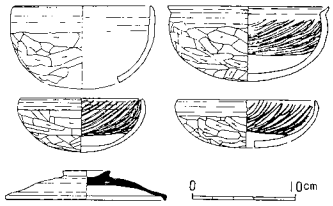


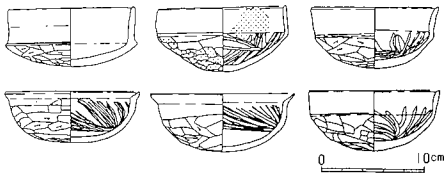
fig.25　時代別遺物（5世紀）



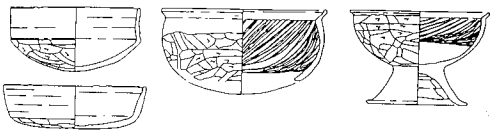
V．H-44



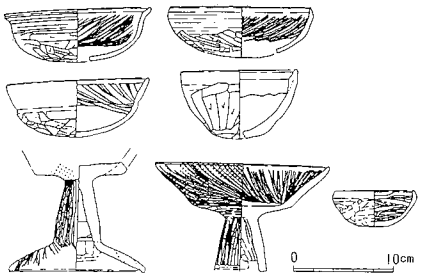
Ⅲ．Ⅳ．H-63



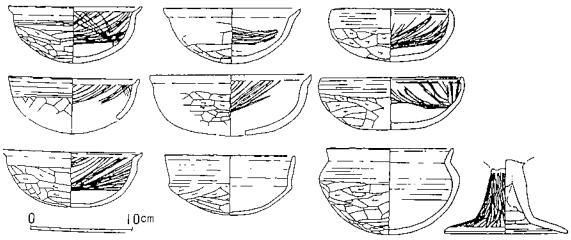
V．H-24



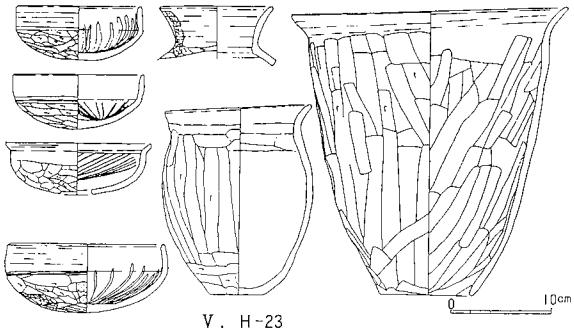
V．H-36



V．H-48

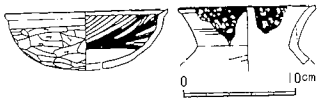


V．H-26



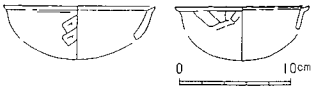
V．H-23

fig.26　時代別遺物（6世紀）

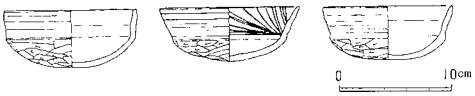


V．H-20

V．H-34

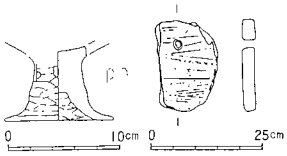


V．H-51

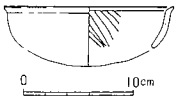


V．H-33

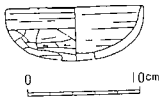
V．H-54



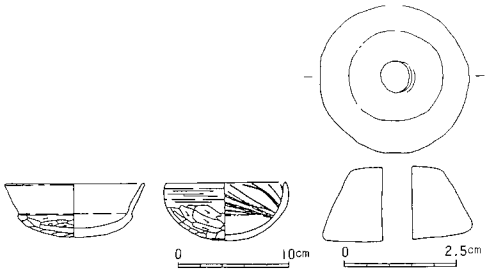
V．H-32



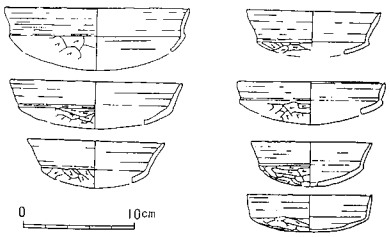
V．H-53



V．H-22

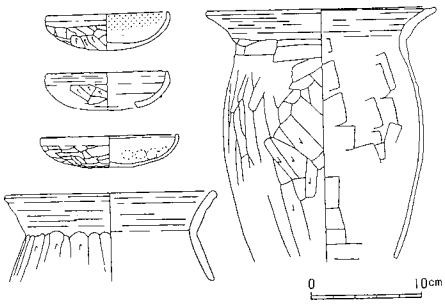


V．H-30

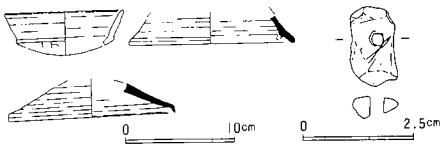


V．H-31

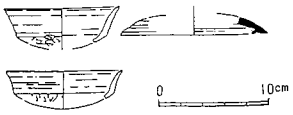
fig.27　時代別遺物（7～9世紀）



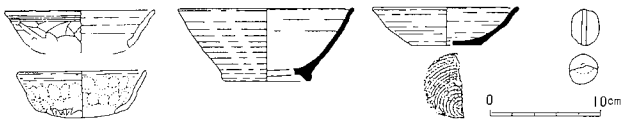
V．H-19



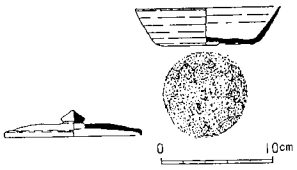
V．H-4



V．H-52

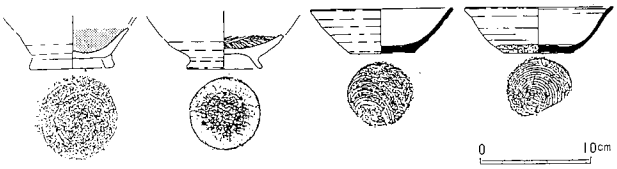


V．H-14

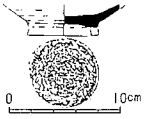


V．H-42

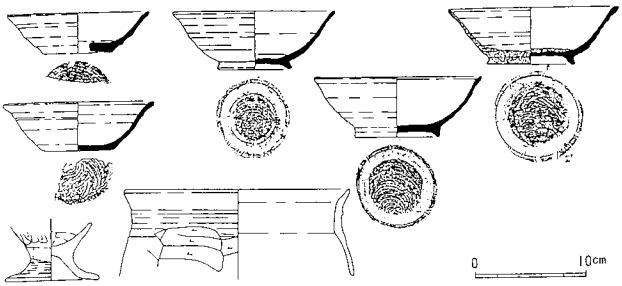
V．H-1



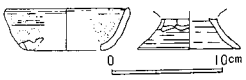
V．H-35



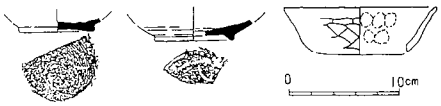
V．H-27



V．H-7

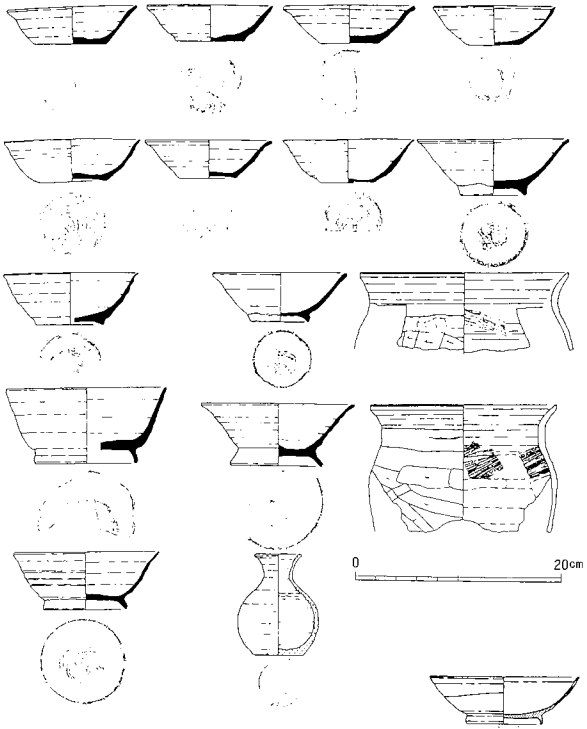


V．H-6

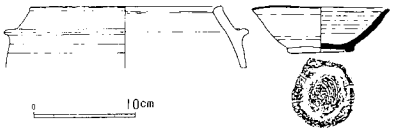


V．H-16

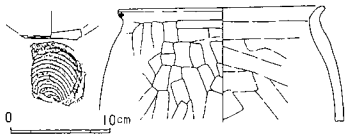
fig.28　時代別遺物（10世紀①）



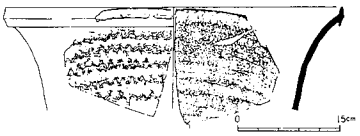
Ⅲ．Ⅳ．H-43

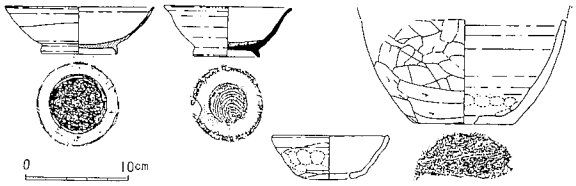


Ⅴ．H-41

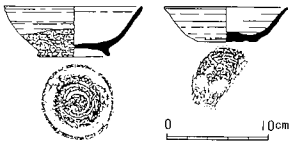


Ⅴ．H-46

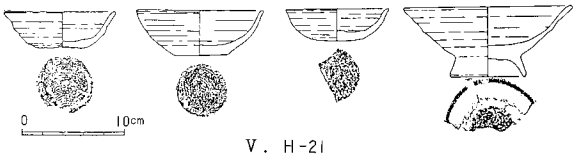




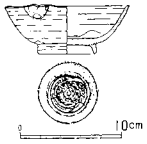
Ⅴ．H-50



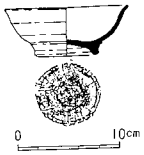
Ⅴ．H-49



Ⅴ．H-21

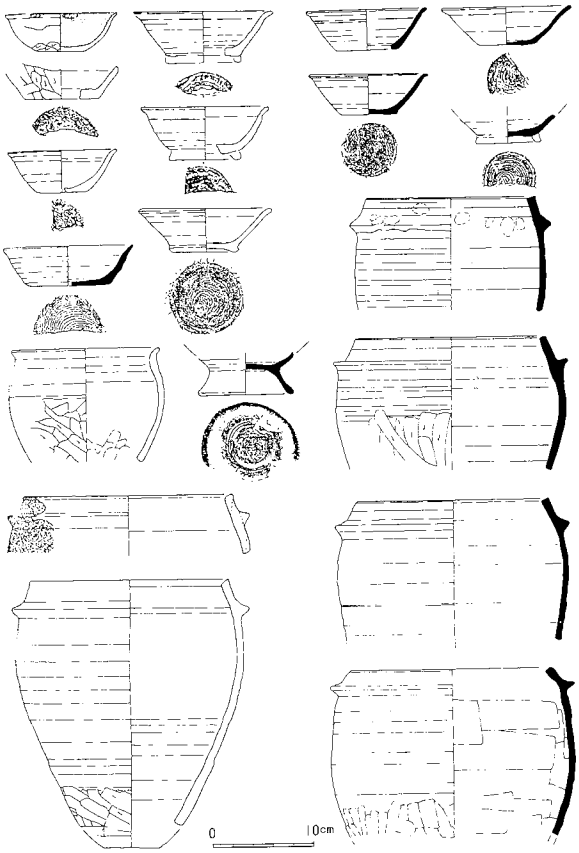


Ⅴ．H-25

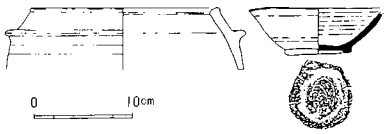


Ⅴ．H-13

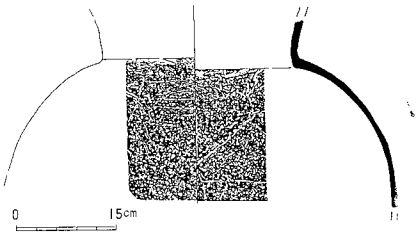
fig.29　時代別遺物（10世紀②）

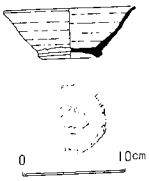


V．H-40

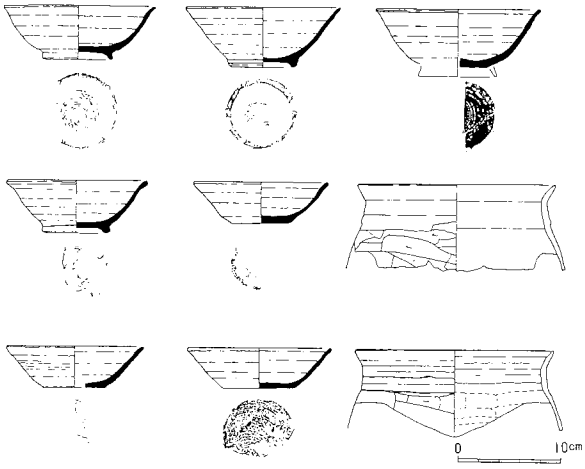


V．H-41

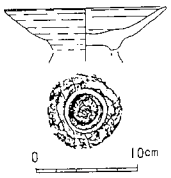




V．H-4

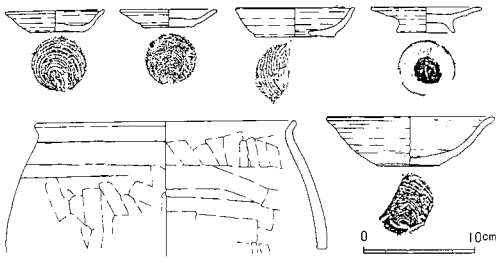


Ⅲ．Ⅳ．W-29

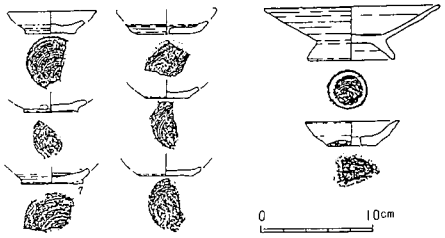


V．H-43

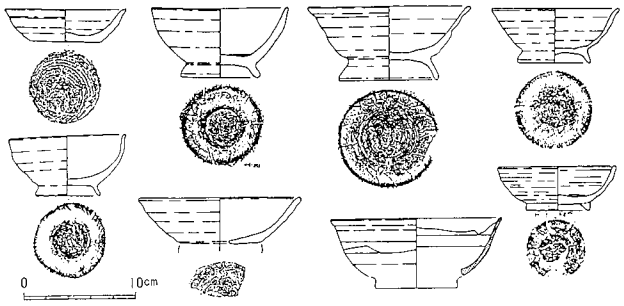
fig.30　時代別遺物（11世紀）



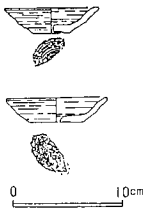
V．H-15



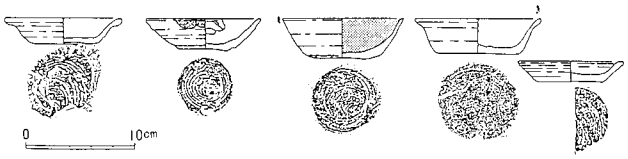
V．H-10



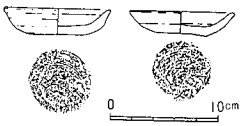
V．H-3



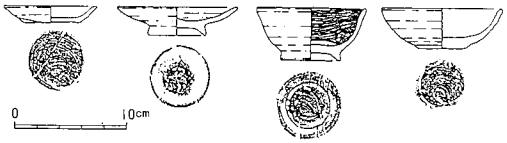
V．H-11



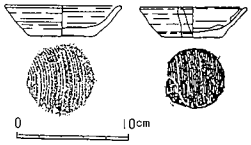
V．H-18



V．H-38



V．H-8



V．H-12

fig.31　遺物観察表①

遺　物　観　察　表

（昭和63年度出土）

住居番号	遺物番号	器　形	寸　法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調　②焼成　③残存 ④胎土　⑤備考
H１号住	42	（カワラケ状） 坏	口径　（8.6） 底径　（5.0） 器高　（1.6）	若干上げ底気味か。体部中位で弱く膨らみ、外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①浅黄橙色7.5YR8/4 ②酸化焔。やや焼きあまい。 ③全形の1/4 ④輝石、石英、軽石粒含。 ⑤器肉極めて薄い。
	6	高台付皿	口径　（13.2） 底径　7.0 器高　2.5	端部丸味有し、だれた高台体部外反して開き、口縁部で水平面形成。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台部貼付。	見込み端部ナデ調整か。	①灰色N/ ②還元焔。焼成。 ③全形の約1/2弱 ④白色軽石粒含。密。 ⑤土師質土器の類か。
H２号住	埋	（カワラケ状） 坏	口径　（8.8） 底径 （5.6～6.0） 器高　（2.4）	底部平底だがやや歪。体部外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。切り直しの可能性あり。	見込み端部指頭による調整痕認む。	①橙色5YR6/6 ②酸化焔焼成。一部吸炭。 ③体部1/4、底部1/2弱 ④白色軽石、輝石含。 ⑤
	206	（カワラケ状） 坏	口径　（10.3） 底径　6.6 器高　2.2	底部肥厚し、ほぼ平底。底部外傾して開き、上半で弱く外反する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込み端部ナデ調整。	①浅黄橙色7.5YR8/4 ②酸化焔。やや焼きむら有。 ③体部1/6。底部完存。 ④輝石、石英、軽石粒含。 ⑤
	215	高台付皿	口径　9.5 底径　5.7 器高　2.9	高台部やや足高で「ハ」の字に開く。体部大きく外傾し、見込み端部弱く窪む。	ロクロ成形。底部高台貼付後ナデ調整。体部ナデ調整。		①橙色7.5YR7/6 ②酸化焔。焼成。 ③体部1/3欠損。 ④石英、軽石粒含。 ⑤いわゆる托形。
	214	高台付塊	口径　16.0 底径　7.6 器高　5.5	高台部やや足高気味。体部大きく外傾して開き、口縁部で弱く外反。比較的丁寧なつくり。	ロクロ右回転成形。底部高台貼付後ナデ調整。		①橙色7.5YR7/6 ②酸化焔。焼きむら有。 ③体部上半1/2弱欠損。 ④長石、小石若干含。 ⑤足高高台塊の形骸化か。
H３号住	7	坏	口径　15.0 底径　7.0 器高　4.5	やや大形の器形。底部上げ底。体部はほぼ直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①内、橙色5YR6/6 外、灰褐色5YR5/2 ②酸化焔。焼成。一部吸炭。 ③体部1/2欠損。 ④石英、白色軽石含。 ⑤土師質。
	11	（カワラケ状） 坏	口径　8.8 底径　4.0 器高　1.7	底部小さく、ほぼ平底。体部短く、彎曲して立ち上る。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込み中央窪む。	①浅黄橙色10YR8/3 ②酸化焔。焼成。焼きあまい。 ③体部1/5弱欠損。 ④輝石、白色軽石含。 ⑤
	43	（カワラケ状） 坏	口径　8.8 底径　4.7 器高　1.7	底部小さく若干上げ底。片側端部突出する。体部外傾して開き、内面上半で括れる。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込み中央窪む。	①橙色5YR6/8 ②酸化焔。焼成。 ③完形 ④白色軽石含。 ⑤
	86	（カワラケ状） 坏	口径　8.9 底径　5.0 器高　1.6	底部上げ底。体部は腰部で強く外反、中位で弱く括れる。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①浅黄橙色10YR8/4 ②酸化焔。焼成。 ③体部1/2欠損。 ④白色軽石含。 ⑤
	44	甕	口径　29.2 底径　（16.0） 器高　（28.7）	底部やや大きく平底か。胴部緩く内彎、口縁部で短く外反した後、端部で内屈する。	紐つくり成形（ロクロ台使用か）。横、斜位のナデ調整（筆状工具及び指頭痕有）。	横位のナデ調整。	①明赤褐色2.5YR5/8 ②酸化焔。上半吸炭。 ③1/2 ④輝石、軽石φ6mm含。 ⑤いわゆる土釜の類か。
H７号住	23	須恵器？ 坏	口径　（14.3） 底径　7.0 器高　5.5	底部若干上げ底。体部稜をもって外傾し、上端で外反する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。比較的整った形。	見込み端部ナデ調整か。	①橙色7.5YR7/6 ②酸化焔。焼成。 ③体部4/5欠損。 ④密。 ⑤
	5	（カワラケ状） 坏	口径　9.0 底径　5.4 器高　2.1	底部わずかに上げ底。体部外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①浅黄色2.5YR8/3 ②酸化焔。一部吸炭。 ③ほぼ完形。 ④白色軽石粒含。 ⑤
	10	（カワラケ状） 坏	口径　8.0 底径　5.1 器高　1.5	極めて小形。器肉一定。底部平底。体部短く外傾する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り		①橙色7.5YR6/6 ②酸化焔。焼成。 ③完形 ④φ１cm大小石含。 ⑤
H10号住	43	土師器 坏	口径　10.4 器高　3.0	安定した丸底。体部は内彎し、口縁端部で短く内屈する。	口縁部ナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整	①橙色5YR6/6 ②酸化焔。焼成。 ③完形。 ④輝石、石英、軽石粒含。 ⑤
H12号住	78	（カワラケ状） 坏	口径　8.6 底径　5.1 器高　2.0	底部平底。体部外傾して開く。底部肥厚し、見込み中央で凸状。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①にぶい橙色7.5YR7/4 ②酸化焔。焼成。 ③体部一部欠損。 ④白色軽石粒含。 ⑤
	132	（カワラケ状） 坏	口径　（9.4） 底径　（5.2） 器高　（1.6）	底部～体部への変換点不明瞭。体部緩く内彎する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①にぶい黄橙色10YR7/4 ②酸化焔。一部吸炭。焼きしまる。 ③1/2 ④白色軽石含。 ⑤
	38、41	高台付塊 （内黒処理）	底径　8.1	高台部はやや足高。端部丸く「ハ」の字に外傾する。体部・高台部共に肥厚。	ロクロ整形。底部は高台貼付後ナデ調整。	黒色処理。	①にぶい黄橙色10YR7/3 ②半還元焔。焼成。 ③体部上半、高台1/2欠損。 ④輝石、白色軽石含。 ⑤
H14号住	694	（カワラケ状） 坏	口径　8.1 底径 4.7～5.0 器高　1.6	底部中央窪む。体部丸く立ち上り、口縁で外傾する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込み端部ナデ調整か。	①灰白色2.5Y8/2 ②還元焔気味。焼きあまい。 ③完形。 ④輝石、白色軽石含。ザラつく。 ⑤
	594	カワラケ	口径　12.1 底径　7.3 器高　3.1	底部若干上げ底。体部は下半で丸味有し、外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込み面ほぼ平坦。端部ナデ調整。	①浅黄橙色10YR8/3 ②やや白色気味強。 ③完形。 ④砂粒、礫含。赤色粒含。 ⑤粗い。
	594	カワラケ	口径　12.2 底径　8.0 器高　3.1	底部凹凸有り。体部下半で直線的に立ち上り、上半で幅広に外傾する。	ロクロ成形。底部左回転糸切り。板目痕？	見込み端部ナデ調整。	①浅黄橙色10YR8/3 ②やや白色味強。 ③完形 ④砂粒、礫、赤色粒含。粗い。
H15号住	埋	（カワラケ状） 坏	口径　（7.4） 底径　（3.6） 器高　—	体部緩やかに彎曲して開く。	ロクロ成形。底部回転糸切り。		①灰白色5Y8/2 ②やや還元焔気味。 ④小破片。 ④白色軽石粒含。 ⑤口径は８cm大と考えられる。
	948	（カワラケ状） 坏	口径　8.7 底径　4.7 器高　2.0	底部わずかに上げ底。体部は腰部で弱く括れ、外傾して開く。見込み端部で窪む。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	見込み端部ナデ調整。	①浅黄橙色7.5YR8/4 ②酸化焔。やや焼きあまい。 ③体部1/3欠損。 ④輝石、石英、軽石含。 ⑤

fig.31　遺物観察表②

住居番号	遺物番号	器　形	寸　法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調　②焼成　③残存 ④胎土　⑤備考
	937	須恵器 高台部	口径　(6.8) 器高　1.7		上端面に回転糸切り痕を残す。ロクロ整形。		①灰色7.5Y5/1 ②いぶし焼成か。 ③1/4。 ④密。 ⑤
	924	須恵器 坏	口径　(14.4) 底径　(5.7) 器高　4.7	体部やや深く、丸味をもって立ち上り、口縁部わずかに外反する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。上半ナデ調整。	見込み端部ナデ調整。	①浅黄橙色7.5YR8/3 ②酸化焔。焼成。 ③小石φ0.4cm含。ザラつく ④1/4 ⑤
	922	須恵器 坏	口径　(13.6) 底径　— 器高　(4.2)	若干上げ底気味の底部。体部は腰部で弱くくびれ、緩く彎曲して立ち上る。	ロクロ成形。底部回転糸切り。端部未調整か。		①灰黄色2.5Y7/2 ②半還元焔。焼成。 ③密。 ④1/4 ⑤内面炭化状付着物。墨入れに使用か。
H16号住	1347	(カワラケ状) 坏	口径　(8.0) 底径　(4.5) 器高　—	体部は腰部で一旦括れ、外傾して立ち上る。	ロクロ整形。底部回転糸切り。腰部ナデ調整。		①にぶい橙色7.5YR7/4 ②酸化焔。焼成。良好。 ③白色軽石含。密。 ④小破片。 ⑤
	907	(カワラケ状) 坏	口径　(9.5) 底径　4.0 器高　2.5	底部小さく突出気味。体部は腰部で強く外反、上半に向って外傾。中位でふくらむ。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。		①浅黄橙色10YR8/3 ②酸化焔。焼成。白色味。 ③体部4/5欠損。 ④ ⑤
H18・21	H18、90 H21、4	土師器 坏	口径　13.3 器高　—	模倣坏形態。口縁部移行点に明瞭な稜を有す。	口縁部横位のナデ。底部篦削り調整。	横位のナデ調整。	①橙色2.5YR6/8 ②良好。 ③1/3 ④密。 ⑤
	H18、117 H21、26 27・28・29 30・36	土師器 甕	口径　19.6 底径　— 器高　—	胴部下半に膨らみを有すか。口縁部外反する。	口縁部横位のナデ。胴部縦位の篦削り、ナデ調整。	横位のナデ調整(篦状痕有す)。	①にぶい橙色7.5YR7/4 ②やや不良。 ③上半2/3 ④砂粒含。 ⑤
H20	345	(カワラケ状) 坏	口径　(9.9) 底径　(5.3) 器高　2.1	底部若干上げ底。体部は下半で弱く括れ、外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①橙色2.5YR6/6 ②外面灰色味有す。 ③1/4弱 ④密。 ⑤
H21	埋	土師器 坏	口径　(16.2) 器高　6.3	大形。丸底の底部から外稜を有し、外傾する口縁部に至る。口唇部平担。	口縁部横位のナデ。底部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/8 ②良好。 ③密。 ④1/2強。 ⑤
	No.12	土師器 小型甕	口径　(11.3)	胴部上半丸味を有し、口縁部短く外傾して開く。	口縁部横位のナデ。胴部篦削り調整。	ナデ調整。	①明赤褐色2.5YR5/8 ②良好。 ③やや粗。 ④上半部1/2弱。 ⑤器面剥落する。
H28	埋	(カワラケ状) 坏	口径　8.7 底径　4.0 器高　2.1	底部は小さく、若干上げ底。体部は中位に膨らみをもち緩く外傾する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①浅黄橙色7.5YR8/3 ②ややあまい。 ③白色軽石含。やや粗。 ④体部わずか欠損。 ⑤
	241	(カワラケ状) 坏	口径　(8.1) 底径　— 器高　—	底部小さい。体部は中位膨らみ外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切りか。		①にぶい橙色5YR7/4 ②良好。 ③砂粒含。やや粗。 ④小破片。 ⑤やや肉厚。
	123	(カワラケ状) 坏	口径　(9.5) 底径　— 器高　—	底部やや大きい。体部短く外傾して開く。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①浅黄橙色10YR8/3 ②ややあまい。 ③砂粒含。 ④小破片。 ⑤
	300	(カワラケ状) 坏	口径　(8.3) 底径　(4.4) 器高　1.9	底部やや小さいか。体部中位わずかに膨らみ、外傾して開く。口縁部わずかに外反する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①浅黄橙色10YR8/4 ②ややあまい。 ③砂粒含。 ④1/3 ⑤
	埋	高台付坏	口径　9.2 底径　4.3 器高　2.1	底部に摘状の高台貼付。体部「ハ」の字状に外傾し、口縁部で水平面を形成。	ロクロ成形。腰部高台貼付後ナデ調整。		①淡黄色2.5YR8/3 ②ややあまい。 ③砂粒含。 ④体部1/2欠損。 ⑤
H30	埋	(カワラケ状) 坏	口径　(8.1) 底径　— 器高　—	底部若干上げ底か。体部「ハ」の字に外傾して開く。	ロクロ成形。底部回転糸切り。		①橙色7.5YR7/6 ②良好。 ③砂粒含。 ④小破片。 ⑤
H31	埋	(カワラケ状) 坏	口径　9.2 底径　5.1 器高　2.3	底部ほぼ平底。体部「ハ」の字状に外傾し、上半で弱く括れる。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①淡黄色2.5Y8/3 ②ややあまい。 ③砂粒含。やや粗。 ④完形。 ⑤底部吸炭。
H23	13、埋土	土師器 坏	口径 器高	器形歪む。外稜ややに形骸化か。口縁部短く、反り小さい。	口縁部横位のナデ。体～底部、篦削り調整。	ナデ調整。	①赤橙色10R6/8 ②良好。 ③2/3弱。 ④密。 ⑤
	39	土師器 坏	口径 器高	体部は内外面ともに稜を認むが、内面はやや形骸化か。口縁部の反り小さい。	口縁部横位のナデ。体～底部篦削り調整。	ナデ調整。	①にぶい橙色7.5YR7/4 ②良好。 ③1/2弱。 ④密。 ⑤
	35	土師器 坏	口径 器高	やや大形か。底～体部やや深く、稜明瞭。口縁部直立する。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/6 ②良好。堅緻。 ③1/4弱。 ④密。 ⑤
H22	42	土師器 坏	口径 器高	やや小形。丸底底部から緩く内彎、わずかに稜を認む。口縁部反り小さい。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/6 ②良好。 ③1/2弱。 ④密。 ⑤
	46	土師器 坏	口径 器高	やや小形。平底の底部から緩く内彎。わずかに稜を認む。口縁部反り小さい。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/6 ②良好。 ③1/3欠損。 ④密。 ⑤底部吸炭。
H24	29	土師器 坏	口径 器高	小型。底部から口縁部にかけて内彎。形骸化して稜を有す。	口縁部二段の横位ナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/6 ②良好。 ③1/2強。 ④密 ⑤
	35	土師器 坏	口径 器高	体部わずかに稜を認む。口縁部外傾して開く。	口縁部横位のナデ調整。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色7.5YR7/6 ②良好。 ③1/2強。 ④密。 ⑤

fig.31　遺物観察表③

住居番号	遺物番号	器　形	寸　法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調　②焼成　③残存 ④胎土　⑤備考
	23	土師器 小型壺	口径 器高	体部内彎して立ち上り、肩部で大きく張る。口縁部直立する。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/6 ②良好。 ③1/2強。 ④密。 ⑤
H25	65・66	土師器 坏	口径 器高	底～体部内彎して立ち上り、口縁部内・外面共に短く外傾する。いわゆる円斜口縁。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	口縁部横位のナデ。体部斜状に篦磨き調。	①橙色2.5YR6/8 ②良好。堅緻。 ③1/3強。 ④密。 ⑤
H27	103	土師器 坏	口径 器高	やや小形。底～体部緩く内彎。わずかに稜を認む。口縁部わずかに外傾。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/8 ②良好。 ③1/3欠損。 ④密。 ⑤
	94・116 156	土師器 坏	口径 器高	小形。底～体部やや浅く稜をもつ。口縁部外傾する。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/8 ②良好。 ③ほぼ完形。 ④密。 ⑤
	96	土師器 坏	口径 器高	上に同じ。口縁部やや外反気味か。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①にぶい橙色5YR7/4 ②良好。 ③1/3弱。 ④密。 ⑤
	199・205 196・197	土師器 坏	口径 器高	浅く安定した底部。わずかに稜を有す。口縁部外傾して開く。器肉薄い。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/8 ②良好。 ③口縁部2/3欠損。 ④密。 ⑤
	123	土師器 坏	口径 器高	やや安定した丸底。わずかに稜を認む。口縁部わずかに外傾する。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/8 ②良好。 ③2/3。 ④密。 ⑤
	埋78	土師器 坏	口径 器高	わずかに稜を認むが形骸化している。口縁部わずかに外傾。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/8 ②良好。 ③小破片。 ④密。 ⑤
	169	土師器 坏	口径 器高	小形。底～体部緩く内彎。稜不明瞭。	口縁部横位のナデ。底～体部篦削り調整。	ナデ調整。	①橙色5YR7/6 ②良好。 ③完形。 ④密。 ⑤
D25	埋土	(カワラケ状) 坏	口径　(8.7) 底径　— 器高　—	体部下半に丸味有し、口縁部で弱く外反する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。		①明赤褐色2.5YR5/6 ②良好。 ③小破片。 ④砂粒含。やや粗。 ⑤
D51	56・62	(カワラケ状) 坏	口径　(8.5) 底径　(4.7) 器高　1.8	底部わずかに上げ底。体部「ハ」の字状に外傾する。中位に若干の膨み。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①にぶい黄橙色10YR7/3 ②半還元焔。焼成。 ③1/4強。 ④砂粒、白色軽石粒含。やや粗。 ⑤
	64	(カワラケ状) 坏	口径　(8.9) 底径 (5.5前後) 器高　—	底径大きく、皿形を呈す。体部外傾して開き、若干膨らむ。	ロクロ成形。底部右回転糸切りか。		①橙色7.5YR6/6 ②良好。 ③1/4強。 ④砂粒含。やや粗。 ⑤
D53	2	坏	口径　(11.1) 底径　5.6 器高　3.3	底部わずかに上げ底。体部丸みをもって彎曲、中位に張りを有す。口縁部わずかに外傾。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。		①橙色5YR6/6 ②酸化焔。焼成。一部吸炭。 ③体部3/4欠損。 ④砂粒含。密。 ⑤
W1トレ	西壁灰層 灰部	高台付埦	口径　15.4 底径　9.5 器高　5.8	いわゆる足高の高台貼付。体部は「ハ」の字状に外傾し、口縁部で外反する。	ロクロ成形。腰部～底部高台貼付後ナデ調整。		①橙色5YR6/6 ②酸化焔。焼成。 ③部分的に若干欠損。 ④砂粒、礫含。粗。 ⑤いわゆる土師質型。
	埋土	高台付埦 (内外面 黒色処理)	口径　(18.0) 底径　8.6 器高　8.0	端部丸味を有す短い高台。体部は下半で丸味有し、口縁部で外反する。つくり、調整共に丁寧。	ロクロ成形。体部上底～高台部にかけて横・斜位の篦研磨。	体部横・斜位、見込部横位の篦研磨。	①明赤褐色5YR5/8 ②酸化焔。焼成。 ③体部2/4欠損。 ④密。 ⑤
I－1	10	(カワラケ状) 坏	口径　7.7 底径　5.0 器高　2.4	底部ほぼ平底で突出気味。体部は腰部で括れ、外傾して立ち上る。中位若干膨らむ。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込み端部ナデ調整か。	①にぶい橙色7.5YR7/4 ②酸化焔。焼成。ややあまい。 ③体部わずか欠損。 ④砂粒含。やや粗。 ⑤
	埋	(カワラケ状) 坏	口径　(9.4) 底径　5.5 器高　2.3	底部若干上げ底。体部直線的に外傾し、上半で弱く括れる。	ロクロ成形、底部右回転糸切り。	見込み端部ナデ調整か。	①橙色7.5YR1/6 ②ややあまい。 ③1/2弱。 ④砂粒含。 ⑤
	埋	(カワラケ状) 坏	口径　(9.4) 底径　— 器高　—	底部小さく、腰部で弱く外反し、下半で丸味を有す。口縁部わずかに外反。	ロクロ成形、底部回転糸切り。		①にぶい黄橙色10YR7/3 ②半還元焔気味。あまい。 ③1/5弱。 ④砂粒含。 ⑤
	17	坏	口径　11.5 底径　6.4 器高　3.2	底部平底。体部外傾して開き、上半で弱く外反する。	ロクロ成形。底部右回転糸切り。	見込みナデ調整か。	①橙色7.5YR7/6 ②口縁部一部吸炭。 ③ほぼ完形。 ④砂粒含。密。 ⑤
	9・16・11 14・12・18	内耳鍋	口径　26.0	口縁部内傾。内稜は弱い「く」の字状。耳は一ヶ所のみの遺存。装着は比較的丁寧。	胴部上端～口縁部、横位のナデ。胴部斜位の篦削り。	ナデ調整（篦状痕有）。	①灰色5Y4/1 ②良好。 ③上半2/3 ④やや軟調。 ⑤

陶磁器観察表

1	足高高台	愛知陶磁器資料館では足高高台の範壔に入るが、有田では広東形碗とよぶ。文様は外面に笹状。底部内面に簡略化した五弁花を描く。貫入が全体的に入っている。山呉須使用。江戸後期、19ｃ。
2	擂鉢	口縁が３段になっており、そのうちの真中のヤマは小さい。おろし目は無釉だが外側は光沢のある鉄釉をかけている。胎土は、白色鉱物を含み黒色は少量である。自性寺系？
3	擂鉢	鉱釉かけ。胎土は白色・黒色鉱物を少量含む。幕末～明治、19ｃ。
4	火鉢	瀬戸美濃系の火鉢。外面に銅緑釉、底部外面にさび釉、高台端部（畳つき）は無釉。
5	紅皿	型押しの蝋唐草。内面と口縁部外面に透明釉を施す。伊万里系（肥前系）磁器。18ｃ後半～19ｃ。
6	端反碗	伊万里系。焼けひずみがある。外面に簡略化した花と丸紋を、内面に秋草状文様を描く。19ｃ前半。
7	水甕	内外面に灰釉を施す。細かい貫入が入る。19ｃ。
8	端反碗	瀬戸美濃系。外面が麦わらか。呉須。19ｃ中葉。
9	ひょうそく	不明
10	油壺	梅模様は山呉須使用。伊万里系。時期不明だが、18～19ｃ。
11	土瓶の蓋	銅と鉄釉の上に透明釉の化粧がけ。益子？。幕末～明治。
12	ぐいのみ	銅版に呉須をつけて紙に印刷し、それを碗につける銅版プリントによる文様。

fig.32 瓦観察観察表①　瓦　観　察　一　覧　表

（昭和63年度出土）

出土地	瓦の種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法							整形技法					摘要
			美地	夾雑物	焼き上り	色調	粘土版面取 凹面	粘土版面取 凸面	一枚作り	桶寄木痕	粘土版合せ目	布の合せ目	叩目	轆轤痕	箆削	布の擦消 凹面	布の擦消 凸面	側部面取	
W-1トレ E2北 69	女	1.8	密	含	硬	灰	なし	なし		○	なし	○	素文	なし	なし	部分			乗附
W-1トレ 埋土 106	女	1.8	密	微	並	灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	なし			秋間
W-1トレ 埋土 139	女	1.8	密	微	並	淡灰	なし	なし		?	なし	○	素文	なし	なし		なし		秋間
W-1トレ E2北 37、140	男	1.6	密	含	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		乗附
W-1トレ E2北埋土 141	男	2.2	密	含	しまり	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		乗附
W-1トレ 埋土 144	男	1.8	密	微	並	黄灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
W-1トレ 21	男	1.3	密	含	硬	しまり	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	2	笠懸
W-1トレ 20	男	1.9	密	微	並	黄灰	なし	○		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		笠懸
W-1トレ Ⅰ-1埋土 153	男	1.7	密	微	並	白灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
W-1トレ E2北埋土 154	男	1.7	密	含	軟	暗褐	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
W-1トレ Ⅰ-1埋土 156	男	1.3	密	含	並	淡褐	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	1	笠懸
W-1トレ 埋土 158	男	1.2	密	含	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
W-1トレ E2北 4	男	2.0	密	含	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		秋間
W-1トレ 埋土 162	男	1.4	密	含	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
W-1トレ 埋土 163	男	1.9	密	含	軟	黄灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		笠懸
W-1トレ E2北 73、120	女	1.3	密	含	軟	赤褐	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
W-1トレ 埋土 123	男	1.5	密	含	硬	灰	なし	○		?	なし	なし	素文	?	なし		なし		吉井
W-1トレ B層埋 125	女	1.9	密	含	しまり	黒灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	○	なし	なし			乗附
W-1トレ 埋土 133	男	1.7	密	微	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	○		なし	2	笠懸
W-1トレ 埋土 135	男	1.1	密	多	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		吉井
W-1トレ 埋土 8	女	1.6	密	含	硬	白灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間、凹面ヘラキズ有
W-1トレ 埋土 13	女	2.2	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間、凹面自然釉付着
W-1トレ E2北 70	女	1.7	密	微	硬	灰	なし	なし		○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし		3	秋間
W-1トレ 西壁表採 31	女	1.3	密	多	硬	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし			3	秋間
W-1トレ E2北 33	男	2.3	密	含	硬	灰	なし	なし		半裁	なし	なし	素文	○	なし		なし		乗附
W-1トレ E2北埋土 14	女	1.9	密	多	硬	灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			乗附、凸面ハゼ有
W-1トレ E2北埋土 134	男	1.5	密	含	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		乗附
W-1トレ E2北 116	男	1.8	密	微	硬	黒灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	2	笠懸
W-1トレ E2北 1、112	女	1.3	密	含	硬	淡灰	○	なし	○	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			乗附
W-2トレ 埋 104	女	2.2	密	含	しまり	灰	なし	なし		○	○	なし	素文	○	なし	○		3	乗附
W-2トレ 深堀埋 105	女	2.0	密	微	硬	灰	なし	なし	○	?	なし	なし	素文	○	なし	なし			秋間
W-2トレ 109	女	1.3	密	含	硬	灰	なし	なし	○	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし		3	笠懸
W-2トレ 埋土 110	女	1.6	密	含	並	淡灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			笠懸
W-2トレ 埋土 145	男	1.8	密	含	軟	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		不明
W-2トレ 埋土 151	男	1.6	密	微	しまり	灰	なし	なし		?	○	なし	素文	○	なし		なし		秋間
W-2トレ 埋土 161	男	1.1	密	微	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	2	笠懸
W-2トレ 埋土 164	男	1.0	密	多	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	1	吉井
W-2トレ 埋土 165	女	1.6	密	微	硬	黒灰	○	なし	?	?	なし	なし	格子	なし	なし	なし			笠懸
W-2トレ 埋土 166	女	2.0	密	多	軟	赤褐	なし	なし	○		○	なし	素文	なし	なし	なし			笠懸
W-2トレ 埋土 167	女	1.4	密	含	硬	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	網物	なし	なし	なし		1	乗附
W-2トレ 埋土 171	男	1.1	密	微	並	暗褐	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
W-2トレ 埋土 172	女	1.9	密	含	硬	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
W-2トレ 埋土 21	女	2.1	密	含	硬	暗褐	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし		2	乗附
W-2トレ 埋土 25	女	1.2	密	含	しまる	黒灰	○	なし		○	なし	なし	縄単	なし	なし	なし			乗附
W-2トレ 埋土 26	男	1.8	密	微	軟	灰	なし	なし		半裁	○	○	縄消	○	なし		なし	3	秋間
W-2トレ 埋土 3	女	2.1	密	少	硬	白灰	なし	なし	○	○	○	○	縄丁	なし	なし	なし			秋間
W-2トレ 埋土 11	女	1.5	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
W-2トレ 埋土 18	女	1.7	密	含	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄丁	なし	なし	なし		1	秋間
W-2トレ 20、23	女	1.5	密	微	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間、布目
W-2トレ 埋土 12	女	1.9	密	含	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
W-2トレ 埋土 128	女	1.1	密	微	並	赤褐	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		1	乗附
W-2トレ 埋土 173	男	1.1	密	微	しまり	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		乗附
W-2トレ 埋土 174	男	1.4	密	多	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井

fig.32　瓦観察観察表②

出土地	瓦の種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法							整形技法					摘要
			美地	夾雑物	焼き上り	色調	粘土版面取 凹面	粘土版面取 凸面	一枚作り	桶寄木痕	粘土版合せ目	布の合せ目	叩目	轆轤痕	篦削	布の擦消 凹面	布の擦消 凸面	側部面取	
W-2トレ 埋土 175	女	不明	密	微	軟	赤褐	なし		?	?	なし	なし				なし			秋間
Xトレ 埋土 5	女	1.9	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	?	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
Xトレ 埋土 6	女	1.8	密	多	硬	灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄丁	なし	なし	なし			秋間
Xトレ 埋土 7	女	1.4	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし		2	秋間
Xトレ 西深堀 9	女	2.3	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
Xトレ 埋土 17	女	1.8	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間、凸面自然釉付着
Xトレ 埋土 19	女	1.7	密	微	軟	白灰	なし	なし	?	?	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
Xトレ 埋土 20	女	1.9	密	含	硬	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
Xトレ 埋土 22	女	1.5	密	微	硬	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし		3	秋間、布目
Xトレ 埋土 24	女	1.2	密	含	しまる	黒灰	なし	なし		○	なし	なし	縄単	なし	なし	なし			乗附
Xトレ 表採 27	男	1.7	密	少	軟	黄	なし	なし		半裁	?	なし	縄消	なし	なし		なし		秋間
Xトレ 埋土 30	男		密	少	硬	白灰	なし	なし		半裁	なし	なし	縄多	なし	なし		なし		秋間
Xトレ D-3G 10	女	1.8	密	少		暗灰	○	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし			乗附
Xトレ D-3G 16	女	1.2	密	多	硬	灰	なし	なし	○	?	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			乗附
Xトレ 西深堀 3、102	女	1.9	密	含	並	黄灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	ナデ	なし	なし			乗附
Xトレ 表採 107	女	1.3	密	含	硬	黒灰	なし	なし	○	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			笠懸
Xトレ 埋土 108	女	1.7	密	含	硬	灰	なし	なし	○	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	笠懸
Xトレ 埋土 111	女	1.2	粗	含	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井、終末類
Xトレ 埋土 113	女	1.6	密	含	硬	白灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	○	なし	なし			乗附
Xトレ C-3G 114	女	1.6	密	含	並	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし		1	乗附
Xトレ 表採 115	女	1.1	密	含	並	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	○			乗附
Xトレ 表採 116	女	1.3	密	含	並	白灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			乗附
Xトレ D-4G 119	女	1.4	密	含	並	暗灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
Xトレ 埋土 136	男	1.4	密	微	軟	黄灰	なし	なし		?	なし	○	素文	なし	なし		なし	2	秋間
Xトレ D-3G 138	男	1.3	密	微	軟	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		秋間
Xトレ 表採 142	男	1.7	密	含	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		笠懸
Xトレ 埋土 147	男	1.0	密	微	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
Xトレ 埋土 148	男	1.8	密	多	軟	淡褐	なし	なし		?	○	なし	素文	なし	なし		なし		不明
Xトレ C-3G 149	男	1.3	密	多	しまり	黒灰	なし	○		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井
Xトレ 埋土 150	男	1.1	密	含	硬	黒灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
Xトレ 表採 152	男	1.7	密	含	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		笠懸
Xトレ 表採 155	男	1.3	密	含	軟	白灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	2	秋間
Xトレ 表採 157	男	1.8	密	含	軟	赤褐	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	1	不明
Xトレ 埋土 159	女	1.7	密	含	しまり	暗灰	なし	なし	?	なし	なし	なし	素文	なし	なし	なし			不明
Xトレ 埋土 160	男	1.5	密	微	並	灰	なし	なし			?	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
Xトレ 表採 170	男	不明	密	多	並	灰		なし		?	なし	なし	素文				なし		吉井
Xトレ 表採 121	女	1.4	密	含	硬	黒灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
Xトレ 埋土 127	女	1.7	密	微	軟	黒灰	○	なし	?	?	なし	なし	格子	なし	なし	部分			笠懸
Xトレ 表採 131	男	1.3	密	微	しまり	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
Xトレ 埋土 132	男	1.7	密	多	硬	黒灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	1	吉井
H-1 1	女	1.7	密	含	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし		2	秋間
H-1 7、103	女	1.8	密	含	硬	灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	部分		2	乗附
H-1 カマド袖材 6	女	1.8	密	微	硬	灰	○	なし	なし	○	なし	なし	素文	○	なし	なし		2	秋間、スミ切りカマド袖材4点
H-2 45	女	1.5	密	微	軟	黄灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			秋間
H-2 13	女	2.1	密	含	並	黄灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	ナデ	なし	なし			乗附
H-2 172 H-7接合 9	女	1.6	密	少	硬	白灰	○	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
H-2 51	女	2.1	密	多	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄丁	なし	なし	なし		1	秋間
H-2 161	女	1.7	密	含	硬	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	○		1	秋間
H-2 182	女	1.8	密	多	硬	白灰	○	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
H-2 205	女	1.8	密	少	硬	白灰	なし	なし	?	?	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
H-2 185	女	1.7	密	含	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	3回	なし			秋間
H-2 7	女	1.3	密	含	しまる	灰	なし	なし		○	なし	なし	縄単	なし	なし	なし		1	乗附
H-3 120	女	1.7	密	微	軟	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄単	なし	なし	なし		3	秋間

fig.32　瓦観察観察表③

出土地		瓦の種別	厚さ	胎土 美地	胎土 夾雑物	焼成 焼き上り	焼成 色調	成形技法 粘土版面取 凹面	成形技法 粘土版面取 凸面	成形技法 一枚作り	成形技法 桶寄木痕	成形技法 粘土版合せ目	成形技法 布の合せ目	成形技法 叩目	整形技法 轆轤痕	整形技法 篦削	整形技法 布の擦消 凹面	整形技法 布の擦消 凸面	整形技法 側部面取	摘要
H-4	82	男	1.6	密	含	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
H-4	10	男	1.7	密	微	軟	淡灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	○		なし		吉井
H-4	89	男	1.3	密	多	硬	灰	なし	なし		半裁	なし	なし	縄多	なし	なし		なし	4	乗附
H-4 埋土	137	男	1.5	密	微	軟	白灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
H-4	38	男	1.8	密	多	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		吉井
H-4	21	女	1.5	密	含	しまる	灰	なし	なし		○	なし	なし	縄単	なし	なし	なし		1	乗附
H-4	83	女	1.9	密	多	並	白灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし		2	秋間、二次焼成
H-6	6	男	1.5	密	含	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		笠懸
H-6	24	男	1.4	密	含	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		笠懸
H-6	81	女	3.3	密	含	並	黄灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	なし			乗附
H-6	19	女	1.9	密	含	硬	白灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
H-6 埋土	29	男	1.2	密	少	硬	灰	なし	なし		半裁	なし	なし	縄多	なし	なし		なし	3	秋間
H-7	19	女	1.7	密	含	硬	灰	○	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
H-7 埋土	122	女	1.8	密	含	軟	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-7 埋土	101	女	2.0	密	含	しまり	灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	○	なし	なし			乗附
H-7	6	男	1.2	密	微	並	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	2	吉井
H-8	5	女	1.2	密	多	並	白灰	なし	なし	○	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		2	吉井
H-9	2	女	1.9	密	少	硬	暗灰	なし	なし	?	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			乗附、秋間
H-10	15	女	1.8	密	多	硬	灰	○	なし	?	?	なし	なし	素文	○	なし	なし		3	吉井
H-12	106	男	1.7	密	含	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
H-12	137	女	2.8	密	多	硬	褐	○	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-12	130	女	1.6	密	多	並	黒灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-14	224	男	1.4	密	多	しまり	黒灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	1	乗附
H-14	504	女	1.6	密	含	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-14	695	男	1.6	密	微	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	2	笠懸
H-14	666	男	1.7	密	多	硬	黒灰	なし	○		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		吉井
H-14	644	男	1.3	密	多	硬	灰	なし	○		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし	2	吉井
H-14	531	男	1.5	密	含	しまり	暗灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		不明
H-14	657	男	1.1	密	含	しまり	黒灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	2	笠懸
H-14	126	女	1.9	密	多	硬	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-14	92	女	1.6	密	多	軟	灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-14	789	女	1.7	密	多	硬	暗灰				ヒモ		なし	素文	?	なし	○			吉井、ヒモ作り
H-14	437	男	1.5	密	多	硬	灰	なし	○		?	なし	なし	素文	○			なし		吉井
H-15	519	女	1.9	密	含	並	淡灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			乗附
H-15	145	女	1.2	密	多	並	暗褐	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		1	吉井
H-15 埋土	117	女	0.8	密	含	軟	黄灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		1	吉井
H-15 埋土	146	男	1.8	密	微	軟	淡灰	なし	○		?	なし	なし	素文	○	なし		なし	2	秋間
H-15	950	男	1.8	密	微	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		秋間
H-15	841	男	不明	密	微	軟	淡灰		なし		?	なし	なし					なし		秋間
H-15	474	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし			○	なし	なし				なし			秋間
H-15	471	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし		?	?	なし	なし				なし			秋間
H-15	12	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし		?	?	なし	なし				なし			秋間
H-15	501	男	1.6	密	含	並	黒灰	○	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井
H-15	92	女	1.9	密	微	軟	淡黄	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			秋間
H-15	44	女	1.6	密	少	硬	灰	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			乗附
H-16	952	男	1.3	密	微	しまり	黒灰	なし	なし		半裁	なし	なし	素文	○	なし		なし		乗附
H-16	40	女	1.6	密	含	並	淡灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	○			乗附
H-16	103	女	1.8	密	含	硬	淡灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			乗附
H-16	15	女	1.5	密	多	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
H-16	968	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし		?	なし	なし	なし				なし			秋間
H-16	1381	女	1.6	密	微	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし		3	秋間、布目
H-16	1486	女	2.0	密	微	硬	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし		3	秋間、布目
H-16	1255	男	1.4	密	微	並	灰	○	なし		半裁	なし	なし	縄消	○	なし		なし		秋間

fig.32　瓦観察観察表④

出土地		瓦の種別	厚さ	胎土 美地	胎土 夾雑物	焼成 焼き上り	焼成 色調	成形技法 粘土版面取 凹面	成形技法 粘土版面取 凸面	成形技法 一枚作り	成形技法 桶寄木痕	成形技法 粘土版合せ目	成形技法 布の合せ目	成形技法 叩目	整形技法 轆轤痕	整形技法 篦削	整形技法 布の擦消 凹面	整形技法 布の擦消 凸面	整形技法 側部面取	摘要
H-16	715	男	1.3	密	少	硬	灰	なし	なし		半裁	なし	なし	縄多	なし	なし		なし		秋間
H-16	6	男	1.4	密	多	硬	白灰	なし	なし		半裁	なし	なし	縄多	なし	なし		なし		秋間
H-16	681	男	1.9	密	多	硬	灰	○	なし		半裁	なし	○	縄多	なし	なし		なし		秋間、ヨコナデ
H-17	2	女	2.1	密	含	硬	灰	○	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし		1	秋間、凸面はなれ砂
H-18	18	女	1.4	密	微	硬	灰色	○	なし	○		○	なし	素文	○	なし	なし		2	笠懸
H-18	35	女	1.9	密	多	並	暗灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-20	247	女	2.3	密	多	並	灰褐	○	○	○	○	なし	なし	縄丁	なし	なし	なし			秋間
H-20	317	男	1.5	密	微	軟	白灰	なし	なし		○	なし	○	素文	○	なし		なし		秋間
H-27 埋土	124	男	1.0	密	含	並	淡灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		秋間
H-27 埋土	4	女	1.8	密	少	硬	白灰	なし	なし	なし		?	なし	縄多	なし	なし	○		3	秋間
H-27 埋土	15	女	1.5	密	多	硬	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
H-27 埋土	28	男	1.3	密	少	硬	灰	なし	なし		半裁	なし	なし	縄多	なし	なし		なし		秋間
H-27	279	女	1.9	密	微	並	淡黄	なし	なし	○	なし	なし	なし	縄消	なし	なし	なし		1	秋間
H-27	234	女	1.7	密	多	並	黒灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-27	320	男	1.9	密	多	硬	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井
H-27 埋土	169	男	不明	密	微	軟	黄灰		なし		?	なし	なし					なし		秋間
H-27 埋土	126	男	1.2	密	多	しまり	暗灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	?	なし		なし		乗附
H-27 埋土	129	男	1.8	密	多	硬	黒灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井
H-27	235	女	1.7	密	多	硬	灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
H-27	286	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし		?	?	なし	なし				なし			秋間
H-27	605	女	不明	密	微	並	淡灰	なし		?	?	なし	なし				なし			乗附
H-29	206	女	1.4	密	含	軟	黄灰	○	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
H-29 埋土	143	男	1.5	密	多	硬	暗褐	なし	なし		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井
H-29	220	男	1.1	密	含	硬	淡褐	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		笠懸
H-29	211	男	不明	密	含	軟	白灰		なし		?	○	なし					なし		笠懸
H-29	203	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし		?	?	なし	なし				なし			秋間
H-29 埋土	168	女	不明	密	微	軟	黄灰	なし		?	?	なし	なし				なし			秋間
H-29	118	女	1.4	密	含	硬	淡灰	なし	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-29 埋土		女	2.8	密	多	硬	暗灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
H-29	195	女	1.6	密	多	並	黄桃	なし	なし	○	○	なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間
H-29	73	女	1.3	密	多	硬	淡灰	○	なし	?	?	なし	なし	素文	なし	なし	なし			吉井
H-29	235	女	1.5	密	多	並	灰	なし	なし	○		なし	なし	素文	なし	なし	なし		2	吉井
H-29	15	男	1.3	密	微	しまり	灰	なし	なし		?	なし	なし	素文	○	なし		なし		乗附
H-29 埋土	130	男	1.3	密	多	軟	暗褐	なし	○		?	なし	なし	素文	なし	なし		なし		吉井
24トレ 埋土	2	女	1.5	密	含	硬	灰	なし	なし	○		なし	なし	縄多	なし	なし	なし			秋間

瓦産地別

区別	男瓦	女瓦	計
秋間	26	50	76
吉井	18	23	41
乗附	10	30	40
笠懸	24	6	30
不明	4	1	5
	82	110	192

区別	男瓦	女瓦	計	区別	男瓦	女瓦	計	区別	男瓦	女瓦	計
W−1	18	11	29	H−7	1	2	3	H−17	0	1	1
W−2	8	17	25	H−8	0	1	1	H−18	0	2	2
Xトレ	15	23	38	H−9	0	1	1	H−20	1	1	2
H−1	0	2	2	H−10	0	1	1	H−28	6	7	13
H−2	0	10	10	H−12	1	2	3	H−30	5	8	13
H−3	0	1	1	H−14	7	4	11	24トレ	0	1	1
H−4	5	2	7	H−15	4	8	12				
H−6	3	2	5	H−16	5	6	11	計	79	113	192

PL. 1　遺跡遠景

元総社明神遺跡遠景(航空写真)　(昭和63年10月撮影)

PL. 2　遺跡周辺

本遺跡より榛名山頂(北西の方角)をのぞむ
左手に見えるのが榛名山と「宮鍋様」の木立

本遺跡地より赤城山(北東をのぞむ)

PL.3　遺構

1. W－1　トレンチ全景(北から)

2. W－2　トレンチ(東から)

3. 20トレンチ全景(西から)

4. 21トレンチ全景(東から)

5. 22トレンチ西側全景(東から)

6. 22トレンチ東側全景(西から)

7. 24トレンチ全景(東から)

8. Xトレンチ全景(南から)

PL. 4　遺構

1. H－1号住居址(北から)

2. H－2号住居址(北から)

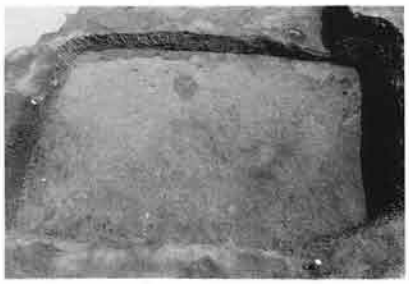
3. H－2号住居址 カマド(西から)

4. H－3号住居址(東から)

5. H－5号住居址(北から)

6. H－6号住居址(西から)

7. H－7号住居址(西から)

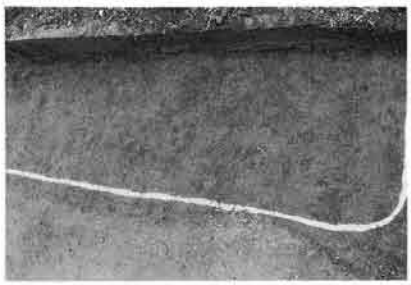


8. H－8号住居址(西から)

PL. 5　遺構

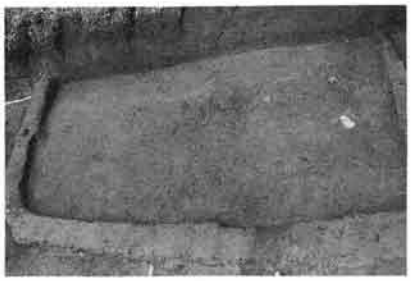
1. H－10号住居址(西から)

2. H－11号住居址(西から)



3. H－13号住居址(北から)

4. H－15号住居址(東から)



5. H－16号住居址(東から)

6. H－17号住居址(北から)

7. H－19号住居址(東から)

8. H－22号住居址(南から)

PL. 6　遺構

1. H－24号住居址(西から)

2. H－25号住居址(東から)

3. H－26号住居址(東から)

4. H－26号住居址 カマド(南から)

5. H－27号住居址(東から)

6. H－28号住居址(東から)

7. H－29号住居址(西から)

8. H－30号住居址(東から)

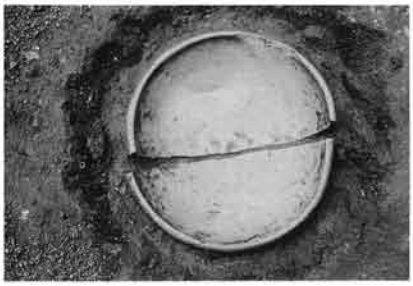
PL. 7　遺構

1. I－1　井戸址(北から)

2. I－2　井戸址(東から)

3. I－2　馬の歯出土状態

4. H－9　遺物出土状態



5. H－10　遺物出土状態

6. H－14　遺物出土状態

7. H－23　遺物出土状態

8. H－24　遺物出土状態

PL. 8　遺構

1. 22トレンチ 耕作遺構？（東から）

2. 23トレンチ全景（東から）

3. H－26号住居址東側周溝（南から）

4. W－1 東肩（西から）

5. W－1 西肩（東から）

6. W－1 南壁地断（北から）

PL. 9　遺物

H-1　No42

H-1　No 6

H-2　No埋

H-3　No 7

H-2　No214

H-2　No215

H-6　No11

H-6　No16

H-6　No43

H-10　No54

H-10　No43

H-7　No23

H-10　No44

H-10　No 5

H-12　No78

H-12　No38

PL.10 遺物

H-14 No94

H-15 No937

H-15 No埋

H-15 No948

H-14 No594

H-15 No922

H-15 No924

H-14 No595

H-16 No1347

H-16 No907

H-20 No12

H-18 No90

H-22 No13

H-20 No27～36

H-21 No46

H-22 No39

H-20 埋

H-21 No42

H-22 No35

H-23 No23

H-23 No29

H-23 No35

PL.11　遺物

H-24 No25

H-26 No78

H-26 No169

H-26 No199

H-26 No116

H-26 No103

H-26 No123

H-26 No96

H-27 埋

H-27 No300

H-27 No241

H-27 No123

H-27 埋

H-25 埋

H-25 No27

I-1 埋

H-29 埋

PL.12 遺物

D-25 埋

D-51 埋

D-51 No64

D-53 No2

I-2 埋

I-2 No10

I-2 No17

I-2 埋

I-1 埋

W-1 トレンチ西壁層部

E-2-南 No14

I-2 No9.16

W-1 トレンチ埋

H-20 No345

W-1 埋

H-31 埋

PL.13 遺物

I-1 埋

I-1 埋⑨

I-1 埋⑩

I-1 埋

W-1 埋①

I-1 埋⑧

I-1 埋②

I-1 埋③

I-1 埋④

I-1 埋

I-2 No76

I-2 No83

I-2 No75

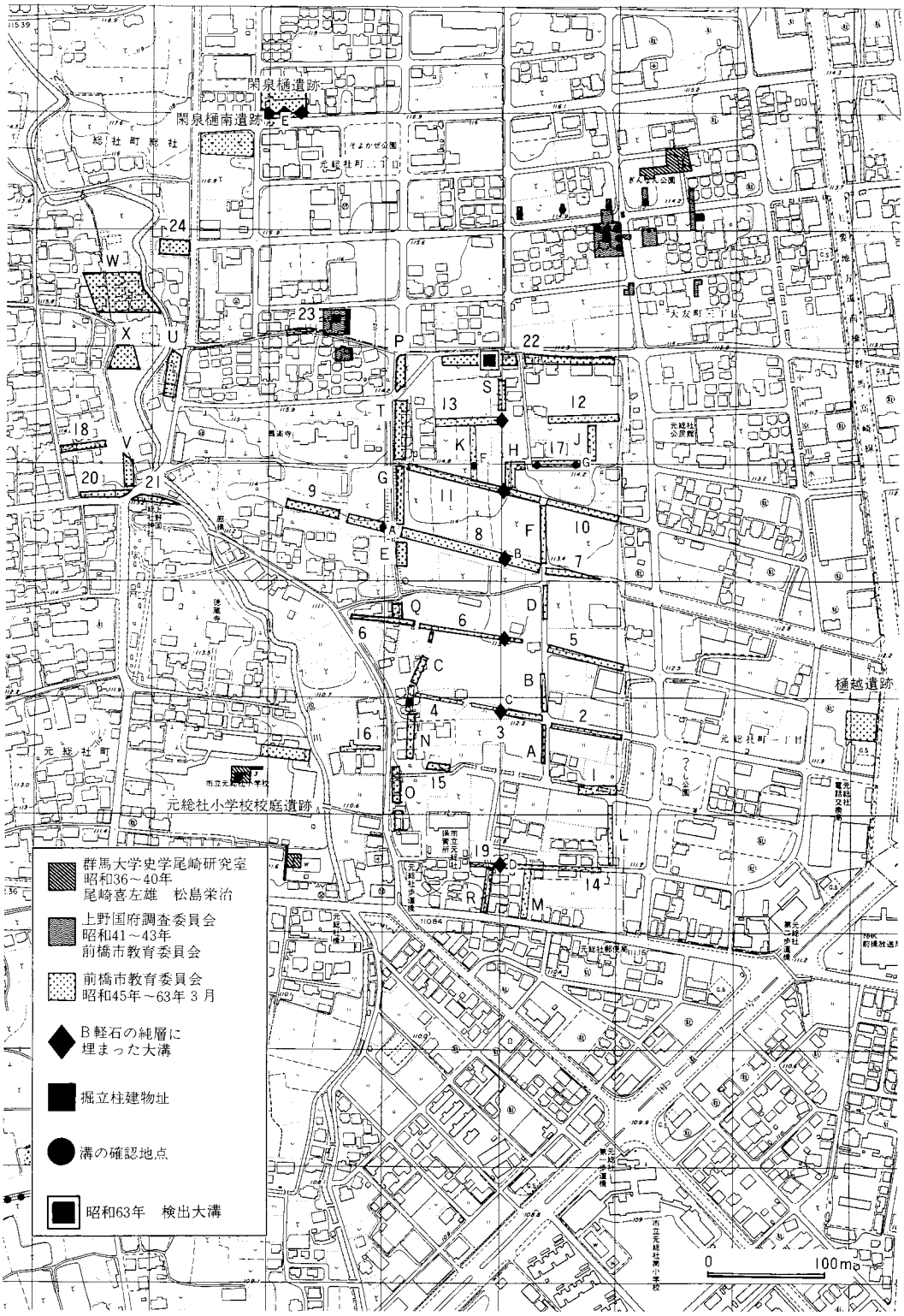
D-37

I-4 埋

W-2 トレンチ 埋

I-2 No-79

PL.14　国府調査のあゆみ



元総社明神遺跡VII

平成元年３月20日　印刷
平成元年３月25日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町６６４－４

印刷　上毎印刷工業株式会社
前橋市天川大島町３０５－１